

第6回

西の正倉院

みさと文学賞

作品集

「西の正倉院みさと文学賞」実行委員会・編

## 第6回 「西の正倉院みさと文学賞」に寄せて

美郷町は、448平方キロメートルの広大な大地に培われた文化や地域資源を掘り起こし、新たな文化的価値を創造していくため、本町の町づくりにもシンボリックな「西の正倉院」を冠した文学賞を創設した。今回は第6回である。

「私の歌はその時々私の生命の碎片である」

美郷町に隣接する東郷町坪谷（現日向市）で生まれ育った国民的歌人若山牧水が第二歌集『獨り歌へる』でこう記している。「人生は旅である」と考える牧水にとって、自分がつくる歌は「一度往いては再びかへらない」「二歩々々のひゞき」であり、「生命の碎片」なのである。この思いは、今回「西の正倉院みさと文学賞」にご応募いただいた、44作品すべての応募者の気持ちに通じるのではないだろうか。テーマを考え、ストーリーを構成し、ことばを選び、紡いでいく行為をもって、1万2000字で読者に語りかける。どれだけのエネルギーを使うのであろうか。私たち関係者も本事業で「一隅を照らす」気概と希望をもって、「企業版ふるさと納税」の協力企業のご理解とご支援を賜りながら、この文学賞の運営に取り組んできた。

そして今回も選者も絶賛する高度な作品44点の応募があった。あらためてご応募いただいた方々に敬意を表するとともに感謝の意を表したい。また事業遂行にあたってご尽力いただいた審査員長の作家・

中村航先生、地域創生プロデューサーの高野誠鮮先生、民俗学者の達志保先生、日本放送作家協会前理事長のさらだたまこ先生、受賞作品のラジオドラマ制作放送にご尽力いただいたMRTの小倉哲プロデューサー、編集人の鈴木収春氏、この企画をプロデュースして支えていただいた本間修二氏、その他関係者の皆さんにも厚く感謝申し上げます。先生方のご支援なくしてなしえなかった文学賞である。

こうして、これまでのいつも美麗で落ち着いた装幀で作品が収められてきた文学集5冊に、新たに第6回の作品集が加わった。よく歴史は遷ると言う。時の流れとともに目の前の生活も社会のあり方も変化する。人類は、この間コロナウイルスと闘った。今後も森林の乱伐や永久凍土の急速な融解によって新たなウイルスが人類を襲うと指摘する学者もいる。昨年、美郷町では、「美郷文芸エッセイ賞」を創設したが、テーマは「コロナ禍」であった。未曾有のパンデミックを国民的な視点で残すことが、目的であったが、この賞は、「西の正倉院みさと文学賞」の産物であった。

美郷町の大自然は、四季折々の風情を装いながら生き続けている。時に自然は、災害をもたらすこともあるが、いつも私たちは、自然と共存共栄を図りながら、豊かな生活を求めている。その延長として、地域文化の視野で描かれるこの第6回「西の正倉院みさと文学賞」入賞作品集が地元のみなさんらももちろん、多くの人に読まれ、感動を呼び、コロナ禍で希薄化されたという人間関係の清涼剤となることを確信している。そして、さらに地域に眠る物語資源を掘り起こし、文学的土壌が広がっていくことを願っている。

宮崎県美郷町

目次

第6回「西の正倉院みさと文学賞」に寄せて

宮崎県美郷町

2

総評 作家 中村航

6

大賞

「オン・ファイア」T・S・デミ

9

優秀賞

講評 日本放送作家協会前理事長 さらだたまこ

28

「火伏せ地蔵」いっき

31

講評 日本放送作家協会理事 羽田野直子

52

「倭の月」やまと松本英太郎

55

「夢のまた夢の」雪柳あうこ

83

「帰る場所」原田なぎさ

109

「大猪子」洞北亮

131

「ふたつの約束」白石未知

157

「その郷は」羽鳥郁

179

「ロードフレーム」潮路奈和

203

一次審査通過作品リスト

232

お知らせ

233

## 総評

作家  
中村航

第六回で一区切りとなった「みさと文学賞」だが、ここまで多くの作品を、書籍化などの形で世に出すことができた。美郷町に眠る物語を掘り起こし、小説という手段で、広く、深く、楽しく知ってほしいという試みは、大きな成果を得たのではないか。今回の選考は、その集大成のような気持ちで臨ませてもらった。

大賞に選ばれたのは「オン・ファイア」。現代的な筆致が気持ちよく、同時に現代的な問題意識を含みつつもエンターテインメントとして良くまとまっております、とても面白く読めた。

恋人にフラれたことをまだ受け入れられていない主人公が、復縁に淡い期待を寄せ、美郷町への旅をする。師走祭りに参加した主人公は、カナダ人の旅行者と出会い仲良くなるが、二人はやがて長く続いた文化に対する見解の違い、という問題に直面する。

旅を経た主人公が、恋人への思いを変化させていく様にはリアリティがあつて、若い頃の自分を思い出してみれば身につまされるようだ。だがここでのそれはサービスクットのようなものだろう。重要なのは、主人公が旅をして成長する、というオーソ

ドックスな物語のなかで、傍観者<sup>〃</sup>だった主人公が、この現代的な問題の当事者<sup>〃</sup>になった（なろうとした）という点だ。

その成長に寄与しているのが「師走祭りの美しさ」で、特に部外者から見たその美しさを、上手く描いている。ぜひ、多くの人に読んでほしい作品だと思う。

優秀賞の二作について、詳しい選評は他に譲るが、「火伏せ地蔵」は、今までこの賞で触れられなかった新しい題材をうまく調理できていたと思う。語り口調で語られるこの人情溢れる話は、黙読していても音が聞こえてくるようだった。

同じく優秀賞の「倭の月」も、今まで触れられなかった題材を扱っており、こちらはスーパースターテインメントという感じだった。現代と太閤・秀吉の時代を行き来する活劇で、その外連味が気持ち良かった。選考会ではシリーズ化できるのでは？という声があがっていた。

審査員特別賞の「夢のまた夢の」は、前世の記憶を持つ親友と、それを忘れてしまった主人公の二人が、美郷町へ旅をする物語だ。苦悩する親友と、その苦悩に苦悩する主人公。美郷町で前世の記憶（禎嘉王とその臣下の交わした約束）を思い出した主人公は、もう一度と、来世においてもそれを忘れないことを誓うのだが、その舞台となった恋人の丘で鐘の鳴るラストシーンには胸を打たれた。苦しくも、爽やかな友情や愛情を描いた作品で、読後感がとても良かった。



大賞

「オン・ファイア」

T・S・デミ



実はどんな木の色や匂いにもあらかじめ超自然的な靈氣が含まれていて、「木の温もり」の正体とはその神秘性なのかもしれない。ひとりの男はそんなことを考えながら高い天井を見上げる。はじめて訪れた西の正倉院で彼は入り口に近い展示物から順に見ていくことに決め、一步踏み出すごとに視線をあちこちに移動させる。それは展示物を目の前にしても変わらず、腰を丸くし五秒視線を集中させたかと思えば腰を正して歩き回る人々の群れを見つめた。彼はまるで迷子であることをひた隠しにしたまま觀光をつづける子供のようだったし、愛する人とはぐれてしまったという側面においては必ずしも間違いではなかった。彼は觀光のためにはるばる東京からやってきたのではない。本当の目的は、恋人——正確には元恋人だが——に会うことだった。

関野建人が道重あや子と別れたのは三ヶ月前の十月。三十歳の彼にとつて、二十七歳のあや子は密かに結婚を期待していた女性だった。が、さまざまに確認と予兆を含意させる同棲生活はうまくいかず、彼は彼女の提案に同意した。同棲の解消。収入が多い建人が1DKに残り、彼女は去った。しかし純朴な彼が予想していなかったことに、それには三年に及んだ関係の解消も含まれていた。彼女は彼に部屋の鍵を渡すと言った。「私たち、傷は浅いほうだと思ふ。やり直しが効くから」彼に戦況を逆転させる秘策はなく、歯痒いまま彼女と最後のハグをした。それはひどく独りよがりだ、彼女の腕が彼の背中に回ることにはなかった。

建人は諦めきれなかった。あや子への愛は彼女がいなくなっても消えず、彼女が浅いと言っていた傷は広がるばかりで回復の見込みはなかった。同棲がうまくいかなかったのは、お互いの仕事の状態のせいだ。時間をかければ絶対好転する。彼には自信があったが、それを彼女に伝える手立てはなかった。すべての連絡先はブロックされ、残されているのは彼女が減多に更新しないソーシャルメディアのアカウント@VAVV\_M\_SMITHYだけだった。最後の更新は、別れる前の九月。彼女の誕生日を祝うケーキの写真だった。

展示から少し外れて建人はポケットから携帯電話を取り出し、数回タップした。画面に映るのは、あや子のソーシャルメディアの三つ前の投稿で、迎え火の写真と『地元の祭り最高!』と打たれたキャプションだった。彼女の実家は宮崎県美郷町で、事あるごとに彼女は彼に「師走祭りには必ず行くの。年末年始に帰らない代わりに」と言っていた。だから彼は美郷町に来た。ここに来れば、彼女に会える。師走祭りにまで来たとなればその誠意だって伝わるはずだ、と。彼はポケットに携帯電話を滑らせる。周りに彼女らしき姿は見当たらない。まあいい、彼は柔軟かつ冷静に考える。地元の人がここに来ることは少ないのだろう。本番は、今夜行われる迎え火だ。そこには彼女だつて来るはずだ。彼は再び展示の鑑賞に戻る。国宝級の唐花六花鏡をじっくり眺め、説明書きを念入りに読む。彼が美郷町を訪れる理由は彼女以外に何もなく、百済伝説に関する知識は美郷町のホームページに書いてあった情報以外に何も無いのは間違いないが、禎嘉王と福智王の親子が再会する師走祭りのコンセプトは、自分とあや子の再会のメタファーとしても機能するような口

マンチックなものに思えた。最も彼を絶句させたのは、千本を超える鉾が天井にまで達する光景だ。その鉾には日付が記されていて、一本一本見ていけばそれこそ現代まで紡がれる過去の断片、血と汗と涙が滲むタイムラプスであり、千年を超える師走祭りの分厚い歴史の証明だった。彼は近づいてみたり、あえて少し遠くから腕を組んで眺め、千三百年間の中で起こった世界の歴史的な大事件を思い出そうとしてみた。

十分以上立ち止まっていた彼の前を、何人もの人間が通り過ぎていった。当然彼は気にも留めず鑑賞をつづけていたが、半ば自動的に彼の目線を奪った人物がいた。一七五センチある建人よりも身長が高い、バックパックを背負った茶髪の白人。彼は他の観光客とまったく同じように説明書きを読み、携帯電話で写真を撮っていた。日本語が読めるのか、と建人は瞬間的に思ったが、いやあらゆる可能性があるとすぐに考えを破棄した。国籍は日本かもしれない。古代日本を専門とする研究者かもしれない。白人という見た目によって流暢な英語を期待されてきた日本育ちのミックスかもしれない。建人は自分を律し、彼から視線を外して時計を見る。もうすぐ午後三時。インターネットの情報によれば迎え火は午後六時ごろからだから、まだ余裕がある。次は百済の館に行こう。出口に向かう彼の歩みで軋む木は、鼓動する古代の命のように彼の耳に届いた。

夜の南郷は暗く、寒く、静かだった。町民たちがやぐらに火をつけるまでは。炎はすべてだった。光になり、熱になり、生命力をたぎらせる歓声まで群衆から引き出し、まるでそこにある全自然の力を吸い上げるように勢いを増し、高さ十メートルを超えた。遠くから太鼓と笛の音が聞こえはじ

めると群衆は高揚し、建人はそんな群衆を監視するように周辺を歩き、依然として見つからないあや子を探していた。しばらくして、地表を覆う煙の中から御神体を携えた行列が現れた。神門神社まであと少し、人々の目は炎と同じくらい煌々と輝き、壮大な歴史の只中にいる重みを感じていた。彼ひとりを除いて。

建人は落胆していた。いるはずのあや子がいない事態に納得できず、裏切りだ、嘘つきだと憤慨していた。交際中も毎年必ず一月下旬になると地元に戻っていたのに、どうしていない？ 今年だけ帰らないと決めた？ それとも一日目に来ないだけ？ まさか自分が来るんじゃないかと予想した？ いやさすがにそれはありえないだろう。彼の耳には太鼓の音も笛の音も届かず、腰元に飛んできた火花でさえ彼は無視した。彼は立ち止まって携帯電話を引き抜き、今日何度目かの同じ行為をした。彼女のアカウントは沈黙していた。彼は強引にその場限りの楽道家となり、きつと神門神社にいるのだと思うことにした。彼は再び歩きはじめる。写真と動画を撮りつつ、そういえば彼女は煙の匂いがつくからと言って焼肉屋に行くのを避けていた気がすると思いつく。彼は行列を後ろから追う形になり、神社に到着する寸前でべつにそこまで願ってはない再会を果たす。炎の前に佇んでいたのは、あの白人だった。

明らかに彼は熱狂していて、アクションカメラをバックパックに装着させ、一眼レフのシャッターを切っていた。周りには彼以外おらず、知り合いは誰もいないようだった。建人が彼の横を通り過ぎようとする、少し移動しようとした彼と偶然目が合った。素晴らしいね、彼は英語でそう言い、

建人も咄嗟に、ああまったくだ、と英語で同調した。建人に立ち止まる気はなかった。だが今やふたりは会話のスタートを切ってしまったのであり、一言置いて立ち去るわけにはいかない。建人はなんとなく彼の隣に立った。火炎をちゃんと見つめ、手持ち無沙汰を解消するためだけに携帯電話で写真を撮ってみると、不思議と心のざわめきが収まっていく感覚と、新しい充足の萌芽を抱いた。「こんなワイルドな祭り、見たことない」白人はつぶやいた。

「ぼくも」建人は笑って、彼の方を向いた。

「君はこの人じゃないんだ？」彼も建人の方を向いた。

「うん。君は？」

その一言に彼は腹の底から笑った。

「そうだったらいんだけど、実はカナダから来たんだ」

「カナダのどこ？」

「バンクーバー。知ってる？」

「うん！ 良いところだよね。十年前くらいに留学してた」

彼はからだ全体を建人に向け、不意を突かれた顔を見せた。

「君、バンクーバーに住んできたの？」

「うん。今でも住所は覚えてる。東45番街。近くにあったのはダフィンドーナツ」

「ダフィンドーナツ！」彼は仰天した顔を浮かべ、それから顔を緩ませた。「あそこのフライドチ

キンは最高だよな。おれはコネル、よろしく」

「ケント」ふたりは軽く握手した。「でもコネル、どうしてここに？」

「東京、京都、大阪とかにはもう何度も行ったんだ。それに、おれはいわゆるオタクだね。日本文化に興味があるんだ。これ見て」

彼はそう言つて携帯電話のカメラロールをタップした。リヴィングに並んだ、アニメのフィギュア、ポスター、日本の漫画、キッチンには日本刀と手裏剣も飾つてある。

「この日本刀と手裏剣、おれが作ったんだ」彼は自慢げに言い、「まあ、ウィアブーつてやつだよ、認めたくないけど」と苦笑した。

「ウィアブーつて？」

「日本オタクに対するスラングさ。からかうときに使うんだ」コネルは携帯電話をジャケットにしまう前に建人に聞いた。「せっかくなら、連絡先を教えてよ。まさかこんなところでバンクーパーフレンドに会うなんて予想外だったから」

「もちろん！」建人は快諾して、コネルが差し出すQRコードを携帯電話で読み取った。それはソーシャルメディアのアカウントで、建人は彼のプロフィール欄も投稿も確認せずにフォローボタンを押した。「そういえばコネル、西の正倉院にいたよね？」

「あそこにしたの？」

「いたよ。説明書きを読んでるハンサムガイがいるなつて思つてた」

「見られてたんだ！でも残念。読めないよ、携帯電話をかざして翻訳してたんだ」

コネルは笑顔で目線を前に戻した。そして自身の携帯電話で動画を撮りはじめたかと思うと、突然生配信をはじめた。

「やあ、みんな。おれがどこにいるかわかるかな。この炎、ファンタスティックだろ？」

建人はその配信に巻き込まれないかと肝を冷やしたが、コネルが彼にカメラを向けることはなかった。約三分、彼は建人と話していたときよりも流暢な英語で饒舌に喋り、一息ついて気が変わったように生配信を止めた。横から画面を覗くと、彼のフォロワー数は二万人を超えていた。

「ねえ、君ってまさか有名人なの？」

建人はそのフォロワー数を指差して言った。

「特定の分野ではそうかもしれない。でもほとんどの場合はただのカナディアンだよ」コネルはたいたことないとも言いたげだった。「おれはそろそろホテルに戻るよ。動画の編集もしないといけないしね」

「明日とか明後日もまたくる？」建人は彼ともっと話したい欲求に駆られていた。加えて、あまりひとりにはなりたくなかった。暖かい炎の隣で誰かと話すことがこんなにも心に安寧をもたらしてくれるなんて、彼は今まで知らなかった。

「明日も明後日も今日と同じことをするんじゃないの？」

「違うよ。三日間、別のことをするんだ。今日はまだ序章だよ」

インタレスティング、とコネルは言った。建人としても、明日明後日彼が隣にいてくれたら心強かった。彼がいれば、喪失と失踪の悲しみを紛らわせることができる。

「考えてみるよ。今日は会えてよかった」

またね、とコネルは颯爽と帰っていった。手を振り終えた建人は、師走祭りの行列を追いかけた。一行は神門神社に到着し、儀式が執り行われようとしていた。むろん、境内でも彼はあや子を探した。暗い中で観光客たちに目を光らせ、宝探しの如く境内の隅から隅まで歩き回った。だが、いなかった。あや子の面影を見たかと思えば、ただの木だったり、風の音だった。彼が搜索の足を止めたのは、コネルからのメッセージが彼の太ももを震わせたからだ。

『明日は福岡で友達とご飯を食べるから行けないけど、明後日なら戻れるかもしれない』

わずかに建人に活力が戻った。少なくとも、今日の上りましを存分に楽しむもうと思うくらいには。彼は見物人が集まる本殿に向かい、純粹に祭りに興じた。ホテルに戻る道中、彼はひたすらコネルのソーシャルメディアを眺め、今日撮影されたに違いない動画と写真に、いいね、を押し、実質あや子のことよりもコネルのこと、彼と出会えたことについて幸福な思いを巡らせていた。

三日目の下りまし、午前中に起きた建人はコネルとの再会を第一の目的にホテルを出た。二日目は特に何もなかった。あや子のソーシャルメディアの更新も、コネルからの連絡もなく、師走祭りが着々と進んだだけだった。ひとつ変わったことがあるとすれば、あや子が登場する可能性につい

て彼がほとんど考えなくなっていたことだ。彼はからだにこびりついた夢と妄想の鱗を南郷温泉で丁寧剥がしていった——乱暴に取ろうとすればまだ痛むから。

十一時過ぎに神門神社に到着した。一日目の夜ほどではないものの、依然として観光客で境内は混雑し、笑い声が絶えず大地に響いていた。彼は当然、コネルの姿を探したがまだいなかった。いところ来るのか聞いてみようとも思ったが、その悩みはいつの間にか目の前に立っていた顔を黒く塗る少年のせいで霧散した。驚きのあまり、彼は腰を抜かしそうになった。少年の奥で、子供も大人も顔を黒く塗り合っていた。鼻や額だけ黒くする者、顔全部を黒くする者、墨が顔だけでなく首にまで達する者、塗る範囲には規則はないらしかった。もつと黒く塗ってやりたい子供が、これ以上塗られたくない子供を追いかけていた。三度のまばたきで平静を取り戻した彼は、その笑顔と希望の追いかけてこを微笑ましく見守った。美術の時間に絵の具で遊んだ記憶を掘り起こし、洗濯しても色が落ちない親御さんたちの苦労を想像し、それが千三百年間つづいていると考えると尊崇するほかなかった。これがヘグロ塗りか。彼は記念に携帯電話で写真を撮った。写っていたのは、異様さだった。

神社本殿での最後の祭典が終わっても現れなかったコネルは、比木神社が先頭に立ち、一本鳥居に向かって人々が歩き出した頃によく姿を見せた。一日目とほとんど変わらない格好をした彼は困惑と痛快をごた混ぜにしたような表情をしていて、建人が近づいて手を振っても気づかなかった。コネルは一眼レフのシャッターを押し、携帯電話のカメラを行列に向けながら独りごちた。「す

ごく興味深い。この時代にブラックフェイスなんて」

焦った建人が彼の前に立ち塞がることで彼の生配信は強制的に終了した。コネルは苦笑しながら両手を地面に水平気味にして彼に聞いた。「どうして彼らは顔を黒く塗ってるの？心配しないで。純粹な疑問だよ。おれはおれたちの意見を押しつける気はない。国ごとに事情が違うのは知ってるから」

観光客のひとりである建人に言えることは限られていた。「これが伝統なんだ。顔を黒くするのは、涙を隠して別れの悲しみを見せないようにするためらしい」

「ユニークだね。ちなみにこれが世界中で問題になってることは、彼らは知ってるの？」

「わからない。ぼくは地元住民じゃないから。でも彼らに差別意識なんてないってことは言える。この祭りは千三百年つづいてるんだ」

「うん、すごいよね。でもつづいていることは正しさの証明にはならない。差別って基本的には無意識の中に存在するものだし、『歴史』は常に勝者が書いていくものだから」コネルは両手の人差し指と中指で空中に引用符を作った。「おっと、フォローからも早速反応が届いてる。えっと、あれ？」

コネルが通知の止まらない携帯電話に驚き焦る一方で建人は硬直していた。彼は彼で、内なる自分と向き合っていた。十数分前にヘグロ塗りを見て朗らかになった自分、そこに何も疑問を覚えなかった自分、伝統だけを享受した自分。黒色が持つ政治性に、彼の言葉を聞いてやっと彼はたどり

着いた。

やや遠くから、「オサラバー」と叫ぶ声が聞こえる。山々にこだまするその声は純粹さの塊のよう、大地と空と風だけが歴史の証人であり、正解を知る者に思えた。コネルの生配信のリプレイ動画を彼の隣でぼんやり眺めながら、建人は奇妙な感覚に陥っていた。自分がいる現実は平和なのに、画面の中では早くも議論が巻き起こっている。これはいったいどういうことだろう。事件のはじまりはいつで、現場はどこで、被害者はだれで、加害者はいつのどのだれなのだろう。オサラバー。小さく建人がつぶやくとコネルもそれを真似した。建人は少し苛立った。非常識で意地悪じゃないかと思った。でも激論はコネルの予期したものでなく、彼に責任があるとは思えなかった。でも無性に腹立たしかった。健やかなこの人々は、早ければ祭りの帰り、もしくは翌日に知るだろう。この炎上を。世界中から見たことのない数の罵詈雑言を受け取り、祭り関係者全員が問答無用で軽蔑される光景を目の当たりにし、悪者扱いされて説明が聞き入れてもらえない事態に直面し、辟易し、その発端が小さな田舎町であるという事実に驚愕するだろう。建人は早く、この場から自分たちはいなくなるべきだと思った。もう祭りは終わったのだ。人々の顔が沈み、苦悩する様子など見なくなかった。彼はコネルに言った。

「もう終わりだ。帰ろう」

その日建人が、ソーシャルメディアのアプリをタップすることは二度となかった。開かない限り、事態は変わらない。彼はそう信じることにした。コネルの投稿は広がらない。誰にも気づかれな

い。何事もなく日常は進む。論争は一過性。明日は元通りになる。誰かを差別するために生まれた伝統なんてない。彼はコネルに対して多少気まずい思いを抱えたまま別れた。ふたりの最後のハグは、まるでそれまで引き合っていた磁石の片方が急に磁力を失ったように——あるいはいつかのあや子のように——冷淡で、コネルが大きく手を振るその幅の半分しか建人は彼に手を振り返すことができなかった。

@ffprester『涙を隠すために顔を黒く塗る？ え？ じゃあ黒人は悲しまないってこと?』

@\_1xBedSreel『彼らはオランダのズワルト・ピートやスペインの東方三賢人の日に起こったことを知らないのか?』

@mnan54a『ブレゼントを配るために煙突にのぼって煤で汚れたからピートは黒いんだって主張するオランダの言い訳の方がまだマシ』

@x20Gangstereo『こんな祭りが千年以上つづいてるなんてやっぱりアジアはクレイジーだ』

@goodDwaros『単一民族国家だから情状酌量に値する部分もあるとは思う。でも、彼らはインターネット時代にもっと適応する必要がある』

@2xguatajdg『これが観光材料として提供されているとすれば、私たちはまさに差別そのものをシヨールとして見せられていると言っても過言ではない』

@kate\_pinkidol『前にも似た事件が日本で起こったよね? 有名人が顔を黒く塗って?』

@Cinema8Onster『西洋中心主義、そろそろやめたら？ 彼らには彼らの文化があるんだ』

東京に帰った建人が見たのはコネルからの『ごめんよ。まさかこんなことになるなんて』という謝罪のメッセージと師走祭りに対する非難の嵐だった。彼の動画には一万を超えるコメントがついており、そのほとんどは外国語だった。動画は別のソーシャルメディアにも転載され、『師走祭り』『美郷町』『ヘグロ塗り』がトレンドワードになっていた。他国のユーザーによって作成されたミームまで出現していた。むろん、嵐は欧米を中心とした英語圏のニュースメディアにまで波及し、彼らは欧米のとある組織が師走祭りの運営に対して抗議の文書を送ったと報じ、テレビをつけるとその状況を日本のテレビ局が解説していた。

建人は自室のベッドにへたり込んだ。心のどこかで、自分のせいだという思いがあった。すべて夢ならいいのに、と願った。美郷町の現場とは対照的に、インターネット上ではまるで祭りに参加していた全員がレイシストみたいに扱われてしまっている。果たしてあそこに悪が存在していたか？ 千三百年は悪の歴史だったのか？ 彼は顔を黒く塗り合っていた子供たちの顔を思い出さずにはいられなかった。炊事道具を手に持ち、澁刺と「オサラバー」と連呼していた人々のことを考えずにはいられなかった。今彼らは、どんな思いなのだろう。自分たちが誇りにしている祭りが現代にそぐわないと判断されたとき、彼らはどうその誇りと向き合うのだろう。炎上がなかったかのように振る舞うなんて不可能だろう。大切な伝統行事が失くなることを危惧するだろう。でも果た

して、それは本当に適切な、しかるべき憂いなのだろうか。コネルの投稿に書き込んだ人々は、この祭りのことなんてこの前までは知らなかったはずで、言ってしまうはこの祭りがどうなるかと知ったことではないような人たちだ。そんな人々に大事な師走祭りが潰されていいのだろうか。美郷の空気と物質を構成するすべての粒子に、師走祭りは存在しているのに。

心配になって調べてみると、美郷町のホームページがアクセス過多でサーバーダウンしていた。県のホームページには【お知らせ】の欄に声明文がPDFで貼られていて、師走祭りに関して美郷町と木城町の合同記者会見を三日後に行うと書かれていた。勇気があると彼は捉えた。無視もできなかったはずだ。場の混乱を静観し、素知らぬ顔で無感情の定型な文書を出して逃げ切ることだってできたはずだ。でも彼らはそれを選ばなかった。恐れずに前に出ることを選んだ。彼はベッドに横になり、自分が撮った写真や動画を見返す。勇敢さを育んだ場所で起きた事実を彼は拾い集める。木々の音、人々の声、太鼓や笛の音。動画の中には都会にはないものがたくさんあった。協調性や団結力、不屈の精神、土地への感謝、継承の心。自然界との契りのようなもの。だからコネルだってわざわざやってきたんだよな、と彼は思わず潤んでしまった目を瞑り、為す術のない自分の無力感に打ちひしがれた。

記者会見はユーチューブで生配信された。建人が遅れて携帯電話で中継を見たときにはライブ視聴者は二万人を超えていて、マイクを持った女性リポーターがタブレットを片手に会見の内容を要約していた。「——は『この度は混乱を招き、大変申し訳ありません』と頭を下げ、それから次の

ように語りました。『師走祭り、特にヘグロ塗りに関しまして、たくさんの方々からいろいろなご意見をいただきました。まず言っておかねばなりません。師走祭りはこれからもつづきます。町民の方々、安心していただければ幸いです。この祭りがどれだけこの地域にとって大切な行事であるか、美郷で生まれ育ったわたくしは誰よりも理解しているつもりです。この祭りは、千三百年つづいてきました。人種差別という概念がなかった時代から受け継がれてきたものなのです。今も昔も、意図的な差別意識など微塵もありません。しかし無意識的な差別の助長につながるのではないかとという意見も、ある面では正しいとわたくしは思います。師走祭りを観光産業の軸のひとつにしていながら、無批判な態度をとることは不適當でしょう。自分たちに不都合なものから目を逸らすつもりはありませんし、二極化が進む現代にあってもわたくしは何ひとつ諦めたくありません。欧米の価値観をそのまま民族性の異なる日本で継承するのは難しく、かつその必要はないと考えていますが、どんなときでも順応と改善、対話と相互理解は必要です。我々が祭りの中から未来を見据える一方で、歴史もまた我々を見張っているのです。今後は、木城町や美郷町、神社関係者らとの議論を通じて慎重に検討し、漸進的であれ、町民の方々と観光に来る方々、両方が満足できるようにしたいと思います』と、あくまで毅然とした態度で話すその様子には誠実さが見えました「女性リポーターの声が若干途切れたところで建人はチャット欄を遡ってスクロールした。コメントは英語と日本語が半々で、厳しい言葉を英語で投げつける人もいれば、そんな彼らに論破を試みるような日本語のコメントも並んでいた。どちら側の意見も正しいように見えたし、どちら側の意見も間

違っているように思えた。

そのとき突然、建人の指が止まった。チャット欄のとあるコメントに彼は目を奪われたのだ。『海外のポリコレのせいで地元の祭りが奪われるのほんとにしんどい。関係ないじゃん』正確に言えば、彼はそのコメントを発したアカウント名を凝視していた。@AYA\_M\_SMIKY<sup>2</sup>。はつきりと、打ち込んだ人間の顔が浮かんだ。ほぼ同じアカウント名の人間を彼はよく知っていた。彼は携帯電話を持っていない左手で額を掻き、書き込んだに違いないあや子の気持ちを想像した。奪われる感覚になるのはわかる。でも居直るのは違うのか？ 関係ないじゃんって、どうして言い切れる？ 関係ないことなんて本当にあるだろうか。久しぶりの一方的な再会は予想外な画面越しで、彼の中できらめきが鈍くなつていくのがわかった。あや子という存在が、たった一言で萎んでいくようだった。関係ある人と関係ない人を簡単に切り分けるような人だからフラれた。どこにたどり着くかわからないグレーの海を泳ぐのが嫌だから、彼女はぼくと別れた。白か黒かじゃないって会見でも言ってるのに。彼はチャット欄を閉じ、ソーシャルメディアにいる彼女のアカウントをブロックし、天を仰いだ。

その夜、コネルが新しく動画を投稿した。それは先日の師走祭りの様子が簡潔かつ美しく表現された五分間の動画で、プロ級の演出と編集、プラス炎上動画を投稿してから初の更新ということもあって凄まじい速さで、いいね、を大量に獲得した。ユーチューブにも投稿され、会見直後というタイミングも相まって三〇万回を超える再生回数をわずか一日で叩き出した。建人はその動画のコ

メント欄にあや子の姿がないことに安堵し、英語圏の人々が祭りの荘厳さに歓喜の声をあげているのを見て興奮した。変化を受け入れる記者会見と不変に美しい動画。見事な組み合わせで、炎上の危機がチャンスに変わっていた。会見も動画も全国ニュースで扱われ、英語圏のいくつかのメディアは今行くべき観光スポットとして美郷町を取り上げた。町民でもないのに、建人はなぜか快感を覚えていた。ただ、どのメディアも記事の終わりは同じだった。『来年の師走祭りで、真価が問われるだろう』

二——二〇二五年一月下旬

コネルが投稿した動画の再生回数は五〇〇万回を超えていた。結果、美郷町には空前絶後となる数のメディアと観光客が国内外から押し寄せ、師走祭り初日は歴代最高の参加者を記録した。暫定的な措置として顔全体にヘグロを塗るのは規制されたが、それはある種、一部の人々がすでにやってきたことであり、ヘグロ塗り自体がなくなると危機感を募らせていた住民は胸を撫で下ろした。さらに今回特別にパンフレットが配られ、そこには祭りにおいて「左」が重要視されること（例えば御神体を担ぐのは必ず左肩）、白布で包められた御神体の中身を見るのが禁忌であること、黙ってこっそりいなくなる人を指して「神門神みたい」と言うこと、供物や儀式では奇数が意識されていること、自動車を使う以前は沿道に住民が供え物をしたこと、昔は二泊三日ではなく九泊十日の

祭りだったことなど豆知識が記され、裏面の最後には、町の強い意志を示す文章が書かれていた。『民俗とは誰かからの強要や命令によって形成され伝承されるものではなく、自ら選択し、共鳴して参与するものです。この師走祭りで何より重要な点は、歴史を背景に人々が自ら創造し、反復していることであり、細部が時代とともに変わろうとも、祭りの火が消えることは決してありません』

誰もが迎え火に感動し、祭りの中に秘められた精神史、宗教史、生活史を感じ、建人もその中にいた。昨年と同じ土地を踏み、彼は気づいた。自分は美郷町の一部分ではないが、美郷町は自分の一部分である。コネルに連絡すると、彼には日本に来るのが難しくなるくらい多くの仕事のオフアールが舞い込んでいるらしい。建人は『君の動画のおかげで美郷町は大人気だよ』と彼にメッセージを送った。すると即、三点ドットの記号が浮かび、コネルは笑顔の絵文字と共にこう返事した。『今日はまた序章、だろ?』

## 優秀賞講評

日本放送作家協会前理事長  
さらだたまこ

『みさと文学賞』の6回までを振り返ると進化を遂げる文学賞だと実感している。様々な分野に長年携わってきた放送作家として、コンクールなどの審査員を拝命する機会が多く、時として賞に該当する作品に出会えないこともあったりするが『みさと文学賞』は年々応募作品のクオリティの上昇具合に目を見張るものがある。

入賞作品は大賞1作、優秀賞2作を含めて9作品の枠は決まっているのだが、ここ数年の最終審査はどの作品にも、推し<sup>レ</sup>の理由が明確で、入賞作が決まるまでの議論が白熱する。それは一次選考からの傾向であり、よって賞は逃したが選考に残った作品が書けた応募者の方々はそれなりに自信と矜持を持っていただきたと思う。

さて、優秀賞の『火伏せ地蔵』は一次選考の時点から高い評価を得ていた本命作品の一つであった。旧北郷村が舞台になった物語で、火伏の守りである宇納間地蔵尊を信仰する民話の体をした霊験記の類であるが、作者の筆力でお約束の筋運びに心地よい感動を呼んだ。まさに『みさと文学賞』の趣旨である地元に眠る物語資源の発掘に適った作品であった。

文学コンクールの開催には遍く「今の時代に、作家は何を表現し、発信すべきか」という意義もある。昔ばなしとして語られるこの作品も、今、世界中を脅かしている戦争や犯罪、災害の犠牲になる市井の人々の心に寄り添い、人間の傲りに警鐘を鳴らす力を持っている。

この『みさと文学賞』は受賞作を毎回単行本化し、また、ラジオドラマ化、漫画化など多メディア展開を試みてきた。中村航審査員長曰く「みさとには西の正倉院というアイコンがある。発掘された歴史的遺産の保存に加え、未来に遺すデジタルソフト文化の宝物殿であるべき」という意見に日本放送作家協会も激しく賛同する。入賞作だけでも既に54作品あり、百済王伝説を背景とした宮崎県美郷町の物語資源の発掘と創造は、素晴らしい可能性を秘めたまさに宝物となろう。

優秀賞作品の『火伏せ地蔵』は、紙面で読むだけでなく、紙芝居にして動画配信したり、宇納間地蔵尊の例祭で、長い階段や地蔵堂の前で、子ども達に読み聞かせる朗読劇あるいは講演などでも鑑賞したいと思った次第である。



優秀賞

「火伏せ地蔵」

いつき



弥助やすけん家で、三人が盗みを企てちよつたのは、年の暮れも近え、冬のことぢや。日向ひなたん北郷で、てげとて、ぎいようさん金を溜め込んぢよると評判の宗平そうへいん家に火をつける。そこで、家のもんが逃げちよるどさくさに紛れて、金を盗る段取りぢやつた。

「勘次かんじ。おめえは、盗みの日まで、宗平そうへいん家を見張みつちよれ。家のもんの動きが気になるけん」

弥助やすけから、そん役回りがわたつた。勘次かんじはなんも言わんとうなずいぢやつた。

弥助やすけと十兵衛じゅうべゑは、盗みん日の準備、せにやいかん。じゃだけん、勘次かんじだけは、そん日から宗平そうへいん家を見張ることなつた。

弥助やすけん家を出た勘次かんじは早速、宗平そうへいん家へ向かうた。そんで、人目につかん木陰から、奴やつん家を見張ることにした。

てげとて、ふてふてえ家ぢやつた。建屋けんはふてえし、庭にわはまつとふつてえ。そんで、家いへん前で、ここんこめめええ女め兒いが鞠まりをついぢよつた。

勘次かんじは、己おれのこめえ頃を思い出した。お父も、お母もおらんで、一人きりぢやつた。食くうもんがのうて、盗みをしては、ぎいようさん殴うられぢよつた。

じゃだからかのう。勘次かんじは幸あせせそうなそん家が、憎にくらしかつた。早はやう、火あいつつたい。燃もやしちややいたい。そげなこと、思おもつちよつた。

ふと、そん家から一人の女おんなが出て来るのが見えた。そやつそやつの顔かほを見て、勘次かんじはぎよつとした。  
「なんぢや、ありやあ」

顔の半分くれえかの、痣あざのように赤黒うなつちよつた。じゃけん、女兒めいごに笑いかけ、手え振つちよる。それで、女兒もうれしげに、手を振り返しちよつた。

「奉公のもんか」

勘次は、そやつは奉公人に違えねえ、後を尾けりゃあ、宗平ん家の隠し事に辿り着くかも知れねえ、思つた。じゃけん、そやつの後を尾けることにした。

歩いて、歩いて、勘次ん足は棒になるかと思つた。じゃけん、女は平気な面して、全長寺の仁王門をくぐつた。すれちがうもんはみんな、女ん顔を見ておおどろつたまいたげたが、そやつはなんも気にしちよらんかつた。

宇納間の鉄城山にゃあ、三百六十五の石段がある。女は、そん石段を一つ一つ、踏みしめるように登つちよつた。勘次も後を尾けて、一段ずつ登つちよつた。

「あやつはなんぢや。頂上まで登るが」

勘次は、ほ頼りかないねえ声でつぶやいた。

じゃが、女は急に足を止めちよつた。じゃけん、勘次も慌てて足を止め、身を低うした。

女は両の手を合せて、なにかに拝んぢよるようぢやつた。それで、しばらく拝んだ後、女は手を解いて引き返しち、石段を降り始めた。じゃけん、勘次はさつと、脇の木の陰に隠れて、女の様子を見ちよつた。

女には、相変わらず痣あざんような痕があつたけん、そん顔は晴れ晴れとしちよつて、神々しく、輝

いちよるように見えた。

「なんじゃったんぢや?」

勘次は狐につままれちよった。

変な女ぢや。石段登ったんも、途中までぢやった。そこで手え合わせち拜んで、何があるんぢやろう。

勘次は気になったもんで、女の姿が見えんくなつてから、石段を頂まで登りきつて、ごつたましい門をくぐつた。そこにや、御堂があつた。御堂にやあ、地藏尊が祀られちよるようぢやつた。

勘次は、それにしても妙ぢやと思つた。地藏尊を拜むにしろ、御堂の前まで来<sup>行く</sup>つはずぢや。それをなして、あん女は石段の途中で手を合わせたんぢやろうか。

勘次は次の日も、そんな次の日も、宗平ん家の見張りを続けちよつた。すると、夕刻にや、そんな女が家から出てきて、宇納間ん石段を登つた。しかも、やつぱし、登るんは途中までで、手を合わせてなんぞ、拜んぢよつた。そんで、日が経つほどに、ちびつと<sup>少し</sup>ずつ、石段の高えとこで拜み事を始めちよるようぢやつた。

女の様を見て、勘次はいよいよ妙ぢやと思つた。拜むなら拜むで、なして、頂の御堂まで来んぢやろう。毎日、登るところが一段くらいずつ、高くなつちよる訳も分からんかつた。

じゃけん、その日には、勘次は知らん顔をして石段を登つて、女のとりに立つた。そんで、女の拜み事がすんだ頃に「もし」と声をかけちよつた。

急に声、かけられた女は、たまげた顔しちよつたけん、勘次は気になつちよることを問うた。

「こん石段で、何、拝んぢよる？ 地藏尊の御堂は、頂ぢや。頂までは、来んのか？」

すると、ようやつと、声をかけられた由が分かつたようぢや。女はちびつとうなずきながら、話し始めた。

「こん石段は三百六十五段ぢや。ちようど、一年の日の数だけ、ある。じゃけん、一月一日から、無事、過ありがとせちよつた日数分だけ、あいがと、思うて、登つちよる。一歩ずつ踏みしめ、あいがと、嘯みしめながら、登つちよつた。それで、新年から数えて今日までの日ん数……三百四十五段目んとこで、火伏せ地藏さまに、一番のあいがと、拝んぢよつたんぢや」

勘次は、前を向いて、残りの石段を数えちやつた。なるほど、あと二十段ぢや。それで、そん日から、あと二十日で新年になるんぢやつた。

じゃが、勘次は、やっぱし腑に落ちんかつたけん、首を傾げながら、また女に問うた。

「なして、そげなこと、しよるんぢや？ 火伏せ地藏が、願いを叶えちくれるんか？」

火伏せ地藏は、大火で延岡ん藩邸に火が迫つちよつた時、雨を降らし、火を鎮めたち、言い伝えられちよることは知つちよつた。じゃが、そげに毎日、あいがたがって拝んでも、願いを叶えちくれるもんぢやねえと、勘次は思つちよつた。

すると、女は目をつむり、首を横に振つた。

「願いなんてもんはねえ。一日、一日が何事もなくすんでくれりやあ、十分じゃ」

「何事もなく……」

勘次が訳も分からず、そんな言葉を繰り返すと、女はこくりとうなずいて、その由を話しよった。

「ああ。何事もなく、その日がすんでくれるんが、一番の幸せぢや。うちわたしはな……こめえ時、火事に遭うての。お父も、お母も、焼け死んでくれた。死に損のうたんは、うちだけぢや。あん時のことは……今、思い出すだけでも、身体ががくがく、震えちゃう。火いついた柱が落つちてのう、じゃけん、お父がうちだけ庇うて、逃してくれたんぢや。それは、怖うて、悲しうての……今でも時々、夢ん見て、うなされちよる。じゃからの、うちは、一日、一日が何事もなくすんでくれりやあ、この上のう、あいがてえ。こん一年、今日まで無事にすんだこと、あいがと、思いながら、石段を一つずつ、登るんぢや」

「……………」

勘次にや、何も言うこたあできんかった。女の話の聞くと、そこはかとのう、切のうてのう。腕にある古傷がずきん、ずきん、痛んぢよった。

女は勘次ん目え見ながら……己の顔の、痣んような痕を指して、しゃべり続けた。

「こん顔もな、そんな時の火傷の痕ぢや。年をとつても消えんし、消したいとも思わん。じゃつて、こん痕を見るたんびに、お父とお母んこと、思うことできる。一日、一日があいがたい、思えるんぢや」  
そんな痕は、初めて見た時にやあ、おつたまげるほどのひでえもんぢやつた。じゃけん、女ん話を聞いた後には……不思議なことぢやが、それがわつても、神々しいもんに見えたんぢやつた。

その日からぢや。勘次は、女が石段登つち拝む時にや、となりに居るようになつちよった。

女ん名は、花はなと言いうた。花にや、お父もお母もおらん。そこで、宗平ん家の奉公人になつちよる、いうことぢやつた。

勘次も己の名を花に明かした。それはまほんこち、変なことぢや。盗みに入ろうとしちよる家のものに名を明かすこつちやねえだろうに、勘次は、花としゃべつちよるうちに、つい、明かしちやつたんぢや。

毎日、石段を登るんはえ大れ変えなことつちだや。じゃけん、花は一段、一段と、信仰ん心をもつて踏んぢよつた。

そんでな。花と会あうて、しゃべるたんびに、勘次ん心もちよびつとずつ、変わつちよつた。そりやあ、初めて見た時にや、花はてげ、妙なことしちよる、思うた。じゃが、花は勘次とおんなじで、お父もお母もおらん。

それにな。どういいうわけじやか、花の昔話も、勘次にや他人事には思えんかつたんぢや。そんで、なんぼかいつしよに日ひをすすうちに、勘次も花んとなりで、拝むようよなつた。

おかしなことじやの。悪友二人と宗平ん家に火ひいつけること、企企てちよつたのに……いつしか、花んとなりで、家いんん無事なを拝んぢよつたんぢや。

石段で地藏尊を拝んぢよる時にや、西に沈む夕陽が、橙に輝あいちよることもあつた。

そんな日にや、拝むんがすんだら、顔を上げた。そんで、地藏尊の御堂を見りやあ、陽を照らしてきらきらと輝あいちよつてのう。そりやあもう、美しうて、まるで、夢か思いうほどの景色けぢや。

勘次はそんな時、生まれて初めて、この世をきれいなじゃ、思うたのぢやった。

そんなふうにして、一日、一日がすぎちやった。勘次と花が、石段を頂近うまで登るようになるにつれて、年の暮れも近うなった。

それで、ついに、頂まで三段ぐらいになった日んことぢや。勘次は弥助ん家に呼ばれた。

弥助と十兵衛は、宗平ん家に火つける準備がすんで、いよいよ明日、決行するつちゆうことぢやった。

じゃが、勘次はそんなことに、うんとは言えんかった。代わりに、おそろおそろ、口を開いた。

「のう……もう、やめんか？　こげなこと」

勘次の口から、そんな言葉が出た時にやあ、弥助も十兵衛も、鳩が豆鉄砲、喰ろうたような顔をしちよった。じゃが、勘次はしゃべることをやめんかった。

「盗みに入るんに、家に火い、つけてしもうたら、うちらがもうかるだけぢやねえ。宗平ん家が燃えて、宗平ん家族も奉公人も、みんな、路頭に迷うんぢや。いんや、もしかしたら、家のもんが焼け死んでまうかも知れねえ。そげなこと、やめるんぢや」

そりやあ、悪人と名高え、勘次らしからぬ言葉ぢやった。勘次はそれまで、盗みに喧嘩……いろんな悪を働いちよったからの。二人を止めようとするなんざ、考えられんかった。

じゃから、あんぐりと口を開けちよった十兵衛も、首を傾げながら声を出した。

「おう、勘次。おめえ、どうしちやった？　何ぞ、悪いもんでも、食うたか？」

「そんなこつちやねえ。ただ、もう悪いこたあ、やめようち話ぢや」

そげなことを言うたら、しばらくの間……勘次にとつちや、永遠とも思えるほどの沈黙が続いた。じゃけん、弥助は勘次をすつと見据えて、口を開いた。

「そんで、勘次。おめえは、もうけはいらんつてか？」

「ああ、いらん。人ん家に火いつけて、盗ったもうけなんざ……」

すると、弥助は目え閉じて、ふうつと溜息を吐いた。

「じゃあ、しゃあない。もう、やめぢや」

「えっ？」

「やめぢや、言うちよる。勘次も、もう、宗平ん家の見張りなんざ、せんでええ」

「ま……まこちか？」

勘次が確かめると、弥助は腕を組んで「ああ」とうなずいた。じゃけん、勘次はそんまんまの意味にとらえて、ほつと胸をなで下ろした。

どうやら、勘次は花と関わつちよるうちに、人を疑う心、忘れちよつたようぢや。弥助がにやりと嫌な笑みを浮かべて、十兵衛に目配せしちよつたんにも気づかんかつたんぢや。

勘次は晴れ晴れとして、次の日も石段、登った。もう、隠れることもにやあ。じゃけん、花のとなりで堂々と一段ずつ、踏みしめながら登つちよつた。

石段を登りきるまで、残り三段ぢや。いつものように手え合わせて拝んぢよる時も、それまでの

ように後ろめたいことはなかった。これで何事も起こさずに、花と一緒に新年を迎えられる思うて、勘次は嬉しかったんぢや。

花ん顔にある痕は、相変わらずぢやった。やつぱり、初めて見るもんが通り過ぎると、おったまげて、振り返りよる。じゃが、勘次ももう、そんなこたあ、気にならんかった。

毎日のように言葉を交わし、心の清さに触れるにつれて、花に絆絆されちよった。

「のう、花」

「はい」

「宗平ん家の奉公は、いつまで続けるんぢや？」

どうも、気になった。そりやあ勘次にやあ、花とおんじよ夫ん編ぼんになるうなんちゆう、大それたこととは考えられん。じゃけん、ちよびつとでも、花と居る時間を増やしたい、思いはあつたんぢや。

すると、花は勘次の目をまじまじ見つめて、口を開いた。

「いつまでたあ、決めちよらんけんど。うちの体が動くかぎりは、続けたい、思うちよる」

「おめえの体が動くかぎり？」

「ああ」

花は、微笑をしながらうなずいた。

「じゃって、宗平さまは、お父とお母を失つたうちを拾うてくれて、ずっと、奉公さしてくれたんぢや。ほんまのお父とお母のように……。それで、嬢ちゃんもな、妹のように愛しいけん。まこち、

家族のようぢや。じゃけん、うちが役に立つうちはな、ずっと、奉公したい、思うちよる」

「そうか……」

そんな話を聞いた勘次ん胸は、ずきん、ずきん、痛んだ。

花と宗平ん家との間にや、自分が踏みこむことのできん、強え絆があると、思い知ったんぢや。

そんな。勘次はどうしても、己のこめえ時と比べてもうた。

お父とお母を亡くした勘次にや、助けてくれるもんはなかった。人はみんな、ひでえ扱いをした。もしも、勘次にも手を差し伸べてくれるもんがおったなら……今の己のような、汚え心じゃあなかつたかも知れん、思うたんぢや。

そんな晩は、ひどく寒かった。まるで、勘次ん心をうつしちよるかのように、寒うて、寂しうて、ぼろぼろの布団を丸被りしちよったけんど、なかなか寝つけんかった。

じゃが、しばらくすると、外がごちやごちやと、騒がしゆうなつてきた。

「何ごとぢや……」

勘次はむくりと布団から起きて外へ出て、人の集まつちよるところへと向こうた。

すると、方々から

「火事ぢや！」

「家が燃えちよる！」

などと、叫ぶ人ん声が聞こえてきた。

「まさか……」

みるみるうちに、勘次ん顔から血の気が引いた。

弥助と十兵衛は、火いつけて盗むんをやめる、言うちよったはずぢや。悪いつながりの二人ぢやつたが、それまでは勘次との約束、破るこたあ、なかつた。それなのに……。

勘次は一目散に走り出して、宗平ん家、向こうた。草履の鼻緒は切れて、足に血いが滲んだが、そげなこと、気にしちよる時じやあなかつた。

宗平ん家の前に来た勘次は、愕然とした。

ごみごみと、阿呆みてえに人が集つちよる。そん奥では、めらめらと火がゆれちよつた。そりやあ、暗闇を煌々と照らしちよつてのう。冷てえ風に吹かれて、周りの色をゆらゆらと歪ませちよつた。

「うそぢや……」

これは、悪い夢かなんかぢや。そうであつてくれと、勘次は思うた。

じゃけん、冷てえ地面を踏んで、擦り切れて血まみれになつちよる足は、ずきずきと痛んぢよる。彼方の火いからは、熱さがもわつと流れてくるんを感じた。こりやあ、夢じやねえ。

何より、勘次の目にや、燃えさかる家からちよい離れた前で、宗平ん家族が身を寄せて、ぶるぶる震えちよるんが見えた。じゃけん、こめえ女兒が燃えちよる家ん方、行こうとして、お母が必死でそれを止めちよつた。

「この、あんぼんたん<sup>か</sup>！ 動くでねえ」

「じゃけん、花が……花がまだ、家に残っちゃよる」

その声を聞いた勘次は、はっとしてそつちを向いた。それで、女兒のもとへ駆け寄った。

「花が、おるんか？　こん中に？」

急に現れた勘次に、たまげた顔しちよったけん、女兒はうなずいた。

「ああ。花が……うちを逃してくれたけん、そんなま、家に残っちゃよる」

「なんぢやと……」

勘次は、燃えさかちよる家を見た。

火いは容赦なしに、ばちばち、音を立てちよる。あんに中に花がおるつちやあ、えれえこつちや。

勘次は思わず、家の門の前に駆けて、花ん助けに入ろうとした。

じゃが、そんな時ぢや。勘次の腕にある古傷が、ずきん、ずきんと痛んだ。そんな。めらめら燃えちよる火を見ると、忘れちよったことが、勘次の頭ん中によみがえったんぢや。

そりやあ、勘次がこめえ時んこと。こんめえ、こんめえ、物心もつくかつかかん分からんぐらいの頃のことぢやった。

勘次と父母が住んぢよった家が、燃えたんぢや。いんや……勘次はこめえ頃には、何が起こつちよるのか、分からんかった。ただ、熱うて、もがき苦しんぢよった。

こめえ勘次の腕にや、燃え盛る棒が当たった。それはもう、熱うて痛うて、こめえ勘次はぎやあぎやあ、泣きおめいた。

そんな時ぢや。ひでえ火傷を負ったお母が、必死の思いで勘次を庇うてのう。最後の力を振りしぼって……己は体中、焼かれながら、勘次を外へと逃したんぢや。

「お母……」

こめえ勘次は、お父とお母が火の海に飲まれるのを目のあたりにしちゃった。そりやあ、ひでえことでのう。勘次は己を保つために、そん日のこと、忘れちよったんじやった。

じゃけん、燃え盛る宗平ん家の中に花が居る、分かちよっても、勘次ん体は動かんかった。こめえ時の、ひでえ光景が頭ん中に浮かんで、体ががくがく震えて、家ん中に入るこたあ、できんかった。

「花……花あ」

勘次にとつちや、己の無力さが恨めしかった。弥助と十兵衛が家に火いつけるのを止められんかった。そんなことは、己の大罪じゃと思うた。そんで、それに巻きこまれちやった花を助けに入ることもできねえ。腕の古傷が痛んで、体は震えて、足がすくくんぢよったんぢや。

どんだけぶりじやろうか。勘次ん目からは、熱い涙が溢れ落ちた。どうもすることができねえ、己には、どうもする術が見つからんかった。

じゃけん、勘次は、花と一緒に地藏尊を拝んぢよった日んことを思い出しての。藁にもすがる思いで、祈りごとを始めたんぢや。

「火伏せ地藏さま。どうか、火い、お鎮めください。どうか、花んことを、お助け下さい。どうか、どうか……」

勘次は祈った。宇納間で祀られちよる、火伏せ地藏に、心から深う、お祈りした。

己の身なんぞ、どうなるうが構わねえ。ただ、花んことは助けてくれ。心が清うて、信心深い花んことだけは、どうか、どうか……。

勘次は深う手え合せて、お祈りしたんぢや。

そんな時ぢやった。燃えちよる宗平ん家の真上ぢや。真つ暗な空に、ふつてえ雲がたちこめた。あたりは暗うてよう分からんけど、ただごとじゃねえことが始まりそうぢや言うて、集まっちゃったもんは、ざわざわ、騒ぎ出した。

祈る勘次の頬に、ぼつり、冷てえもんが当たった。じゃけん、はっと目え開けた。

すると、地にはぼつり、ぼつり、雫しずくが落ちてのう。みるみるうちに、大粒の雨が降り出したんぢや。「火伏せ地藏さま……」

勘次は雨に打たれながら、ぺえぺえつとつぶやいた。

そんな時ぢやった。勘次の目にやあ、たしかに見えた。けむりがのぼる家の上、ぼんやりと、地藏尊の姿が見えたんぢや。

てげ、勢いよう降る雨は、火いの勢いを弱らせた。それで、足がすくんぢよった勘次にも、勇気を与えた。全身を濡らした勘次は、火の弱つちよる家ん中へ駆けて来て、花を助けに入ったんぢやった。

雨で弱つちよるけん、燃える家ん中で花を探すんは、えれえことぢやった。けむりをかきわけ、

かきわけ、勘次は探した。それで、ようやくと、奥ん部屋で倒れちよる花を見つけたんぢや。

「花！ 花！」

勘次が揺らすと、花は僅かに動いた。氣い失つちよるけん、大きな火傷もしちよらんようぢやつた。じゃから、勘次は花をおぶつて、燃える家から逃げることにした。

不思議ぢやつた。周りは、火に燃やされて崩れちよるのに、勘次が来ようとしちよる方だけ、火が避けちよつた。まるで、何かに……そう、地藏尊さまに守られちよるかのようにぢやつた。

じゃけん、勘次は必死になつて駆けた。花を背負いながら、火が避けちよるところを、けむりをかきわけ、かきわけ、進んだんぢや。

それで、勘次と花が家から出た時。まさに、そんなぢや。ほとんどが焼けちよつた家は、すんげえ音を立てて崩れ落ちたのぢやつた。

それは、まさに間一髪のことでのう。出て来た二人を見たもんは、おつたまげて、目え見開いた。大粒ん雨は、いつしか雪んなつて、はらり、はらりと降つちよつた。

不謹慎じゃけん、弱つちよる火が照らす白い雪は、てげ、美しゅうての。勘次と花を見るみんなは、まるで、夢ん中におる心地になつた。

花を助け出した勘次は、膝から崩れ落ちて倒れこんだ。そりやあもう、えれえことぢやつたけん、勘次も疲れ果てちよつたんぢや。そんま、氣い失うた。

眠りについた勘次は、夢を見た。

そんな夢では、僧が現れた。勘次は、目ん前の僧に、得も言われん尊さと神々しさを感じての。そんな僧んことを、火伏せ地藏さまに違いねえ、思うた。

僧は勘次を見て、静かに言うた。

「我、お主の切なる願いにより防火したり」

「はっ……」

「お主の願いにより、雨を降らしちゃったのぢや」

「あ……あいがてえ、あいがてえ」

勘次は夢ん中でも、火伏せ地藏さまに手え合わせて、深う御礼を言うた。

するとな、火伏せ地藏さまは、やつぱし静かな声で……じゃけん、優しく勘次に語りかけた。

「お主はこれまで、罪を重ねてきちよったけん。そんなだけ、善きこと、するんぢやぞ」

「はっ。あいがとぐわした、火伏せ地藏さま」

夢ん中でも、勘次はうれしゅうて、涙流しながら、御礼したのぢやった。

勘次はそれまで、盗みを働いたり、喧嘩で人を殴ったりしちよった。そんな罪は、簡単には許されるたあ、思つちよらん。じゃけん、これからは地藏さまの言うとおりに、善いことを重ねよう、思うたんぢや。

そんな時ぢやった。こめえ声で「勘次さん」言うんが聞こえた。それは、はじめはこんめえ声で……じゃけん、だんだん、ふとうなつて、勘次に届いたんぢや。

「勘次さん！ 勘次さん」

勘次ん体は揺さぶられた。それで、勘次は目を開けた。

目の前にあったんは、はじめて見た時から変わらん、ふてえ痕のある顔ぢやった。心配そうに眉を寄せて、勘次を見ちよった。

「花。無事……ぢやったのか？」

「ああ、うちは無事ぢや。じゃけん、勘次さんこそ、痛えところはねえが？ 火傷は？」

「ああ。わしも無事ぢや」

「よかった……」

花はほっと、胸を撫で下ろした。

花が言うにゃあ、倒れこんだ勘次は、宗平の兄ん家に寝かされちよったようぢや。勘次は三日三晩、寝込んだよったけん、そんな時は、ふてえ声でうわ言を言っちよった。じゃから、花はたまげて、勘次を起こしたいうことぢやった。

「勘次さん。しきりに、『火伏せ地藏さま』言うちよった。どうしちよったぢや？」

花の言葉で……勘次はようやつと、夢んことが腑に落ちた。じゃけん、「ああ」って言うてうなずいた。

「そうぢや。火伏せ地藏さまぢや」

「はい？」

「火伏せ地藏さまが、わしらを助けて下さったんぢや」

勘次は花に話した。火事ん時、勘次が深うお願いしたけん、急に激しゆう雨が降り出して、火いを弱らしたこと。そんで、夢中に火伏せ地藏さまが現れて、防火したち、おっしゃったこと。すると、花は目に涙溜めて、勘次をじっと眺めた。

「そりゃあ、火伏せ地藏さまが火いを弱らして下さった。じゃけん、うちを救うてくれたんは勘次さんぢや」

「えっ……」

「勘次さんが、火いん中から、うちを救うてくれたんぢや。あいがとうなあ」

そう言うて、勘次の手をぎゅっと握った。

勘次は、花の思いをすつとは受け止められんかった。そもそも、己ら三人が盗みを企てんかったら……己が二人の罪を止めることができりゃあ、宗平ん家が燃えることはなかつたんぢや。

じゃけん、そんな時は、花ん手の温もりが優しゆうて、涙が出るほどに愛おしゆうての。勘次は束の間、その温もりに甘えちよつたのぢやつた。

そん日から数日の後に、弥助と十兵衛は火つけと盗みの罪で捕まった。取り調べられちよるうちに二人は、盗みを企てちよつたのは勘次もぢや、言うた。じゃが、盗んだ金は二人だけで山分けしちよつたんぢや。

勘次は逃げも隠れもせんかった。弥助と十兵衛といっしょに企てたんは事実ぢやからのう。どん

な罰でも受けるつもりぢやった。

じゃが、あの晩、宗平ん家の前に集ったみんなは見ちよった。そう……燃えちよる家ん中、必死で花を助け出す勘次を見ちよったんぢや。

じゃけん、みんなは口をそろえて言うた。勘次は宗平ん家のもんを救うた。たとえ盗みを企てちよったとしても、あの火事を起こす人には携わつちよらん。弥助と十兵衛とはちやうんぢやって。みんな、勘次の味方した。

じゃけん、奉行所は、勘次ん罪については、宗平ん家で奉公を重ねて償えと、言い渡したんぢやった。春にや、勘次は花といっしょに、宗平んとこで働くことなつた。家は燃えて無くなつちよつたけど、まずは宗平の兄ん家で、世話をすることなつた。それで、夕刻にや、宇納間の石段を登り、拜むことを続けちよるのぢやつた。

そんな日も、勘次と花は全長寺の仁王門をくぐりぬけて、石段を一段ずつ踏みしめながら登つた。一日、一日を無事に過ごせたこと。その尊さを噛み締めながら登つたんぢや。

それで、新年から数えたそん日の数……百二十五段だけ登つたところで、二人は手え、合わした。「火伏せ地藏さま。お守りくださつてあいかとぐわしたありがとうございました」

「あいがとぐわした」

毎日のことじゃけん、二人は一日も欠かさず、丁寧丁寧に拜んだ。それで、翌日にや、百二十六段登つて拜むんぢや。

「勘次さん。戻りましょ」

「ん」

拜むんがすんで、勘次は花を見た。そんな顔には、やっぱり、ふてえ火傷ん痕があつた。

じゃけん、桜のはなびらが夕陽に照らされながら、花の前を舞うてのう。勘次はそんな時、花んことをこの世で一番にきれいじゃ、思うたのぢやつた。

## 優秀賞講評

日本放送作家協会理事  
羽田野直子

七十年代に提唱され始めた「地方の時代」。

九十年代の好景気により公共事業で各地に箱物が作られたが、出来上がったハードを活かしきれず、来館者数は初年度が最高でその後は減るばかり。新世紀を迎えてもそのまま手を拱いているという自治体が多い中、美郷町はその成立がまるで奇跡のような「西の正倉院」の魅力伝えるソフト面の充実を図るためにこのみさと文学賞を始めようと考えたのだろう。

人口わずか四千余りの山あいの美しい町が何世紀も継承してきた師走祭りの背景となる物語。その素晴らしさあつてのこの賞なのだが、ずっと審査に携わってきて実感したのは賞も人と同じく育てるには時間を要するのだという至極当たり前のことだった。受賞作が書籍化、ラジオドラマ化、漫画化されることにより広く知られることでもまた次年度の新たな作品の応募を引き寄せられる。よくあるご当地宣伝映画の原作のような作品でなく、読んだ人々がここを訪れることでこれまでとは違う「何か」に触れられるのではないかと思わせるような魅力のある作品をと審査に携わってきた。

六年目の今回、応募作品の充実ぶりに目を見張ったのはどの審査員も同じだったと思う。

「倭の月」は美郷町の持つゲニウス・ロキを最大に活かした作品である。西の正倉院で現代から安土桃山時代へとタイムスリップした女性が秀吉の朝鮮出兵を阻もうとする渡来人の女性薬師と出会う。主人公が自分の置かれた境遇に気づく過程がリアルで作品の世界にたちまち惹き込まれた。追手との攻防の描写も活き活きとしているし、現代の道具の象徴的存在であるスマホを「からくり」と呼び重要な小道具としたところも巧みだ。「後の世の人間にも覚悟というものはあるようだな」というセリフにあるように時代を隔てたふたりの心の交流の描出力が素晴らしい。今後映像化、或いはラジオドラマ化できると良いと思わせる作品だった。



優秀賞

「倭やまとの月」

松本英太郎



気がつくとも屋根裏を見上げていた。天井板はなく、梁がむき出しだ。板の間に筵むしろのようなものを敷いて横たわっているらしい。身体を起こそうとして手足の痛みにもうめき声こゑが漏れる。

「おや、気がついたのかい」と声こゑがして、ひつつめ髪かみの女おんなが上から圭子けいこの顔をのぞき込んだ。日焼けした、柔らかな顔立ちの女おんなだった。

「しばらくじっとしておいで。骨は折れてないみたいだけどね」

——私、交通事故にあった？……でも、病院じゃなさそう。

「私……、なんでここに」

「あら、言葉がわかるのかい。着てるもので、異国の人かと思つてた。あたしや、るい、つていうんだ。村長むらおさの伝蔵でんざうの嬢かみだよ」

——むらおさ？　なんで古風な言い方？

「猟師の権六けんりくが、鹿を追つて林を駆けてたら人が降つてきたつて。息はあるようだから、担いで村まで連れてきたんだ。結局空き家になつてここに運び込んだんだよ。半刻ほどたったかね。あなた、どうして木に登つたりしていたんだい？」

「わたし、木登りなんて……」

そこまで言つて、記憶きおくが蘇よみがへつた。

大学時代の親友が、熊本の男性と結婚することになり、圭子は奈良から九州まで披露宴に出席するため旅行をする羽目になった。せっかく行くのだからと、以前から気になっていた「西の正倉院」に立ち寄る計画を立てた。

圭子は奈良の女子大学の職員で、広報担当の時に正倉院展に関わっている教授に同行し、展示物を見る機会に恵まれたことがあった。東大寺大仏殿の台座から出土した銅鏡、「唐花六花鏡」にスマホのカメラを向けた際、教授が「これと同じものが宮崎の『西の正倉院』にも展示されているんです」と言ったので、それ以来興味を抱いていたのだった。

「西の正倉院」がある宮崎県美郷町に宿をとった。檜風呂でゆったりと湯につかって長旅の疲れを解きほぐし、猪料理に満足した昨夜。今日は「西の正倉院」を訪れた。本来なら門外不出の「正倉院原画」を元に再現されただけあって、圭子の知る奈良の正倉院が、瓜二つに建てられていた。いや、中に入れる点では研究者にとってこちらの方がうれしいかも、と彼女は思った。

「唐花六花鏡」は馬鈴や鉄剣など、史料としても貴重な品々の中で、一際目立つ位置に展示されていた。七世紀ごろに動乱から逃れて海を渡り、この地までやってきた百済の王族が持っていた実物が現代に伝わっている。

圭子はその銅鏡の紋様と自分が撮影した奈良の鏡の紋様を比較しようとして、写真を表示したスマホを展示されている鏡の横に並べて持った。

異変が起きたのはその時だ。スマホの画面がテレビ放送のノイズのように乱れたと思ったら、展示物の鏡の紋様にある花が白く光り始めたのだ。

「えっ、何これ。どうなっ——」

口を突いて出た言葉が終わらないうちに今度はマイクがハウリングした時のようなかん高い音がして、圭子は耳を塞ぐ。

そして——暗転。

気づけば横たわって上を見上げていた。

### 三

水を汲んでくると言ってるいは出て行った。

圭子は体を起こして家の中を観察する。

自分が寝かされているのは二間あるうちの大きな方で、真ん中に囲炉裏がある。生活の中心はこの部屋だろう。奥の小さな部屋は長い棚が二段しつらえられていて、壺や鉢がいくつも並んでいた。ほんのりとハーブのような香りが漂っている。

部屋の隅には行李こうりが二つ置かれていた。

圭子はハッと息を呑んだ。

——スマホ、ポーチ、どうしたんだろ。

慌てて身の回りを見ると彼女の足元近くにベージュのショルダーポーチが置かれていた。

手を延ばして引き寄せ、中をあらためる。

手に持っていたはずのスマホが入っていたので、安心した。他も、外出時に持ち歩いているものがそのままになっていた。スマホのスリープを解除してチェックするが壊れてはいないようだ。電池も残量八十パーセントある。しかし、電波表示は圏外になっていた。地図アプリを起動したがGPSが機能していない旨のエラーが出て、現在位置を確認できなかった。

戸口から、るいの声が出た。

「起きて大丈夫かい？」

木の腕を手にかがって来る。

「ええ、大丈夫です。すみません、助けていただいたのに、お礼も言わなくて。私、桐谷圭子といます」

「おや、苗字持ちとはお侍の娘さんかい。どうりで手脚が細かいと思ったよ。まあ、ともかく水をお飲み」と腕を差し出してくる。

喉が渴いていたので圭子はそれを一気に飲み干した。

目を細めて彼女の様子を見ていたるいが、話を続けた。

「鎧の札さねみたいな板や革の巾着袋も落ちていたので、権六と一緒に拾ってきたんだよ」

——「むらおさ」や「おさむらい」って……この人の着物も……まさか。

「あの……ここはどこですか、それに今、何年ですか」

「ここは日向の国、神門村みかどだよ。何年かは……うちの人が高橋の殿様にお出しする年貢の書き付けに、確か『慶長二年』って書いてたと思うよ。それが？」

「慶長って……江戸時代の？」

「江戸には徳川様がおわすよ。太閤様の右腕ってお方だ。今回の戦にはまだお出でじゃないらしいけど」

——江戸の前、豊臣秀吉が日本を支配してた時代なんだわ。

あまりのことに圭子は頭が爆発しそうになる。

「ごめんなさい、私……ちよつとまた頭がくらくらして」

それを聞くとるいは心配げに眉をひそめた。

「やっぱり、起きるのが早かったんだよ。ささ、横におなり」

そして奥にあった行李から薄灰色の作務衣さむえのようなものを持ってきて、横たわった圭子に布団がわりにかけてくれた。

「後で握り飯でも持ってきてあげるからね」と言ってお出で行った。

一人残った圭子は、状況を整理しはじめた。

——これはテレビのどつきり番組じゃない。家の様子も調度品も、セットじゃなくて、本当に日々の生活で使い込まれている感じがする。何より、あのいるって人から漂う体臭は、毎日働いているのに何日もお風呂に入っていないかのような。そこまでリアルに役作りはしないはず。スマホは圏外でGPSもない。ならばあの人が言ってることは本当。つまり——

——私は太閤秀吉の時代の宮崎に跳ばされた。

諦めきれず一縷の望みをかけて、横になったままでスマホに手を延ばし、勤め先にかけてしようとしたりが発信すらできない。インターネットにも接続できないことを確認したあと、圭子はスマホを握った手を横に投げ出した。

やがて彼女の啜り泣く声が部屋に広がって行った。

#### 四

襟野兵衛は空を眺めて日暮までの時間を測った。

——あと半刻あたりは闇に包まれる。いや、山林の中ゆえ四半刻がせいぜいか。

短く指笛を鳴らした。たちまち周囲に配下が集まる。人数は五人。いずれも水干すいかんに行膝ひかばきという狩装束だが色目は森林に紛れやすい焦茶に揃えている。散開したまま林中を進んでいた者達だ。

「今日はここまでじゃ。各自休んで疲れを取るがよい」と言う兵衛に、顔立ちに少年らしさが残る男が言う。

「しかし、早く追わぬと逃げられてしまいます。あと一刻は進むべきかと」

若さゆえの気走りに、言い含めようと兵衛が口を開くより先に、髪に白いものが混じる男が声を発した。

「小四郎よ、お頭のご指示に口答えするでない。功名を焦る気持ちもわかるが、お頭は敵が逃げ切ることはないのご判断されて、休息を言いつけなされたのじゃ」

「平左殿、それはどういう——」

「気づかぬか。我らが追っている相手の足取りが遅くなってきたことに。おそらく隠れ家に近づいたであろう。ここまでの六日、追っ手の気配がないので奴は歩を緩めたのじゃ。街道を通らず、獣道を伝ってこの日向まで逃げてきたのだから、もう大丈夫と考えて、人としての足跡を消すことも雑になっておる」

「さすが亀の甲より年の功よな」と笑みを浮かべて兵衛が言うと「亀の甲は余計でござる」と平左が返した。

小四郎が顔を赤らめ、一同の頬が綻んだのを確かめた後、兵衛が言った。

「平左の言う通り、敵は近い。しかも我らにわかっているのは、かの者が松浦に停泊していた軍船のうち、安宅船を一隻、関船に至っては三隻も火薬で沈めた忍び、ということだけだ。追っている

のは一人であるのは間違いないが、それでも根城に戻れば同様の手練れが何人も待ち受けているやもしれぬ。我ら中村一氏様配下の甲賀組六人衆であつても容易く始末できるかはわからぬ。だからこそ戦いに備えて今日はここまでとし、身心を休めるのじゃ。良いな？」

その念押しに一同「はっ」と声を発した後は瞬く間に林中に姿を消した。

兵衛も大木の根方に腰を下ろし、兵糧丸を腰につけた巾着袋から取り出すと口に含んだ。甘みが身体に染み渡るのを感じながら頭では策を練り始める。

——朝鮮との戦いで人の出入りが多いと言え、幾つもの軍船に忍び込んで火薬を仕掛け、次々に爆破した。しかも港の見廻りをしていた小四郎達三人と斬り合い、手傷を負ったが、まふまと逃げおおせるとは甲賀にも例を見ぬ手練れ。相手は一人との報せで、我が殿は我ら六人衆に追つ手の命を下された。滴つた血の跡で追うことができたが、浦近くの林中で手当てをしたらしく血の跡は途絶えた。その後は獣道を駆けているので我らでなければ追いつけられなかつたであらう。

——初めは徳川様配下の伊賀者かと思つたが、日向まで逃げて来たとなるとそれはない。この辺りには大昔から百済の王族の子孫の隠れ里があると聞く。その者達が父祖の国の危機に動いたのか？ ならば今後の出兵に支障とならぬよう、里ごと焼かねばなるまい。例え里人が何人いようと。女子どもまで根絶やしにすることを思つて兵衛の心は流石に暗く沈んだ。

目を覚ますと、戸の隙間から差し込む月光にきらめくナイフの先端が眼前にあった。圭子は「ひいっ」と悲鳴をあげる。すかさずその口が何者かの手で塞がれ、頭を床に押し付けられた。頭蓋骨を粉砕されるのではないかと思えるほどの怪力だ。籠り声が話しかけて来た。

「騒ぐと刺す」

頭を押さえつけられているので、圭子は目だけで頷く。少し力が緩められて話せそうになった。

「お前は誰だ。何故私の家で寝ている？」

『私の家』と耳にして、圭子は状況を了解した。るいからこの家は桂月香けいげつこうという薬師の家だと教えられた。薬草を集める旅に出て留守になっているので、その間は仮住まいにすることを村長の妻の権限で許してくれたのだ。

未来から来たと言っても信じてもらえないと考え、圭子は「頭を打って何も思い出せない」とるいに説明していた。服装は白のブラウスに赤いスカートと、チョゴリに似ていたため、るいは、朝鮮に関わりのある日本人と考えたようだ。そしてこの神門村は、昔百済の王族が戦乱を逃れて辿り着いたこと、今でもその王族に仕えていた薬師の末裔で桂月香という者がいることなどを話してくれた。

二日目には村人に紹介され、記憶が戻るまでこの村にいれば良いと許されたところだった。取り敢えず身の安全を得られたと思いい、昨夜は安心して眠りについたのに、夜中にいきなり鼻先に刃を

突きつけられるとは。

——もう、いい加減にして！

その怒りが圭子から恐怖を吹き払った。

「……私は桐谷圭子といいます。……あなたは桂月香さんですね」

返事を待ったが相手は無言なので、圭子は続けた。

「私は旅の者です。名前以外は覚えていないので。不憫に思ったるいさんが、あなたが戻るまでここを使って良いと言ってくれたのです」

しばらく間があった。

「いつもながらおせっかいな人だな」

その声とともに押さえる力は消え、覆い被さっていた人影は身軽に飛び退<sup>すさ</sup>って床に片膝立てで座った。圭子も上体を起こして向き合う。完全に信用したわけではないと示すためか、相手は先程圭子がナイフと見間違えた短刀をまだ持っている。そのあと、月光の中に浮かび出た姿を見て圭子は思わず息を呑んだ。

頭巾をほどくと、肩で切り揃えた黒い髪が囲む瓜実顔が現れた。猫のような瞳を長い睫毛が囲んでいる。薄い唇が緩やかに弧を描いて微笑んでいる。灰色の作務衣のようなものを着ているが、陸上選手のようなスレンダーで筋肉質の体つきだと見てとれる。

——美しい……

「げっこう」と耳で聴いただけなので、男と勝手に思い込んでいたが、桂月香は圭子が予想だにしない美少女であった。

思わず見惚れてしまい、黙っているの、「いいからもう少し詳しく説明しな」と促される。

圭子は昨日来の出来事を細かく話した。

一通り聞き終えた月香は短刀を鞘に納めると圭子に向かって膝をそろえ、頭を下げた。

「すまん、私の早とちりだった」

「あついえっ……。家に帰って知らない人間が我が物顔で寝ていたら、誰だって怒ります。月香さんは悪くありません！」

そう言って圭子も頭を下げる。

どちらも頭を下げたまま数秒、やがて同時に頭を上げて顔を見合わせ、どちらからともなく含み笑いが漏れた。そのままにこやかな表情で二人は話を続けた。

## 六

日が昇り切った頃にいるのが顔を見せた。圭子と月香が囲炉裏を挟んで朝餉をとっているのを目を丸くする。

「月香さん、帰ってたのかい」

「ああ、昨夜な。だが、私の家で圭子が我が物顔で寝ていて驚いた。確かに留守の間は勝手に使っていたとあなたに言っただけだ」

圭子の「我が物顔じゃないですよ」という抗議は無視された。

「ごめんよ。でも、誰ともわからないまま泊めてくれる家はなくなつてさ。うちも村長がいるんでねえ。あなたの所が空いてて良かったよ」

やはりここはリアルな戦国時代だと圭子は納得した。時代劇なら行き倒れた女を村長の家に引き取る展開になるだろう。しかし、落武者や野盗が跋扈する世界では、用心に越したことはない。たとえそれが気を失っている女であってもだ。

「ところで月香さん、帰って早々で悪いけど、病人が出たんで、あとで診てやつてくれるかい？彦次んとこのお世津が一昨日から熱を出して下がらないんだよ」

「わかった。後で行ってみる」

「私もついていっていいですか？」と尋ねると、月香は漬け物を口に頬張つたまま頷いた。

朝餉を済ませた月香は、棚の壺から木の実や乾燥した草を取り出して薬研やげんで細かく刻み、薬を作りに上げた。

「圭子、行くぞ」と声をかける。圭子はショルダーポーチを肩にかけ、月香に付いて家を出た。

病人は十才くらいの少女で板の間に野良着を布団がわりにかけられて寝かされていた。そばに座っているのは父親だろう、顔を赤くして荒い呼吸を続けている子どもを心配げに見つめている。

月香が戸口に現れてもこちらを見て頭を下げてただけで、再び子どもの顔を見続けた。

——なんか、無愛想。往診してもらうのに。

圭子は現代人の感覚で、気持ちが悪立った。

それを察したのか、月香が「彦次は去年女房を肺の病で亡くしている。今はお世津がたった一人の家族なんだ」と圭子に耳打ちをした。

圭子はばつが悪い思いで月香に続いて中に入った。

## 七

「隠れ里ではなさそうです」

物見から戻った平左が告げたので、兵衛は胸を撫で下ろした。無駄な殺生をしなくて済む。

「何故わかった」

右腕とも言える平左の見立てに間違いはないだろうが、確認をする。

「朝から村人達の様子を見ておりましたが、あれは根っからの百姓です。違うのは二人の女だけ。

一人は薬師のようですが、脚の運び、周りへの目配りが我らと同じと見ました。もう一人は面妖で」

「どうおかしいのじゃ」

「出立ちは朝鮮の者のようなので、此奴こやつが我らの追っていた女かと思つたのですが、身のこなしも

体つきも公家のように。歩き方も奇体な靴でひよろひよろと」

——その面妖な女は朝鮮の王族の末裔なのかもしれぬ。姫君、といったところか。松浦で暴れたのは、おそらくその薬師。

兵衛はそう考え、周りの配下に下知した。

「今宵、その女二人を始末する」

## 八

家に戻る道すがら、圭子は言った。

「凄いです。あつというまにお世津ちゃんの熱が引いたんだもの。今の風邪薬よりよっぽど効きそう」  
月香が訝しげな表情で聞き質す。

「『今宵の』？、『かぜぐすり』？……何のことだ？」

——しまった！ 子どもの熱が下がって、気を抜いた！

圭子はごまかそうと思つたが、るいを初めとした村人に嘘をつき続けていたので、嫌気がさしていた。

「月香さん、私、あなたに隠してることがあるんです」

だが、月香は驚いた風もなく言う。

「そうか。それなら、家に着いてから話してくれ」

二人は家に着くまでずっと無言だった。

## 九

「——と言うわけで、私、この時代の者ではありません」

上ずった声で圭子は話し終えた。幽かに眉を寄せて聞いていた月香はしばらく目を閉じて考えている風だったが、やがて目を開けて言った。

「よく言ってくれた。名前しか覚えていないにしては、話しぶりがまっとうなので、嘘だと思っていた。このままお前が真実を話さなければ、少々手荒なことをして聞き出さねば、と考えていた」

——やっぱり、この人、物騒な人だ。でも……

圭子はいささか怯みながらも問い返す。

「信じてくれますか？ それとも気が狂っているか？」

「信じるよ、お前は狂っていない。なら、お前が今話したのは本当だろう。そうすれば、お前の着物や持ち物についても筋が通る。他国のことも学んだ私だ。それらが朝鮮や明のものでないのを知っていた」

「……お見通しだったんですね」

「ああ。だが、別の時代から来たというのは想像もしていなかったな。女キリシタンかと思っていた。長崎辺りからここまで逃げてきたのだろうとな。……何か、お前が後の世から来た証拠になるものはあるか？」

圭子は床に自分のポーチの中身を広げて見せた。

リップやハンドクリーム、ハンカチとティッシュ、財布とカードケース……と、出てきたものを見ても月香に驚いた様子はない。南蛮貿易の舶来品を知っているからだろう。圭子は焦った。

「そうだと、彼女はポケットからスマホを取り出して置いた。

ごとり、と重さのある音がしたので月香が興味を示して顔を寄せる。圭子がスマホのスイッチを押す。富士山の写真が、時刻表示の文字と共に浮かび上がったので、驚いた月香が反射的にのけぞった。圭子が笑みを浮かべる。月香は危険が無いとわかると、取り繕って言った。

「な、……なんだ、これは。キリシタンの教会にある『すてんどぐらす』とやらに似て絵が光っているが、あれは窓だからだ。しかし、これは床に置いてあるのに——」

「これはスマホって言う私の時代の『からくり』です。周りのものを写真という小さな絵にできるんです」

そう言いながら圭子はスマホを持って月香の横に行き、自撮りする。何をされているのか訳がわからない様子の月香に、撮ったばかりのツーショットを表示したスマホを突きつけた。月香は奪い取るように手に取ると、今度こそ驚愕の表情で言う。

「なんと、私とお前ではないか！　いつの間にこんな絵を描いた……いや、描く時間は無かったな………する」と――」

「そう、これがスマホ。遠くの人と話したり、周辺の地図を見たりできるのだけれど、この時代に來たらだめになっちゃった。でも、これで信じてくれますね？」

月香はスマホの画面から目を離さずに何度も頷いた。

## 十

その後も月香はスマホの説明を望んだ。圭子も、ネットなしで使えるアプリを起動して見せた。だが、電池残量が残り三分の一ぐらいになっているのに気づいて焦った。このままではスマホも使えなくなってしまう。

月香は次に圭子のいた時代に興味が移ったようで、質問が続いた。技術がどう進み、医学がどれほど進歩したか、圭子は問われるままに語った。

二時間あまり話したあと、最後に月香が言った。

「そうか。それほど素晴らしい時代に生きていたのにお前はひとりでここに來てしまったんだな」  
涙が圭子の両目に溢れた。頬を伝って落ち、赤いスカートにいくつも染みを作る。それを見て、自分が不用意なことを言ったと知った月香は膝立ちになり、正面から圭子の頭を抱えるようにして

抱きしめた。

「すまない……すまなかった」

圭子も月香を抱き返し、声を出して泣き始めた。

十一

日は暮れて、月香は夕食の準備を始めていた。

さつきひとしきり泣いた後、圭子は落ち着きを取り戻して、今度は月香自身について尋ねた。

圭子は「月香さん、……ただ者ではないですよね」と言った。彼女を泣かせた負い目もあって、月香は自分が朝鮮との戦を快く思っておらず、名護屋城まで旅して少しでも父祖の国を守る役に立とうと出兵の邪魔をしてきたことを話した。さすがに船を沈めたことまでは話さない。

圭子は、「朝鮮を攻めるのは何度目？」と問うた。「これで二度目だ。去年までは休戦していたのだが、また始まってしまった」と月香が答えると、圭子は驚くべきことを言った。

「なら、もうすぐこの戦は終わります」

「どうして？」

「秀吉がこの世を去るからです」

「それは間違いないのか？」

「はい。二度目の出兵の時に斃れ、戦は終わります」

それを聞いた月香は一気に肩の荷が下りた。火薬が準備できたら、また肥前まで行くつもりだったからだ。だが、圭子が言うのなら、そうなるのだろう。好んで人を殺めたいわけではない。これで忍び働きは終わりにしよう、そう決意した。

——あとはこの圭子の面倒を見ながらひっそりと暮らそう。互いに身寄りの無い者同士、助け合って生きれば良い。

そう考えながら、手の鍋を、腰をかがめて囲炉裏に置いた瞬間、今まで月香の頭があった空間を矢がかすめ、床に突き刺さった。開け放していた戸口を通って飛来したのであった。

「圭子、奥の部屋へ！」と月香が叫んで部屋の隅の行李へと跳躍した。圭子は床のシヨルダーポーチの肩紐を引っ掴むと、棚のある部屋に転がるようにして逃げ、振り返った。

月香は行李の中から短刀を二本取り出して鞘を払い、抜き身にして両手に持った。

——双剣！

圭子はゲームで見た女戦士を思い起こした。

二の矢、三の矢と戸口から飛んで来るのを月香が左右の短刀で叩き落とす。

「棚の右端にある壺を持って！」と指示がとぶ。圭子はあたふたと壺を脇に抱えた。

戸口から茶色い影が二つ飛び込んで来た。囲炉裏の火が覆面をした男達の姿を浮かび上がらせる。

「危ない！」という圭子の警告の叫びと、男達が月香に斬りかかるのが同時だった。

月香は左右から振り下ろされる白刃を短刀で受け止めたばかりか弾き返した。そのまま片足を軸にして回転し、姿勢が崩れた男達の胴を薙ぎ払う。

「ぐぬっ」「！」

鮮血をふり撒きながらも男達は月香から跳び離れる。そして交互に彼女目掛けて刺突を繰り返す。始めた。流石に月香も防戦一方になる。だが、合間を縫って圭子を庇う位置に跳ぶと叫んだ。

「圭子、壺を投げつけろ！」

眼前の死闘に目を奪われていた圭子は慌てて壺を投げた。男達の前で落ちた壺が割れる。月香は振り向いて圭子を頭ごと抱えるように押し倒した。割れた壺から黄色い粉塵が広がる。煙のように立ち込めた粉塵から敵が転がり出てきた。

「うわあー！」「目が、目がー！」

どちらも顔を掻きむしっている。

圭子は月香が催涙弾がわりの壺を作っていたと知った。

立ち上がった月香が床上でのたうち回っている襲撃者にとどめを刺す。目の前で命が絶たれているにもかかわらず、圭子は何も感じる事ができない。自身の命が危険に晒された経験が、彼女の心を麻痺させていた。

月香は二人の覆面をはぐ。

「この若い方は見覚えがある。名護屋城下で私と斬り合った奴だ。……まだ追っ手がいる」

屋根や壁からかつん、かつんと音がしたかと思うと空気が焦げ臭くなった。敵は火矢を放って月香達を焼き殺す策に出たのだ。

「月香さん、外に出ないと！」

「いや、今出れば狙い撃ちにされる。それより——」

月香は棚の前に引き倒し、床板を取り外した。そこに現れたのは堅穴に垂れ下がる縄梯子。

「圭子、降りて道なりに進め。私は後から追う」

ことばに従い縄梯子を降りると、横に向けて腰をかがめたら通れるすいどう隧道が続いていた。真っ暗なので手探りで進むしかない。本来は蠟燭などを用意すべきなのだが、今はその準備がない。しかし、圭子はスマホを使うことを思いついた。LEDの光が昼間のようにトンネル内を照らす。圭子は歩を早めた。

## 十二

五分近く進んだ頃に月香が追いついた。

「まだ道のりの半分ほどだろうと思っていたが……その光は凄いな。おかげで私は蠟燭を使わずに追って来れたぞ」

「先は長いのですか」

「いや、もうすぐだ。突き当たりに縄梯子を垂らしてある」

月香の言葉どおり、すぐに出口に着いたので彼女が先に地上へ出た。安全を確かめてから圭子を引っ張り上げる。

村のはなれにある穀物倉の中に二人はいた。

「これからどうします?」

「奴らを全て斃す」

「ええ! 相手は何人かわからないのに」

「肥前から日向までやるばる追うのだ。忍びの者を何十人もよこすとは思えぬ。それに、我らを密かに始末できず、家一軒を燃やしたのだ。騒ぎを知っている村人は皆殺しにされる。これまで私の一族を大切にしてくれた人々を見殺しにはできぬ」

「私も手伝います」と言う圭子を月香はまじまじと見た。

「そんなお姫様のような身体では足手まといだ。ここからなら隣村まで逃げ切れる」

「私も、るいさんやお世津ちゃんを守りたい!」と月香の目を見返して圭子は言い放った。月香も鋭い眼光で見返したが、やがて初めて出会った時のように唇を緩めた。

「後の世の人間にも覚悟というものはあるようだな」と言っ、付いて来るよう首で促し、倉の外に出た。

だが、月の光に照らされた空き地に進んだ瞬間、四つの人影が周りの茂みから躍り出た。「しまっ

た」と小声で漏らし、月香は圭子を背にして、腰帯に挟んだ鞘から短刀を抜いて両手に持った。

背の高い男が覆面の口元をほどき、声を発した。

「狙い通りにこちらの陣に飛び込んできてくれたな。甲賀の土遁の術を思い知ったか」

甲賀の土遁は地形・地質に加え土木の知識に基づいて破壊工作や脱出をなす技術である。兵衛は襲撃をかけるより前、平左に地形を分析させ、脱出先となる場所にあたりを付けていた。焼け落ちた家に亡骸がなかったので、先回りしていたのだった。

「平左と小四郎の仇、討たせてもらう！」

全員が刀を抜いて圭子達を半円に囲み、じわじわと包囲を縮めてきた。仲間を斃した月香の腕を警戒しているのだ。

顔は敵に向けながら、月香が圭子に囁く。

「私が食い止めるから、お前だけでも逃げろ」

圭子はそれを聞いて思いを巡らせる。

——私、この人を見捨てられない。さっきみたいに目潰しでもあれば……そうだ！

「月香さん、あなたの名前を呼んだら目をつぶって下さい！」

自信ありげな圭子の言葉に、月香が前を向いたまま頷いた。圭子はスマホを取り出し、襲撃者に向けると叫んだ。

「月香さん！」

一瞬の後、閃光が辺りを照らす。圭子がフラッシュを発光させたのだ。闇に慣れた兵衛達の目は、光に焼かれた。顔を覆って地面に倒れのたうち回る。ストロボ光を知らないこの時代の人間に対し、効果は抜群だった。ただ、圭子には光で照らされた周囲が、ノイズで乱れたように見えた。スマホの画面を見ると、電池のアイコンが赤くなって「3%」と表示されている。

——まずい、電池が切れちゃう！

圭子の動揺も知らず、月香は敵の間を跳び回って、とどめを刺してゆく。最後、兵衛の胸に振り下ろした短刀を、彼の刀がはじいた。恐るべき胆力で、目のダメージを克服し、気配で反撃に出たのた。

見えない目を月香へ向けながら、兵衛が立ち上がる。一撃必殺の刺突の構えになっていた。

——だめ、もう一回！

圭子は月香の名を叫び、スマホのシャッターに触れる。

再度の閃光で、兵衛が怯む。それにめがけて月香が跳躍し、短刀を突き出した。

突然、圭子の視野全体が乱れた。そのまま彼女を暗闇が包んだ。

十三

「お客様……、大丈夫ですか」

身体を揺すられて目を開けると、見覚えのある場所だった。

「西の正倉院」の「唐花六花鏡」の展示前。彼女は床に座り込んで、女性職員に身体を支えられていた。

「あの……私」

「驚きました。急にしゃがまれたので、駆け寄ったんです。貧血かも知れませんか」

「私、どのくらい失神していましたか」

「ほんの数秒、というところですよ」

圭子は何が何だか訳がわからなかった。立てるようになる、一応念のためと言って職員が執務室のソファを提供してくれた。しばらくぼうっとした後、現代に戻っていることを圭子は確信した。

——白昼夢？ でも、何日も経ったような感覚は残っている。あ……スマホ。

手から落ちたスマホを拾ってくれたようで、ショルダーポーチの中にスマホは入っていた。電池切れなので、充電器と部屋のコンセントを借り、再起動する。

彼女の子想通り、写真アルバムには敵と戦う月香の姿があった。圭子はタイムトラベルの証拠に  
なると思ったが、すぐに、これを人に見せてもフェイクと言われるだろうとあきらめた。

——きつと、スマホがああの時代と私を結びつけていたんだわ。電池が切れたから戻って来ちゃったんだ。……月香さん、助かったかな。

圭子は遠い昔にいる命の恩人に思いをはせた。





審査員特別賞

「夢のまた夢の」

雪柳あうこ



「おい、旅に出ようぜ、鳴野」

「は？ どうした急に、百瀬」

急な誘いに驚いて、僕は眉を上げた。

行きつけの、古い何ら洒落た感じのない喫茶店（いつも空いているのでよくここで暇をつぶしている）の窓際の席。一緒に大学をさぼってコーヒーを飲んでいた親友の百瀬晃が、大きな瞳を限界まで見開いて店の液晶テレビを指さしたので、僕こと鳴野優はその様子にとっても驚いたのだった。

「いや、その。懐かしい景色だったからさ。……いろいろ思い出して、何か昂っちゃって」

画面には九州のどこだかの風景が、昼下がりのニュースに乗って流れている。緑の深さが液晶越しに妙に目を引く。

「それにしても、……」思い出す“ね”

「別に、お前は信じなくていいんだけどさ」

——不思議なことだが、百瀬には前世の記憶があるらしい。

二年半前。大学の入学式の会場で、僕は突然、見知らぬ大柄な美男子に抱きしめられた。それが百瀬との出会いだ。中背でひよろい僕は抵抗もできず、なすがままだった。

「シギノ？ すげえ、本当に会えるなんて！」

彼は、前世だか前々世だか、とにかく自分には今世以外の記憶があると繰り返し、覚えていないかと僕に問うたのだった。

「僕は確かに鳴野だけだ。あの、何のことか、全然わかんないんだけど……?」

彼の腕を逃れて冷静に問い返した僕に、彼は崖から突き落とされたような顔になった。

「なんだよ、覚えてねえのかよ……っ」

絞り出すように言う顔は絶望を帯びていた。

しかし、彼はしばらく考えた後、表情をくると明るく変えて言ったのだ。

「仕方ないか。自分の記憶だけど、俺だってどこか半信半疑だし、夢みたいな話だしなあ。……せめて今世は、俺と友達になってくれ」

それ以来、百瀬はその話をしなくなり、僕たちは本当にただの友達になった。天真爛漫でノリがいい彼とは、びっくりするくらい気が合う。学部も一緒なので、ついつい日々一緒にいる。ふざけ合って笑って暮らす大学生活はすでに三年目、今や親友と呼べる間柄だ。

ただ、ときどき、百瀬は妙に寂しそうに笑うことがあった。そんな時は、どうしようもない孤独を抱えているように見えた。前世の記憶についてはともかく、その感情までもが嘘だとは思えなかった。

「思いつきだし、旅。気にしなくていいから」

百瀬は僕から視線をそらし、再び画面に見入った。僕もつられて視線を向ける。深緑の森を背景に、テロップに町の名前が示された。

「あれは、……美郷町っていうの？ 宮崎の」

「……ああ」

百瀬は画面を食い入るように見つめている。

前世なんて僕は信じていない。それでも、映し出される風景は穏やかで、どこか懐かしいような気さえした。

だから、思わず呟いてしまったのだ。

「……行こうか、旅行」

「え？　は？　マジ？」

百瀬が驚いて、弾かれたように顔を上げる。

「さっき映っていたのは、この辺だよね？」

僕は先ほどのテロップに映っていた町名を入れて、詳しい位置を知るための地図アプリを開く。

画面は九州の真ん中を少しそれた点めがけて、深い森を指している。

「別に、俺が行きたいだけで、見るところが多いわけじゃねーし。どうせ旅行行くなら、どっか、全然違う別の場所でもいいし」

「いや、ここに行ってみたい」

流れた映像に妙に惹かれたものもある。けれど、それだけでなかった。

百瀬はどんな記憶を覚えているというのだろうか。僕はずいぶん前から、親友が一体何を抱えているのか気になっていたのだ。テレビに映るその土地は、どんな記憶を隠しているというのだろうか。

「別に何もなくなっちゃっていいよ。宮崎行ったことないし、二人なら楽しいだろうし」

「本当にいいんだな？ 後悔するなよ？」

「なんだよそれ。どういう意味」

冗談を言うように小突きあって、僕たちは、美郷へと旅に出ることにしたのだ。

講義やバイトを調整して日程を絞り込み、関東で早い初霜が降りたというニュースを聞いた十一月、僕は百瀬と九州へ旅立った。

宮崎空港でレンタカーを借り、交代で海沿いを運転した。十一月の宮崎はまだとてもあたたかくて、海は青くきれいで、異国に来たような気分だ。ナビゲーションのとおり国道を走れば、もうそれだけで爽快だった。

道の駅で買い物しつつ、やがて森を抜けると、周辺の民家が視界の端に見える始めた。

「美郷町だ」

「……ああ」

百瀬は、どこか緊張した面持ちで応えた。

車を止め、僕たちはまず神門神社へと向かった。古い木の社に、凜とした空気が静寂をもたらしている。大樹がかすかな風に騒めいて、僕たちを迎えてくれる。不思議なまでの心地よさに、心の

奥がざわついた。

神社にひとしきり祈りを捧げた後、僕たちは西の正倉院と、百済の館を訪れた。

「この辺りには、百済王の伝説があるんだね。禎嘉王、その子の福智王、華智王……」

妻は之伎野。僕の苗字と音が同じで、妙にドキリとする。

展示や発掘された鏡などを見ながら、僕たちはゆっくりと史料を読み込んだ。百瀬は食い入るようについつつに見入っている。

「……歴史って、誰が何をどう言い残したかによって、こんなにも違うんだな」

「百瀬？」

「ああ、いや、何でもねーよ。伝承って言うのは面白れーもんだなって思ってたさ」

「今でも祭が永く行われているということは、きつと、大切な絆があったんだろうね」

僕の問いに、百瀬は何も答えなかった。かわりに、時折見せる少し思いつめたような表情を、普段よりずっと長く漂わせていた。

近くの店で地元の食材をふんだんに使った夕飯に舌鼓を打った後、僕たちは森の奥の小さな民宿にたどり着いた。通された和室に入る。奥の方に布団が敷いてあり、手前にはゆっくりくつろげるスペースが十分にある。

「あー、疲れた。かんぱーい」

畳に置かれたテーブルに落ち着き、僕たちは盃を交わした。昼に道の駅で買っておいた地酒はふわふわと柔らかい口当たりで、すぐに血に溶けて全身を駆け巡る。

酔いによろやく一日の疲れがほどけていく。百瀬は下戸なので、今日も乾杯の一口きりですっかり酒の火照りがまわっている。

旨い酒と美味なつまみ（地鶏の炭火焼きが美味い！）によろやく百瀬の表情が明るくなってきた頃、僕はずつと気になっていたことを尋ねてみた。

「ところで。百瀬がこの美郷にすぐ来たがったわけって何？ やっぱりその、前世の？」

「……まあ、そんなとこだけ」

「旅に誘われたときには、懐かしい景色”って言ってたよね。それに、今日の伝承館の後も、何となく様子がおかしかったし」

僕がそう質問すると、百瀬は明後日の方向を見ながら頭を掻いた。

「俺の血筋さ、昔はこの辺だったらしいんだ」

「百瀬のルーツが、この辺？」

「何百年以上も前な。そのせいなのか、それとは関係ないのもわからねえけど、俺は」

百瀬のうるんだ大きな目が、遠くを見たまま急に細まる。

「今日いろいろ見て確信した。俺は憶えている。何故かはわかんねえ。でも、この地で昔起きたこ

とを、はつきりと憶えているんだ」

そう言うと、百瀬は表情をなくして、急に酒を煽った。

「……、僕は覚えてなくて、何か、ごめん」

「いや、鳴野にごめんとかわせるつもりじゃなくて。あー、俺、格好悪いな」

百瀬は、赤い顔のまま短い髪をくしゃくしゃとかき回して、へらりと力なく笑った。

「いーんだ。ずっと来てみたかった場所だし、旅は楽しいし、宮崎はうまいもンぱっかだし」

ほろ酔いの百瀬は赤い顔でにこにこしていたが、酒に弱いせいか、しばらくするとテーブルに伏し、眠そうなそぶりを見せ始めた。

「もう寝る？」

「ああ、うん」

百瀬の様子に、僕は彼に肩を貸して立ち上がる。大柄な彼を支えるのは案外大変だ。

ふと、窓の外を明るく感じて、僕は窓辺に寄ってみた。障子だけを開けて、息を呑む。

「どうした？」

「星が、ほら」

僕は明かりを絞り、障子だけを開け放つ。

闇に沈む世界に少し目が慣れると、窓ガラスに留まっていた幾ばくかの虫たちが影になって見えてくる。その向こうに深い森を包む、深い紺藍の夜空。今夜は新月らしく、天幕には煌々と冴えた

星々だけがあつた。電気をすべて消すと、その分だけ星は光を増した。

「へえ、きれー、だなあ……」

百瀬は、僕の肩越に夜空を見上げながら楽し気に呟く。けれど次の瞬間、彼は表情を一変させて、僕の肩にがばっと顔を伏せた。

「百瀬？ どうした？」

「やっぱり、思い出してくれよ、鳴野。そして、俺の記憶は本物だって言ってくれ……！」

「百瀬？」

「いくらこの地に伝説があつたって、お前がそう言ってくれなきゃ、俺一人の幻想かもしれないって、不安で仕方なくなるんだ」

泣きそうに切羽詰まった大きな瞳に、こちらが焦ってしまふ。

「百瀬？ あのさ、じゃあ聞かせてよ、その記憶の話……って、百瀬？」

返事は、——軽い寝息だった。

僕の肩に再び顔を伏せ、立ったまま、百瀬はすうすうと規則的な呼吸へと移行しつつあつた。ぐらつと百瀬の身体が傾いたので、慌てて支える。重い。

「おーい、百瀬……」

百瀬の頭を肩に乗せたまま、僕は一人取り残され、ぼかんとしてしまつた。星空から、ひとときわかる明るい惑星が、僕を笑っている。

「えーと、とりあえず横になろうか」

部屋の奥の二つ並んだ布団の片方に、僕は大柄な百瀬をどうにか押し込んだ。すやすやと寝入る彼を見ながら、することがなくなつた僕も、もう一つの布団に潜りこむ。

(なんでそんなに辛そうなんだよ、百瀬)

話を聞きそびれてしまったけれど、一体何が彼に、そんな顔をさせているのだろう。どんな記憶だというのだろう。

この地に関係するらしいかつての記憶とやらが、本当に存在するのなら。

(……僕にも、思い出させてほしい)

美郷の地と、そして何百年、何千年を知るだろう星の光に、僕は柄にもなく祈つて目を閉じた。

——夢の始まりは、金色の海だった。

夜明け。穏やかに波が寄せる浜辺は、鮮やかな光に満ちている。眩しい太陽の光は、両足を海に浸した立派な体躯の美丈夫をくつきりと浮かび上がらせていた。

「ここは金ヶ浜というらしいが、本当に砂浜が金色だな。全部、砂金だったらな」

「そうであれば、路銀に困らず済みますね」

答えた僕に、彼は笑った。

「冗談だ。相変わらずお前は真面目だな。それに、もう我は王ではないのだから、呼び捨ててくれ  
てもよいのだぞ」

「さすがに、そればかりはご勘弁を」

長い旅の間、王と側近、つまり彼と僕は二人きりになり、すっかり親しくなっていた。それでも  
自分は臣下だ。いざという時は命に代えて彼を守る覚悟がある。

「それにしても、この辺の海は温いな」

「我々の国の廻りにはなかった、穏やかで温かい潮の流れがあるようですね」

「この辺で、ゆるりと暮らせればいいのだが」

彼の声に、僕もうなずく。しばし追っ手には遭遇してはいないとはいえ、身の上を考えれば一所に  
留まらない方がよい。けれど、休まらない旅暮らしの厳しさに、どこかの地で穏やかに暮らせたら  
と、ささやかな願いを持たずにはいられないのだ。

彼は、目を眇めて海の向こうを見ている。誰が見ても高貴な身分であるとわかるほど、凜とした  
風格を漂わせている。一方、付き従う僕は弓だけは得意であるものの、骨格も華奢で、しょっちゅ  
う女人に間違われる始末だ。

白村江の戦火をかくぐって落ち延びたのもうずいぶん前になる。幼い頃から彼の従者であつ  
た僕は、彼と共に逃げ、海を渡った。途中の嵐で一度引き裂かれかけたが、再びこの浜辺で落ち合  
うことができた。

波と戯れている彼を見守る。新羅からの追っ手にいつ狙われるとも限らない。周囲にそれとなく気を配っていた僕は、とあるものが近づいてくることに気が付いた。

「……あれは」

僕が指さす先、今にも沈みそうなぼろぼろの小舟が一艘、浜に流れてくる。かすかに幼子の泣き声があるのに気づき、僕たちは浅い海をかき分けて小舟に歩み寄った。

「どうした？ 大丈夫か？」

彼と僕が小舟の中をのぞき込むと、そこには二人の幼子が乗っていた。双子の男児だ。一人は眠っており、もう一人は小さく泣いている。彼がぐずっている少年を、僕が眠っている少年を抱き上げる。

「大丈夫か？ 怪我はないか？」

子どもは急に抱き上げられ、びっくりして泣き止む。まん丸い目が彼の堂々たる威厳を感じ取ったのか、子どもはぼつりと呟いた。

「あの、……ぼくたちはしんだの？ あなたはかみさま？ それとも、おうさま……？」

「ああ、そんなものだった時もある。……でも今は違う、我らはただの旅人だ」

ぐったりしていた少年も、僕の手の中でうつつら目を覚ました。眠っていただけらしい。とろんとした目で僕を見上げてきた。

「お前たち、親は？」

彼の問いに、腕の中の幼子はうなだれた。

「捨て子か……」

彼は小さく、悔しげに呟く。暮らしが楽ではない地は多い。口減らしはどんな国でもあるとはいえ、やるせないものだ。

「……なあ。我に一つ提案があるのだが、聞いてくれるか」

「仰せのままに」

「命令ではない、提案だ。お前たちが考え、受け入れるかどうかを決めてくれ」  
彼は目を閉じた。それから、彼を見つめ続けている子どもたちに問いかけた。

「名は？」

少年たちは顔を見合わせ、小さく名乗った。

「福智」

「華智」

「よい名だ。福智、華智。……そして、我が同胞、之伎野よ」

彼は僕の名を呼んだ。彼の背後で、朝焼けの金色の太陽が静かに天へと上っていく。

「今これより、禎嘉と之伎野がお前たちの親になるというのはどうだろう。この地で、血よりも濃い、新たな絆を作ろうではないか」

弾む少年たちが、我先にと彼の膝に転がり込む。彼は静かに二人の頭を撫でて髪を梳く。

金色の浜辺から子らと共に旅をし、海に注いでいた川を上ると、森深い美郷の地に辿りついた。森の懐の深さに安堵した彼と僕は、しばし集落に留まることを決めた。気の良い村人たちは、僕たち家族のために、喜んで空き家を貸してくれた。

「之伎野、お前、女人と思いきまれているな」

「そういうことにしておいた方がよいと、禎嘉様が言ったからでしょう？ 本当に……」

「男二人よりは一家のように見えやすいだろうし、追っ手を欺きやすからう」

彼の太陽のように大らかな人柄と沈着な判断力は里人に好まれ、彼と僕の存在はすぐに郷に受け入れられた。——そう、僕が女人だと誤解されたまま。祖国からの追っ手を考えれば、家族の形はかえって都合がよいのかもしれないので、そのまま放っておいたが。

僕たちは穏やかに絆を育んだ。彼と僕は二人を自らの子のように愛し、二人は彼と僕を肉親のように慕った。

「禎嘉様、之伎野様」

「父上、母上と呼べ」

「はい、ちちうえ、ははうえ」

「ちちうえ、ははうえ！」

「母上はやめてほしいのですがね……」

女のように呼ばれることへの抵抗と困惑を示す僕に、ははっと禎嘉が笑う。その明るい顔を見ていたら、まあいいかと思えてしまう。家族の誓いを交わした僕たちは、少なくとも、今、充分すぎるほど平和で幸福だった。

禎嘉と僕は、郷の民が知らない百済の知と技をさりげなく村に伝えた。知恵は郷だけでなく、縁のある周辺の集落までを豊かに、そして大きくした。

「父上たちは、どこから来たの？」

福智と華智は、時折僕たちにそう尋ねることがあった。

「金色の海の向こうの、遠くの国からだ」

「父上たちはどうしてお国に帰らないの？」

「お前たちと、家族になったからだよ。この地で揃って暮らしたいのだ」

そうは言うものの、望郷の想いは決して消えるものではない。僕たちは月夜にはよく、二人きりで酒を酌み交わした。記憶の中だけになった国を想うことは、最後に残された二人だからできるとだった。

「臣下の私が、禎嘉様の家族というのは。……子どもたちの手前は言いづらいますが、本当は畏れ多いようにも思います」

「いいに決まっている。お前は臣下であったが、今は俺のたった一人の同胞で、家族だ。いいか、死んでも傍にいろよ」

彼はいつも屈託なく笑ってそう言うので、つられて微笑んでしまう。落ち延びた先、楽園のような美しい郷があるとは考えもしなかった。かつての身分も性別も関係なく、深い絆を持つ家族として共に生きる未来など。

「もちろん。次の世も、その次の世も、必ず禎嘉様の傍に。この地の暮らしも、百済の記憶も、魂に刻んで来世まで持っていていきます」

禎嘉は、虚を突かれたようにはっとして、それからこの上なく嬉しそうに笑み崩れた。

「よし。では、我も次の世まで憶えておくからな。絶対に忘れるなよ？ 之伎野」

「もちろんです、必ず。禎嘉様」

その秋の夕暮れは、いやに鮮やかだった。

ある日、山菜を採りに行っていた僕は、里人から集落に見知らぬ男たちが来たことを知らされた。大陸のものであろう見慣れない旅装姿で、弓矢を身につけた男たちだと。禎嘉が郷の者ではないことを知り、血相を変えた。

早く戻らなければ。嫌な予感に突き動かされて、郷へ駆け戻った時には、——もうすべてが遅かった。

僕が戻った時、小さな住まいは火矢を放たれ、燃えさかっていた。

燃える家の前で男たちに包囲され、既に数本の弓を身に受けた禎嘉が、腕の中に二人の子どもを庇って苦しうに膝を折っている。

「禎嘉様！」

僕は、常時身につけている小型の弓矢を手にも、躊躇せず男たちを背後から射た。一人が昏倒して倒れる。男たちがひるんだその隙に、僕は禎嘉と二人の子どもたちを助け起こした。

動揺する男たちの手が、矢をつがえようとする。けれどそれらが放たれるよりも早く、僕は彼と子どもたちを庇いながら森へと飛び込んだ。足音を消して獣道を通り、泥濘で足跡と落血をごまかして、奥へ奥へと逃げる。

黄昏時が僕たちに味方した。

大きく追っ手を引き離し、込み入った木立を抜け、樹の根元の深いくさむら叢に潜む。日が落ち、虫の声と風の音以外はしなくなった。

「禎嘉様、……大丈夫ですか」

「ああ、何とか生きてはいる」

近くのせせらぎから水を汲んで禎嘉に飲ませ、刺さったままの矢のいくつかを引き抜いて、血止めをする。だが、一番深くまで刺さった矢は、骨と臓器に深く食い込んでいて、簡単に抜くことが出来ない。明るさのないこの場での手当ては諦めざるをえなかった。傷の深さに、血を拭う手が震える。

今夜は新月だったはずだ。このまま身を潜めていれば、今宵は追っ手の目を眩ませることができ  
るかもしれない。けれども、その後はどうすれば。不安に心が揺れる。

「追っ手だな。国の言葉の響きが聞こえた……不覚だが、懐かしいな」

「申し訳ありません。油断しておりました」

「お前のせいではない。百済王の血を絶やさねば、やはり新羅が穏やかではないのだろう」

僕たちは現実には直面し、同時に嘆息した。しかし、この局面に立ち向かわなければならぬ。僕  
たちの腕の下、守るべき二つの命が震えているのだから。

「血のつながりはないとはいえ、俺の子だと村人が言え、お前たちも殺されかねない。福智、華  
智。今、話しておこう」

僕は二人の幼子を腕の中に強く抱いてやる。彼は傷を押さえたまま、静かに語った。

「我はかつて、海の向こうの百済という国の王であったのだよ。国は争いで滅んだ。……いつか話  
さなければと思っていた。今日まで黙っていたことを、どうか許してほしい」

子どもたちは僕の腕の中で、呆けたような顔をしている。

「……父上は、本当に王様だったのですね」

「……最初に見た時も、王様みたいだった」

「応よ。そして之伎野は、かつての臣下であったが、——今はたった一人の同胞で、親友で、お前  
たちと同じ、大切な家族だ」

僕たちはしばらくの間、四人で声もなく互いを抱きしめあった。夜闇が深さを増してくる。ぐんと気温が下がり、辺りには白い霧がかかり始めていた。

「霧が出てきたな。……この先はお前に任せた、之伎野」

弾かれて顔を上げると、彼はすいぶん青白い顔色をしていた。額にうっすら浮いた汗に傷の苦痛が滲む。僕の恐れを取り除くように、彼は僕のぼさぼさの髪を優しく撫でた。

「比木まで逃げれば、かくまってくれる者もあるだろう。霧に紛れて逃げ切ってくれ」

「そんな、禎嘉様を置いて行くなど、私には」

「お前はさっき、我らを守ってくれた。我にも、家族を守らせてくれ。祖国を守れなかった我だが、この家族だけは、どうか」

禎嘉は額に汗を浮かべたまま、微笑む。

「何より、その子らは、我らが幸せに生きた証だ。どうか、生かしてやってくれ」

「禎嘉様、ですが」

「それに、……生まれ変わっても、お前は傍にいてくれるのだろうか？」

いつかの会話を思い出し、僕ははっとした。問いかける視線の強さに応えて、うなずく。霧が少しずつ濃くなってくる。迷っている暇はない。

今生ではこれが最期だと、覚悟した。

「できれば、ご無事で。必ず、またいつか」

「……祖国と我を、忘れずにいてくれよ」

サラバ、と。

樹の根元にもたれて禎嘉は大きくうなずき、眠るように目を閉じた。

僕は振り返らず、二人を連れて走り出した。

「父上……！」

「父上……っ」

福智が唇を噛む。華智はすすり泣いている。漂い始めた霧を散らしながら、足音と嗚咽をぎりぎりまで殺して。二人を腕のそれぞれに抱いて、夜闇に閉ざされた獣道を走る。

今生の別れに涙は枯れない。視界が歪み、その度に袖で強く拭う。子どもたちは僕に連れられて走っているのか、それとも僕を支えてくれるのか分からなくなる。

(生き延びなくては)

いつか子らと共に、父の影を求めて比木から郷へと戻れたなら。彼が私たちの命を守ってくれたように、僕たちは百済王であった彼の誇りを守り、佳き言い伝えを郷に残そう。

楽園のようであった、私たちの安息の記憶を。

(禎嘉様、——次の世も必ず、傍に)

之伎野の名を忘れぬよう、永く姓として受け継ごう。そして、来世でも来々世でも、彼と交わした約束を、未来永劫守れるように。

障子の白が、うつすらと部屋を浮かび上がらせている。明け方が近い。

「……禎嘉様」

目が覚めると、いつの間にか泣いていた。

隣の布団では百瀬が眠っていた。彼の呼吸に安堵して、また涙があふれた。生きている。そのことに心が震える。

夢で見た禎嘉は、——百瀬の顔をしていた。

百瀬がふと、ぱちりと目を開けた。二人ともそれぞれの布団の中で横たわったまま、顔だけ向きあう。

「鳴野、泣いてる」

「夢を、見たんだ」

「どんな？」

百瀬がじつと柔らかな眼差しで見つめてくるので、僕はその理由を話した。

「……古い国とこの郷にまつわる、奇妙な現実感のある、長い夢だった。伝わっている歴史とはちよつと違うけれど、確かにその時代にその人たちが生きてたんだって感じられるような、生々しい夢だった」

「俺も、出てきた？」

「……百瀬は、その。王様だけど僕の親友で、たった一人の同胞で、大切な家族だった」

百瀬は先に起き上がって、窓を開けた。しんと冷えた秋の冷たい空気が、するりと僕の頬の横まで流れ込んでくる。金色の夜明け。浜辺の光景を思い出す。

「……俺一人ですっと抱えていた記憶を、この郷が、お前にも見せてくれたのかなあ」

朝に近づく薄い光の中で、僕も起き上がる。窓の傍に立ち尽くしている、百瀬に並んだ。

「夢を見てもさ。その、……それでも、今でもまだ、前世とか、半信半疑なんだけど」

そう前置きして、僕は、彼が昨夜そうしたように、彼の肩に額を軽く付けた。

「でも、もし、夢が本場で。僕だけが忘れていたっていうんなら。——、ほんと、ごめん」

「思い出すのが、遅すぎなんだよ……っ」

百瀬が嗚咽を噛み殺しそびれた様子に胸を突かれて、僕は彼の肩を励ますように抱いた。目の縁に残っていた涙が、押し出されてあふれる。

(きっと、僕らはいた)

緑の郷の日々、確かに、幸福に。伝わっているものと少し違う形でも、

そして。かつて臣下で、たった一人の同胞で、親友で、家族。来世でまた会おうと言い合えるよな、この世に二つとはない絆を育んだ相手が、今、目の前にいるのだとしたら。

「生きて、また会えて、よかった。……そして、百瀬の記憶も、彼らが生きていたことも、僕は信

じたい」

僕は半泣きになりながら肩を抱き合い、うれしさに笑み崩れた。

肌寒い空気、道にはうつすらと霧が出始めていた。民宿を出た後、僕たちは、近くの丘の公園へと車を向けた。

「恋人の丘あ？」

「恋人だけじゃなくて、親子とか、血縁とか、家族とかでも。一緒に鐘を奏でると、絆が増すんだって。民宿のおじさんが言ってたよ」

「へえ、そんなら寄っていくか」

辿りつくと、季節の移り変わりに際した美しい紅葉が、僕たちを出迎えてくれた。さくさく、と色づいた落ち葉を踏んで歩く。その先には、百花亭と記された四阿があった。

鮮やかな丹青が施された四阿の内から、風景を臨む。山間の赤や黄色に色づく木々の葉を、一面にうつすらと広がる霧が覆いつくそうとしていた。昔から繰り返されてきただろう美景に、僕たちはしばらく見惚れた。

「……福智と華智も、この世のどっかにいたりしてな。出会えたら、一緒に暮らすか」

「きつと、家族みたいに仲良くなれるよ」

「そうだといいな」

僕たちは二人で、四阿にある鐘を鳴らした。鐘は、かーん、と大きく鳴った。響き渡る音が距離と時空を超えて、あの日々を生きた僕たちまで届くように、そっと祈る。

夢は夢でしかないとしても、あるいは今の僕らこそが夢のような存在だったとしても。そのどれもがただ不確かでも。ここからまた、新たな無二の絆を築いていけばいい。

夢のまた夢の、その先まで。

「またいつか、ここに来よう」

「そんな時まで俺らが親友してたらな」

「次来るのは、来世になったりして」

「ははっ。今度こそ忘れんなよ？」

「ほんと、今度こそ気を付けるよ」

秋の空に、僕らの幸福な笑い声が響いた。





佳作

「帰る場所」

原田なぎさ



日豊本線からホームに降りると、濃い樹木の匂いがした。日向市駅の駅舎には、地元の杉が多用されている。この新駅舎が開業したのは僕の上京少し前だ。もう十五年以上たっている。杉の匂いはなかなかしぶとい。

天窓からは一月下旬の冷たい光が降り注いでいる。南国をうたっているが、宮崎も冬は東京と大差がない。ぶるっと震え、高架のホームを地上に下り、バスを待つ。ふるさとまではさらに一時間のバス旅だ。

四角い箱を膝にのせ、車窓からぼんやりと外を眺める。景色はまたたく間に鄙びていった。帰郷するのは中学校卒業以来だ。そのしばらく前に三村が合併し、美郷町は誕生した。当時も今も山あいのふるさとは高校がない。

「東京で進学したい」中三の遅い秋、僕はねだり、父母は折れた。

三歳違いの父の姉、かずゑさんは東京の三軒茶屋に住んでいた。独身だ。三階建てのペンシルビルを所有していて、一階でバーを営んでいる。「二階は物置として使っているワンルーム。狭いけど、そこでもいいって文樹が言うなら、家賃なしでおいてあげる」と僕の背中を押してくれた。ビルは元々賃貸用で、二階にも、伯母が暮らす三階にも、外から直接出入りできた。家事やバーを手伝いながら、都立高に通学し、私立大へと進学した。卒業後も就職せず、コンビニでバイトした。

小説を書くことに、少しでも時間を充てたかったからだ。

「甲斐くん、ちょっと読ませて」

中三の秋、放課後の図書室で、黒木智代に声をかけられた。同級生だがほとんど話したことはない。母校は隣の中学校を統合し、黒木はそこから移ってきたのだ。返事も待たずに原稿用紙を奪い取り、僕の隣に腰かけて、真剣なまなざしで升目の文字を追っている。短髪で日に焼けていた。黒木は陸上部員だったのだ。

夏休みの登校日、校庭を黙々と走り続ける黒木を見た。背筋を伸ばし、腕を前後に大きく振り、溢れる汗を拭おうともせず、前へ前へと駆けていく。その姿を美しい、と僕は感じた。まるで野生の小鹿が野山を自在に跳ねているようだ。なにもものにも縛られない。屈託も、躊躇いも、存在しない。彼女のように振る舞えたならば、世界はきっと輝いて見えるに違いない。そう感じ、羨望した。

幼い頃、僕はしょっちゅう発熱した。三歳の時、四十度の熱を出し、全身が痙攣した。母はパニックになり、一一九番通報したが、救急車が到着するのに二十分もかかった。以来、外出を制限されるようになる。

代わりに求める分だけ本を買ってもらえた。小学校に上がってからは、減多に熱を出さなくなつたが、親は僕を甘やかし続ける。思春期を迎えた頃には、ひよろりと痩せた、コミュ力の低い、本の虫が出来上がっていた。

父も母も流石にまずいと思つたのだろう。気をもみつつ、一人息子の上京を許したのは、また親心だったのだ。

「うん、とっても面白かった」と黒木は言った。五枚の原稿用紙を両手で持ち、トントんと机で高さをそろえて僕に向ける。「この短編小説、国語の課題で終わらせるのはもったいないね」

初めて書いた二千字弱のファンタジーだった。褒められて、こそばゆい。

「黒木は何を書いたの？」

「未来の夢」

「オリンピックの陸上選手になりたいとか？」

尋ねると、あはは、と笑い、首を振る。「高校で、インターハイには出たいけど、五輪までの力はないよ」

「よく走っているじゃんか」

「好きなんだ。風を切るのは気持ちがいい。タイムは最近、伸び悩んでいる」

「ふうん」と頷き、校庭で見ていることは黙っておく。

「甲斐くんはもう一六五センチぐらいあるよね。私は一五〇センチちょっと。まだ伸び盛りみたいで、関節が時々痛むんだ」

「成長痛か。僕も小学校の終わり頃に経験した。そのうち治まる」

「妹もそう言ってた」

「黒木には妹がいるんだ」

「あれよ」と後ろを振り返る。不意打ちをくらい、ポニーテールの少女がカウンターで身を縮めた。

図書委員の二年生だ。「彩嘉、盗み聞きは行儀が悪いよ」と黒木が笑顔でたしなめる。姉より高い背をかがめ、「ごめん、お姉ちゃん」と舌をのぞかせた。

「この町にはいいところがたくさんある」唐突に黒木は言った。「澄んだ空気、深い森、清い水。西の正倉院や神門神社も外せない」

前者は奈良の正倉院を忠実に模した建物だ。八世紀創建の神門神社には「百済王伝説」が伝わっている。

「なのになんと人が減っている」

その通りだった。高齢化も進んでいる。

「高校も大学もショッピングモールもないからね。若いと刺激がなくて、ちょっと辛い」

「わかっている。でも私は生まれ育ったここが好きなの。人も優しく、居場所だと感じている。高校に進学しても必ず戻る」

「それが未来の夢なの？」

「そう。そして一人でも多くの人たちに、この町に来てもらう。できれば暮らしてもらいたい。課題では、物語に仕立てて賑わう地域の未来を描いた。それを実現させるため、さらに町のいいところを増やしたい。あのさ、甲斐くんの小説を読みながら、私、思いついたことがあるんだよ」

「何？」

黒木は僕の顔を真っすぐ見つめた。「甲斐くん、作家になってよ」

え？

「ベストセラーを連発する作家になって。プロフィールには『宮崎県美郷町出身』と明記してね。賞をとったらインタビューで必ず町にふれること。作家はきつと都会に住むんだろうから、凱旋講演しに来てね」

「……そんなにうまくいくかなあ」

「きつといくよ。これほど素敵な短編を書けるんだ。甲斐くんには才能がある。これからも、書いたら一番最初に私に見せて。これでも結構、読書家なんだ。妹と同じ図書委員。読んだら必ず感想を伝えるから」

右手の小指を立てながら「約束だよ」と繰り返した。気圧されて、僕は自分の小指をそつと差し出す。黒木から指を絡めてきた。ほんのりと温かく、湿っている。女の子がこんなに柔らかいものなのだ初めて知った。

「指切りげんまん。嘘ついたら針千本のーます。指切った！」

黒木は笑った。生まれて初めて胸の奥がぎゅつと切なく締めつけられた。

バスは耳川沿いに山道に行く。右手に大内原ダムの威容が見えた。日向市から美郷町に入った合図だ。

おだてられ、本気で作家になろうと考えた。そのために東京に出たかった。高校でも大学でも文芸部に籍を置き、小説を書いてはメールで送った。卒業しても変わらなかつた。

毎回、翌日までに返事があつた。高校時代に一度だけ、「とりこんでるから時間がほしい」と一週間放置された。それを除けば短編でも長編でも同じだった。

「すごいいい」と黒木は必ず僕を褒め、続けて「ヒロインが主人公に惹かれる描写にもう少し説得力がほしい」「前半の伏線の張り方がやや強引」などと具体的な意見をくれた。腹が立つほどよく読んでいる。指摘はすべての確で、直すと話が引き締まった。

黒木に褒められ、感想をもらえることが、書き続けるモチベーションになっていた。新作を黒木に読ませたい。どのくだりにも突っ込ませたくない。執筆は孤独な作業だ。何度も心が折れかけて、その都度メールに救われた。黒木は優れた伴走者でもあつたのだ。

小説以外のやりとりはしなかつた。これは自分と黒木が夢を叶える往復書簡だ。淡い好意や郷愁で、濁らせたくない。初めの頃はそう考え、そのうち別の理由も加わつた。故郷には帰れない。黒木に合わせる顔がない。

小説賞に落ち続けていた。十五年書き続け、一冊も本を出せていない。何度か最終選考までは残つたが、三十路を越えて僕は約束を果たせていなかった。

「甲斐さん」

顔を上げると浦澤風花が立っていた。ジーンズにジャケット姿だ。動転し、真夜中なのに電話してしまった。

年が明けて六日目の土曜日だった。風花は吉祥寺の実家から広尾の病院まで駆けつけてくれた。「悪かった」と七歳下の編集者に頭を下げる。

「そういうのはいいんです。駆け出しなりに、仕事で鍛えられていますから。そんなことよりかずゑさんは……」と風花が尋ねる。僕は黙って首を振った。ついさっき、救急医から伯母の臨終を告げられた。

「急性心不全です。外傷はありません。搬送時にはすでに心肺停止でした。バーであなたが見つけた時には、すでに倒れて数時間経っていたと思います」医師は言った。

その夜はBreakの年明け最初の営業日だった。コンビニのバイトから戻ってきたのは二十二時。外階段から二階の部屋に上がろうとして、バーのドアのプレートがCLOSEのままだと気がついた。伯母は時々そういうミスをする。しつかり者の美人なのに、どこか抜けてて放っておけない。さぞや若い頃はモテただろう。還暦過ぎまで未婚なのは美学だろうか。

ドアの鍵はあいていた。かずゑさん、と店に入って名前を呼ぶ。カウンターと小さな机が三つだけ。薄明かりに照らされた店内に、人の気配はなかった。レジの脇からカウンターの内側に立ち入る。うなぎの寝床に華奢な体が倒れていた。

「宮崎に連絡は？」と風花が訊く。実家にはスマホから二度電話した。一度目は搬送中で、母が出た。「どうしたのよ、こんな遅くに？」と寝ぼけた口調で質問された。事情を伝え、すぐに切る。二度目は医師の説明直後にかけた。今度はワンコールで父が出た。

僕の話聞いたあと「突然死か。自由に生きた姉貴らしいな。面倒かけて悪かった。きょうだいだから、忌引き休暇が三日とれる。朝イチの飛行機でそっちに行く」と労われた。父は町にある農産物加工会社の総務課長を務めている。地元で生まれ、日向市の高校を卒業後、就職した。隣村の母と結ばれている。人生のほとんどを生まれ故郷で過ごしてきた。

かずゑさんは高校から福岡に出た。両親、つまり僕の祖父母には「三年間だけ都会で高校生をさせてほしい」と懇願し、卒業後、だまし討ちみたいに東京の短大へと進学した。バイトで密かに入学金や引越し費用を貯めていたのだ。祖父母は激怒したが、かずゑさんは帰郷せず、被服科を出て青山のアパレル会社に就職した。パタンナーとして腕を磨き、デザイナーに転じた話は何度か聞いた。ただ、アパレルを辞めてからバーを営むまでの数年間は謎のままだ。尋ねたが、「まあいろいろよ」と苦笑いしてはぐらかされた。

伯母に対する父の思いは複雑だった。慕っているのは間違いない。だが、かずゑさんが親に「謀反」を起こした結果、弟の自分が故郷に縛られたようにも感じていた。中学時代、「故郷を捨てた姉貴みたいに、俺も一度ぐらいは都会で暮らしてみたかった」と酔った父が口にするのを耳にした。「係累は甲斐さんと、ご両親だけでしたよね？」病院の待合室で風花が僕の隣に腰かける。祖父母

はずでに他界していた。僕は頷き、「地元には友人知人も少ないから、東京で家族葬まで済ませよう」と父が言った。ご遺体を飛行機で運ぶとなると大ごとらしい。日曜日と翌日の成人の日に忌引き休暇をくっつけて、最長五日はこっちにいられるそうだ」

「手伝いますから、何でも言ったださい」

「悪いよ。僕と違って忙しいだろうし、何より風花は縁者じゃない」

「この先、縁者になるかもしれないじゃないですか」と言った後、迂闊さに気づいたように頬を染め、「……それはともかく、私も高柳編集長も、かずゑさんには随分お世話になりましたから」と囁いた。

上京した時、高柳さんはすでにBackeの常連だった。店で皿洗いを手伝っていると、「天下の『週刊春望』の副編集長」とかずゑさんに紹介された。大手総合出版社・春望堂の看板雑誌だ。硬派で知られ、数々の政治家や芸能人の首をとってきた。

きっと編集者も強面だろう。そんなふうに思っていたが、高柳さんは眼鏡の似合う痩せた紳士だった。歳はかずゑさんよりいくつか下で、左手に指輪をはめている。僕が大学を卒業する頃、純文学の文芸誌『春望』の副編集長に横滑りし、数年後、編集長に昇格した。

僕が書いてきたのはファンタジー小説だ。ジャーナリズムとも純文学ともほど遠い。「小説を書いている」とは言えなかった。その高柳さんが去年春、「我が社の新人。『週刊春望』の期待の星」と連れてきたのが風花だった。

会った瞬間、黒木のことを思い浮かべた。短髪以外、とりたてて目鼻立ちは似ていない。親しくなつてその理由に気がついた。もう十年以上会っていないが、黒木は僕の「編集者」だったのだ。その属性と、本物の編集者である風花が重なった。

「こいつ、今どき変わり者でさ。詩歌か純文をやりたいらしい。それで俺になつてゐる。人事権はねえぞと言つたのに」高柳さんはカウンターで笑つてゐた。「文学部の卒論は牧水で書いたそうだが筋金入りだな」

かずゑさんは「風花ちゃん、若山牧水が好きなんだ。若い頃、処女歌集だけは読んだことがある。恋の歌のてんこ盛りで、私にはちよつと甘すぎた」と苦笑した。

「ママは同郷だったよな」バーボンを舐めながら、高柳さんが口を挟む。

「宮崎というくりではね。知つてるように、出身は牧水の生誕地、日向市の隣町」

「美郷町ですか？」とすかさず風花が言い当てた。「歌人小野葉桜の故郷ですよね」

驚いた。地元では偲ぶまつりも開かれているが、牧水ほど葉桜の知名度は高くない。戦前に亡くなつてから三十年近く埋もれてゐた。遺歌集が世に出たのは昭和の終わりだ。

卒論を書くために、風花は牧水を調べ上げ、親交があつた葉桜を知つたという。黒木を思い出させた風花から、故郷の歌人の名を聞いた。以来、彼女が気にかかる。昨夏、勇気を奮い食事に誘つた。予想に反し、快諾された。話下手だが風花とは活字を巡つて話が弾んだ。距離が縮み、小説や黒木のことも打ち明けた。

「黒木さんは甲斐さんの『編集者』。会ってもいないし、メールでやりとりするだけですよね？」  
しばらくしてから風花に訊かれ、頷いた。外形的にはただそれだけの関係だ。出会った当初、風花に黒木を重ねたことは黙っていた。

耳川沿いにバスは右に左にカーブして、山あいの国道を走り続ける。膝の上の骨壺が落ちないよ  
うに両手で支えた。

かずゑさんが倒れた翌日、両親は慌ただしく上京し、葬儀屋を手配した。最低限の遺品を片づけ、  
連休明けには世田谷区役所に死亡届を提出した。年金事務所や保険会社、銀行、郵便局への連絡な  
ど、やるべきことは無限にある。冬場のせいか、火葬場は混んでいた。予約が取れない。葬儀屋に  
紹介された住職にお経を読んでもらったところで時間切れになり、両親は宮崎に引き返した。

「文樹、すまんが火葬は頼む。相続やバーの扱いなんかも話さにやららん。今年は一月二十日から  
三日間が師走祭りだ。それにあわせて一度美郷に戻ってこい」と父に言われた。ことがことだ。黒  
木を理由に帰りたくないとは言い出せない。かずゑさんには恩義もある。僕は黙って頷いた。

羽田まで父母を見送り、ぼんやり思った。僕には多分、才能がないのだ。いつまでもモラトリア  
ムは続かない。かずゑさんはこの世を去った。黒木も情性で「編集者」を続けているのだろう。風  
花は激務で大変そうだ。関係を一步先に進めたがっているようにも感じられる。今が諦めどきな  
かもしれない。

別れの日、火葬場には風花と高柳さんが来てくれた。花に包まれたかずゑさんに三人で祈りを捧げる。そこでふと思いつき、高柳さんに訊いてみた。「お骨は故郷に納めます。でも、ふるさとを捨てた伯母にとって、それは本当に望むことなのでしょうか？」

しばらく僕を見つめた後、高柳さんは足元の紙袋から文庫本を取り出した。表紙には少女のイラストがあしらわれている。タイトルは『めぐり逢いリポーン』、著者は「高濱木綿子」とあった。「甲斐くんはこの本を知っているかい？」

「いいえ、知りません。レーベルは随分前になくなった『春望堂ジュブナイルセレクション』ですよ。」

「そうだ。『めぐり逢いリポーン』は人気シリーズだった。全十巻で累計二百万部を発行している。高濱木綿子は売れっ子のジュブナイル作家だったんだ」

「どんな話ですか？」

「太古の昔、異国を治める王子と王女が、戦乱に巻き込まれた。この国まで別々に逃げ延びたが、敵方に打ち取られる。死してなお、愛する相手と再会したいと願う二人は、冥王に懇願し、転生して年一度だけ会うことを許される。だが、ただ転生するだけでは過去の記憶も消えてしまい、お互いを認識できない。抗うため、二人はそれぞれ冥界の魔物を倒し、『記憶素』を集めていくんだ」

人物の性別や転生などの設定は異なるが、物語の骨格には覚えがあった。「もしかして、美郷町の百済王伝説がモチーフですか？」

高柳さんは頷いた。「アパレル会社のOLが、趣味で書いた短編を送ってきたのが始まりだった。俺は当時、ジュブナイル編集部の新米だったんだ。磨けば光ると直感し、二人で構想を練り上げた。筆名は『濱木綿子』を提案された。宮崎県の花、ハマユウから名付けたものだ。ただ同姓同名の女優がいる。彼女は俺の姓から一文字取り、『高濱』に変更した。高濱木綿子はシリーズを完結させて会社を辞め、専業作家になった。単発でもいくつかヒットを飛ばし、引退した」

「なぜです?」

「俺が別の女と結婚したからだ」

棺に本を納めながら、高柳さんは淡々と口にした。

「高濱木綿子、いや、かずゑさんは高柳さんの恋人だったんですか?」

「お互い好意を抱いていた。だがそれを伝えあつたことは一度もない。編集者と作家の関係を越えてしまえば、俺は第三者として彼女の文章を読めなくなる。俺に認めてほしくて文字を紡ぎ続けた彼女にとつても、それはまったく本意じゃない。二人とも、そのことをよくわかっていた」

三十歳を越えた頃、高柳さんは親から見合い話を持ちかけられる。かずゑさんに伝えると、「いいじゃない。あなたみたいな鈍い男が所帯を持てる最後のチャンスだ」と笑われた。高柳さんが入籍した日、かずゑさんは筆を折り、印税でビルを買った。開いたバーには Backe と名づけた。死ぬまで結婚しなかった。

黙り込んでいた風花が、ポツリと呟く。「かずゑさんは高柳さんもふるさとも、ずっと愛してい

たんですね……」

首を傾げた僕に向かい、「甲斐さん、わかりませんか？」と問いかける。「Practice っつ、英語で『百濟』のことなんです」

骨壺を両手で抱え、リュックを背負い、バス停から実家へ歩く。田舎町の風景は中学時代と変わらなかった。

今朝、羽田まで風花が車で送ってくれた。

「必ず帰ってきますよね？ 信じて待っていていいですよね？」

やっぱり黒木を気にしている。たちが悪いと感じるのは、風花の不安をまったく杞憂と言い切れない自分自身の心根だった。

大丈夫、とそれでも風花の頭を撫でる。霞むような小さな声で風花は言った。

「ゆるしたまへ別れて遠くなるままにわりなきままにうたがひもする」

牧水の一首だった。

軽ワゴンが僕を追い越し、国道沿いに停車した。白い車体に「美郷町立図書館」と書かれている。運転席の窓が開き、中から若い女性が顔を出した。「甲斐先輩、ですよね？」

大きな瞳に薄い唇、シャープな鼻筋。薄化粧だが美しかった。一瞬たじろぐ。知り合いにこんな

美人がいただろうか。

「わからないほどおばさんになっちゃいましたか」とポニーテールを揺らしながら苦笑している。そこでようやく気がついた。「黒木の妹さんか」

「そうですね、彩嘉です。でもまあ、わからないのも無理ないか。中学卒業以来ですもんね」  
お姉さんはどうしているの、と尋ねかけ、言葉を呑んだ。

「私、高校出てから役場で働いているんです。今は希望が叶い図書館勤務。お年寄りも多いから、定期的に移動図書館をやっています。先輩は師走祭りで帰省ですか？」

「いや、東京の伯母が亡くなって、お骨を納めにきた」  
「ああ……」と彩嘉は骨壺に視線を向ける。「大変でしたね。謹んでお悔やみ申し上げます」

そこで奇妙な間ができた。「じゃあ私、行きますね。次の公民館での時間もあるので」と口にして、思い出したように言葉を継いだ。「……姉とのメールは続いていますか？」

「最近、あまり小説を書けていない。ただ、原稿を送った時には、いつもすぐに感想を返してくれる」  
「これまでおかしなことはなかったですか？」

僕は記憶を手繰り寄せる。「強いて言えば、高二の夏に一度だけ、返事が遅れたことがあった。その直前のメールには、真面目な黒木らしくない一文が書かれていた。あとは変わらず鋭い指摘をもらっている」

「らしくない一文って？」

「文末に『オサラバー』と書いてあった。時代劇かよ、と突っ込みかけた」

実家には僕の部屋が残されていた。二階の南の角部屋だ。「文樹が帰ってくるから、窓を開けて空気を入れ替え、布団は干した。かび臭い？」と母が言う。大丈夫、と僕は答え、荷物を置いてベッドに寝転ぶ。人生の半分を東京で過ごしてきた。作家になるため刺激がほしい、最先端の文化に触りたい。中学時代にそう感じ、故郷を出た。にも関わらず、この部屋も、この町も、予想以上にしくりなじむ。ふるさとは磁力があるのだ。かずゑさん同様に、僕も磁力に捉われている。

帰省した金曜日の夜、両親は師走祭りを見に行った。初日には迎え火がある。誘われたが、疲れしていると断った。半分は本当で、半分は嘘だった。黒木に出くわすことに怯えていた。作家になれずに詰られそうで、風花がいるのに初恋を思い出してしまいそうで――。

祭りは百済王伝説にちなんでいる。歴史は千年以上とされていた。朝鮮半島での戦乱から逃れた王族父子は流浪の末、現在の宮崎県に流れ着く。死後、父親の禎嘉王は美郷町の神門神社に、息子の福智王は九十キロ離れた木城町の比木神社に祀られた。年に一度、父子のご神体を引き合わせるのが師走祭りだ。福智王を迎える神門神社の手前では、夜に巨大なやぐらが燃え盛る。二日目には神楽が奉納されるのだ。

土曜日自宅に籠り、両親を手伝った。かずゑさんの財産目録を作成し、おしぼりや酒類の納入業者に電話をかけ、菩提寺の住職と納骨について相談した。風花からは日曜日の朝、LINEがあっ

た。「著作権は相続の対象になると高柳さんが言っていました。三年前に『めぐり逢いリボーン』が電子書籍で復刊されて、今でも少し印税が入ってくるそうです。気をつけて、必ず帰ってきて下さい」

文面をじっと見つめていると、通知音が小さく響いた。「黒木彩嘉」と表示されている。一昨日の別れ際、IDの交換を求められた。

「早い時間にすいません。今、先輩の家の前です。話があります。くだりましと一緒に行ってもらえませんか？」

二階の窓から外を見る。長身をライダーズーツに包んだ彩嘉が二輪車の横に立っていた。

祭りの最後の儀式がくだりましだ。福智王が比木神社に帰っていくのをみんなで見送る。ヘルメットを手渡され、促されるまま二輪車のタンデムシートにまたがった。「遠慮しないで下さいね」と彩嘉に言われ、細い腰に両手を回す。一月の冷たい風を切りながら、十五分で神門神社の手前まで辿り着く。

くだりましを見るのは初めてだった。一本鳥居を抜け、比木神社の一行が冬枯れのあぜ道をそろりそろりと歩き出す。町民は少し離れて横一列に並んでいた。みな顔が黒く汚れている。「ヘグロです。別れの悲しみを隠すため、顔に墨を塗るんです」と横から彩嘉が教えてくれた。

その時、見送る列から声が上がった。鈍色の冬空に「オサラバー、オサラバー」と叫びが響く。

驚いて彩嘉を見た。真っすぐ前を向いたまま、彼女は声をたてずに泣いていた。

「姉は亡くなりました。高二の夏です」

唐突な告白に、眩暈がした。両脚で踏ん張って、かろうじて転倒を免れる。

「高校に進んですぐ、右脚に肉腫が見つかったんです。宮崎市の病院に入院しました。一度復学しましたが、再び悪化し、脚を切ることになったんです。あのメールは姉が手術前夜に送ったものでした」

遠い昔の図書室を思い出す。関節に痛みを覚え、タイムが伸びない。そう言って、黒木は薄く笑っていた。

「成長痛だと、私も姉に言っていました。発見が遅れた一因になったと感じています。手術中に急変し、姉は帰ってきませんでした」

福智王が遠ざかる。見送る列からいつまでも、愁いを帯びた「オサラバ」の声がる。

「偽り続けてごめんなさい。もうやめます。メールは私が引き継ぎました」

死後に彩嘉は自分宛のメモを見つけた。短文にメールのパスワードが添えられていた。

彩嘉がメモを読んでいるということは、私は目覚められなかったということですね。最期の頼みがあるんです。甲斐くんが夢を叶える手伝いを、代わりに続けてくれませんか？ あの人はシャイ

でナイーブだから、誰かに褒められ、背を押されないと書けなくなる。大丈夫。私より彩嘉はずっと本を読んでいます。作文だって得意でしょう？　お願いです。甲斐くんが抱いた夢は、もう走れない私にとって、残された夢の断片でした。

「黒木は死を覚悟して、あの一文を書いたのか」

彩嘉は黙って首を振り、「万一のメモは残していましたが、姉は最期の最期まで、生きることを諦めていませんでした」

「だったらなぜ」

「『オサラバ』は『さらば』とは違うんです。韓国語の『サラボジャー』に由来すると言われています」

「韓国語？　どういう意味？」

「生きてまた会いましょう」。姉は甲斐先輩との往復書簡に、帰りたいと願っていました」

到着ロビーに出たところで、いきなり風花に抱きつかれた。宮崎からの羽田便は、悪天候で三十分遅延した。「戻らないんじゃないかと怯えてました」としゃくりあげてる。

Backeを再開すると心に決めた。遠く離れた東京で、かずゑさんが故郷を思い続けた大事な場所だ。最愛の人の居場所でもある。

彩嘉にも甘えない。今度は僕が風花をしっかりと支える番だ。ふるさとは磁力があった。だから

こそ、逃げて帰る場所ではない。黒木とともに心に宿し、僕は言葉を紡ぎ続ける。

「その唾液なぜ面上に吐かぬぞと反抗心を起して見るかな」

まるで察したように、僕の胸に顔をうずめた風花が囁く。うん、そうだ。風花は本当によく知っている。

見守り続けてくれた優しい伯母と、知らぬ間にバトンを渡していた「編集者」を失った。いつになつたら本を出せるかわからない。でももう二度と諦めない。歯を食いしばってでも夢を追う。それは故郷を愛した黒木の夢でもある。言い訳を何かに求めて逃げ出さない。

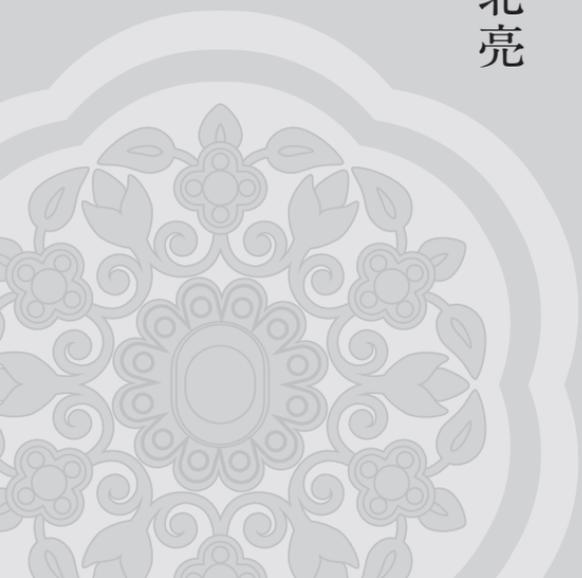
風花が詠んだ葉桜の歌を、胸の奥で反芻し、僕は彼女を抱く手に力を込める。



佳作

「大猪子」

洞北亮



どん太郎は、砥くさで磨き上げた銅劍に、己が顔を映した。刃の上に、額に玉の汗を吹き、喰いつくような目をした少年の顔がある。上を向いた鼻や大きなどんぐり目にはどこか滑稽味があつて、悪相ではない。角ばった大きな顎が目立ち、下唇に上唇が負けていた。

くつきりと顔を映す刃に満足したが、銅造りの長である父親には鼻で笑われた。「研ぎ過ぎだ。技量よりも鼻の方が高くなりおつて。十四にもなつてこの腕か」

喜びではち切れんばかりの胸が萎む。どん太郎は劍を投げ捨て、工房を走り出た。

「ええい！ クソ、クソ、クソ！」

どん太郎は南郷の丘を駆け登つた。中腹で足を止める。すぐ先で、見知らぬ少年が劍舞を舞つていた。高く飛んでは廻り、劍を突く。流麗な動きは百済様式の劍術の型だ。銅劍は使い方を誤るとすぐに曲がる。そこで、正しい劍の振るい方を纏めたものが型とされた。

「良い劍を作るには、己が扱えねばならぬ」

父の教えで幼い頃から劍を修練してきたが、こんな動きはできない。音を立てずに丘を登り、木の陰から少年を見た。歳の頃はどん太郎と同じ位か。彫りの深い端正な顔立ちだ。百済人が着るような、洒落た服を着ている。

少年は片足で立ち、重心を下げた。両手を広げ、一気に地を蹴る。伝説の鳥が飛翔する姿を模した型だ。爆発的な威力の突き技だが、体を繰るのが難しい。少年は楽々と飛翔し、着地するや、ど

ん太郎めがけて飛んできた。声を上げる間もなく、後ろ手に取られた。

「すまぬ。お前の剣技に見惚れていた。俺も剣をやるんだ。今のは鳳凰飛翔だろう？」

少年が無言で頷く。どん太郎が父との一件について話すと、少年は手を放した。

「……なるほど。職人氣質の父親か」

「ふん、あのしゃくれ瓢箪、文句ばっかだ」

どん太郎が目を剥いて、小言を言う父の表情を大袈裟に真似ると、少年は笑った。

「面白い奴だな。よし、修練の邪魔をしたことは許す。お前の名は？」

「どん太郎」

「どん……太郎。どんくさいからか？」

「馬鹿、父は銅造りの里の長。その長男だから銅の太郎。通称、どん太郎だ。お前は？」

「ふ、忘れた」

「馬鹿を言え。己の名を忘れる者があるか」

どん太郎は重ねて尋ねたが、相手ははぐらかすばかりだ。どん太郎は苛立ちを覚えた。

「お前は名無しの権兵衛か！」

「なるほど。なら、権兵衛だ。俺のことは権兵衛と呼べ。それでいい」

これ以上、聞いても無駄だ。

「じゃあ、権兵衛よ、お前は近隣の里が招いた百濟職人の子だろう？ 陽が落ちぬ内に帰れ。この

辺りで何かあってはうちが困る」

「気にするな。そんな上等な身ではない」

だが、そういう権兵衛の身なりは悪くない。

百済訛りがあるが、少年の使う大和言葉は、都の使者が使うのと同じ、上品なものだった。

「でも、百済所縁の者だろうか？　百済といえば、いよいよ、唐と新羅にやられそうなんだってな。お前、大陸から逃げてきたのか？」

権兵衛の目に、警戒の色が浮かぶ。

「なぜ、知っている」

「うちは朝廷の御用も務めてるんだ。飛鳥の都から派遣された使者が、父に話していた」

海の向うの半島では、百済と高句麗が新羅と睨み合っていたが、八年前、大国の唐と結んだ新羅が百済に攻め込んだ。

「残念だけど、百済は限界らしい。朝廷が送った援軍も、白村江から引き上げるって」

権兵衛が溜息をついた。「そうか」と答える声が暗い。どん太郎は権兵衛の肩を叩いた。

「行く宛がなければ、俺の里に來い。以前、工房に百済人の職人頭がいたんだ。皆、少しは百済語ができるぞ。父に頼んでやる」

けれど、権兵衛は首を縦には振らなかった。

「遠慮する。俺にはやることがある」

「こんな丘でか？ なんだ、それは」

「丘ではない。この先の浜辺だ。……陸地が見えてきた頃に海が荒れて、家族と逸れた」

十日前の酷い嵐か、と、どん太郎は合点した。夜明けに駆け足で通り過ぎて行つた台風は、浜に船の残骸と、多くの百済人の遺体を残していった。軽い調子で権兵衛は続けた。

「ここで暮らす。なに、近くに小川もあるし、梨の木もある。腹が減ったら梨を食うさ」

どん太郎は肝を潰した。明るい内は良いが、里の外には獣がいる。追剥や人攫いが出たという話も少なくない。どん太郎は、里に来るよう熱心に説いたが、権兵衛は頑なだった。

「仕方のない奴だな。よし、これだけは言っておく。人喰い猪子には注意しろ」

「まさか。脅してもしない限り、猪は人を襲わない。奴らが食うのは芋や木の実だ」

「だが、出るんだ。もう、何人かやられた」

ここ半年、銅造りの里では、山のような大猪が人を襲うという噂が広まっていた。

「猪はなんでも食うんだ。人は喰わないという保証はないぞ。ん？ 何がおかしい」

「熊の間違いじゃないか。噂通りの巨体なら、芋では腹の足しにもならんだらうけど。ふふ、むしろ、猪を喜んで食うのは人間なのにな」

ふと、どん太郎の脳裏に瓜坊の姿が浮かんだ。七歳位の頃、雪の朝、畏に掛つた猪の親子を見たことがある。里人が母猪を射殺した。身を寄せ合う瓜坊にも順に矢を放つ。怯える瓜坊が哀れで、最後の一匹を逃がした。冬の貴重な食糧だと、父には叱られたんだっけ。

翌朝、どん太郎が権兵衛に会いに行くと、昨日と同様、丘の上で剣技の修練をしていた。どん太郎は声を掛けた。

「熱心だな。お前は武人の子か」

「父は武人ではない。だが、剣は好きだ」

権兵衛は動きを止めずに答えた。

「ところで、なんの用だ」

「父の言いつけだ、連れて来いってさ。そう、嫌な顔をするな。里長の元には話が集まる。家族の手掛かりがみつかるかもしれないぞ」

里長と相對して、権兵衛とどん太郎が座った。身体が大きく貫禄のある里長を前にしても、権兵衛は物怖じしない。背筋を伸ばし、堂々と受け答える様は、都の使者のようだ。

「百濟から戦火を逃れ、家族と渡って来る時に嵐に遭った、打ち上げられた浜で気づいた時にはお前一人だった、ということだな」

への字に結んでいた里長の口角が上がった。

「お前の家族を見掛けたら知らせるように、近隣の里にも伝えよう。兄弟はいるのか？」

「二歳歳の弟がおります」

「家族に特徴はあるか？ 農ならこれだ」

里長は自分の顎を撫でた。

「その親不孝者に聞いてみよ。陰でしゃくれ瓢箪と呼んでおる」

里長が悪戯っぽい目を向けた。どん太郎が目を伏せると、父親の豪快な笑い声が響いた。

「どうした？」

声を出さない権兵衛に、里長が声を掛けた。

「今更言うことではありませんが、百済からの逃亡者という話が広まると、追手の耳にも入るのではと、危ぶみました」

「海を越えては来まい。だが、見知らぬ者がいたら知らせよ、とだけ、伝えよう」

「ありがとうございます。では、里長様には申し上げます。父は非常に背の高い男です」

里長は神妙な顔で、深く頷いた。

「わかった。儂のことは父様と呼べ。寝食を共にし、仕事も手伝って貰う」

里長は、顎でしゃくってどん太郎を指した。

「どん太郎、お前が世話してやれ」

どん太郎は、権兵衛を工房に連れて行った。

「権兵衛、火起こしはできるか？」

「自分でやったことはない」

「そうか。それじゃ、火起こしから教えよう。銅造りは銅鉞石を溶かすことから始まるんだ。朝、工房に来たら火を起こして種火を作れ。種火を強い炎に育てるのは職人達がやる」

火起こし用の板の穴に火きり棒を当てて擦ると炭粉が貯まる。炭粉が発火したら、ゼンマイの綿のような、燃え易い火口はくちを入れた器に移し、息をかけて種火にする。

動作は単純だが、慣れないと一苦労だ。権兵衛が苦戦していると、いつの間にか傍にいた、どん太郎のすぐ下の弟が口を出した。

「棒を穴から外しちゃうから駄目なんだよ」

「なるほど。時々、棒が滑るんだ」

「回す方ばかり気を取られてるからさ」

「それ、お前が俺に言われてることだろう」

どん太郎は苦笑した。権兵衛は手を止めた。

「どん太郎の弟か？ 名は？」

「どん次郎。俺がやってみせようか？」

どん次郎は得意そうな顔で言った。

「お前だって、やっと火がつくようになったばかりだろう。いいから、あっち行ってろ」

どん太郎は追い払おうとしたが、弟は聞かない。言い争っていると、権兵衛が言った。

「どん次郎、手本を見せてくれるか？」

予想通り、弟の火起こしには時間が掛かった。その上、やっと点けた火を、自慢げに権兵衛に見せている。どん太郎は苛立った。

「さっさと息を掛ける。消えてしまうぞ」

兄の尖った声に焦ったのか、どん次郎は、火口にえい、と強く息を吹いた。途端に炭粉が舞い、どん次郎の鼻先で爆ぜた。

「馬鹿っ！」

どん太郎は、火口の器を落として泣く弟を乱暴に引き寄せた。顔を検めると、鼻と額が赤くなっただけで済んだ。安堵の溜息が出る。

「どん次郎、ありがとな。コツが解ったよ」

火口の器を拾いながら、権兵衛が言った。

「もう、泣くな。兄上は怒ってないぞ」

なあ、と権兵衛に促されては、これ以上叱れない。どん太郎は、弟の両肩に手を置いた。

「言ってるだろ、火の神様は不浄がお嫌いだって。炭粉を散らかすから、叱られたんだ」

どん次郎は小さく頷いたが、説教は終わったと見て逃げ出した。止める間もなく駆けて行く弟の後ろ姿に、どん太郎は舌打ちした。

「まったく、掃除位してけてんだ」

「俺がやるよ。外に掃き出せばいいか」

穏やかな口調で、権兵衛が申し出た。

「いや、専用の麻袋があるんだ。磨き作業でも銅の粉が沢山出るから。それに入れろ」

作業を再開した権兵衛は火起こしに成功し、陽が上り切る頃には、難なく種火を作れるようになった。どん太郎は目を丸くした。

「まだ数日掛かると思ったのに。明日から炭で種火を育てる方法を教えよう。母屋で中食なかじきを食べたら、上がっていいぞ」

「もう、終わりか？」

「お前は半日働けばいいってさ。空いた時間は浜に行くんだろ？ 陽が落ちる前に戻れ」

権兵衛は覚えが早かった。真面目に働くので、仕事に厳しい職人頭も権兵衛を認めた。

手を焼く四人の弟妹達の世話も、進んで手伝ってくれる。母親と弟妹達は、権兵衛を「権兄ちゃん」と呼ぶようになった。

けれど、権兵衛の優秀さが際立つにつれ、どん太郎は、権兵衛に引け目を感じるようになっていった。誰かが権兵衛を褒めると、それに比べて自分は、と、卑下してしまう。

権兵衛は常に冷静で機転が利く。それで何度も助けられているのに、時々、権兵衛がしくじればいい、と願う己がいる。どん太郎は、そんな自分に戸惑い恥じたが、権兵衛を羨む気持ちを抑えることはできなかった。

ある日、どん太郎が磨き場で作業をしていると、窯場の方で歓声が上がった。権兵衛の周りに職人達が集まっている。その輪の中には、父親と職人頭も混ざっていた。聞こえてくるのは、権兵衛が担当した窯の火の出来栄えのようだ。窯の中を職人頭が覗く。

「こりゃあ、いい！ これなら、このまま使えるよ。坊主、大きな炎が怖くないのか？」

「怖いと思ったことはありません」

権兵衛の調子づいた声だが、どん太郎の耳に障った。砥くさを持つ手に力が入る。

「そうか。それは頼もしいな」

父の陽気な笑い声が響く。ズキンと胸が痛んだ。どん太郎は、磨きかけの銅剣を、床に放り投げた。立ち上がって窯場に向かう。無言で職人達を掻き分け、父の前に進み出た。

「銅の長、俺に型入れをさせてください」

型入れとは、溶かした銅を鑄型に流し入れる作業だ。一息おいて、どよめきの波が広がった。静まるのを待って、父が口を開いた。

「今はよい。磨きを先に覚えろ」

「やらせてください」

父の目を真っ直ぐに見る。父は危惧する職人頭を制し、やってみよ、と許可を出した。

職人頭が、昨年聞いたのと同じ注意をした。窯の中で燃え立つ炭の上には、銅鉞石を入れた、石のるつぼが乗っている。銅が溶けるのを待つ間、胸の鼓動の音が、やけに大きく響いた。

頃合いだ。やっところで、るつぽを掴む。熱波が顔を襲った。炎の水となった銅が小刻みにるつぽを震わせる。鑄型を据え付けた石台まで慎重に運ぶ。炭が爆ぜた。驚いた拍子に手が揺れる。るつぽの中で生じたさざ波は、周囲の不安げな顔達に息を飲ませた。

「よし、るつぽを下に置け」

父の声がした。はっとして、父を見たが、無情にも、どん太郎は磨き場に戻された。

砥くさを持つ手に力が入らない。誰もがどん太郎と距離を置く中、肩を叩く者がいた。

「作業、終わったぞ。なにか手伝おうか？」

いや、いい、と、どん太郎は権兵衛に力なく言った。権兵衛は、どん太郎の隣に座った。

「型入れているのか？ 難しそうだな」

「鑄型の中に銅を流し込むだけなんだがな」

どん太郎の口から、又、溜息が出た。

「お前、恐れるものがないって、本当か？」

「ああ。俺は何かを恐れたことがないんだ」

「羨ましいな。どうしたら、そうなれる？」

「生まれつきだ。別に誇れることじゃない」

どん太郎は手を止めた。権兵衛は続けた。

「気を落とすな。初めてやったんだろ？ コツを掴む迄、誰でも上手くないもんさ」

途端、どん太郎の中で、何か<sup>が</sup>弾けた。

「こん畜生！ お前に何<sup>が</sup>わかるってんだ」

どん太郎は立ち上がった。どん太郎と権兵衛に、工房中の視線<sup>が</sup>集まる。

「何も恐れるもの<sup>が</sup>ない奴に何<sup>が</sup>わかる！ 調子に乗ってるんじゃない」

「調子になんか乗ってない」

権兵衛が、むっとした声で言い返した。

「俺のことを知らない癖に。出ていく」

権兵衛は工房を走り出た。どん太郎は暫く立ち尽くしていたが、のろのろと作業を再開した。どん次郎が心配そうな顔で寄ってきたが、うるさい、と言つて追い返した。非<sup>が</sup>己にあること位わかつているが、頭を下げてたくない。放つておいても、叱られた時の自分のように、すぐに戻るだろう。それでなくても、昨日、裏山で大猪を見かけたという話が入ったばかりだ。父が男衆と罫を仕掛けに行ったことは、権兵衛だつて知っているのだから。

心配を感じて顔を上げる。父<sup>が</sup>立っていた。

「銅の太郎、良いのか？ 本当にそれで」

「ええい、クソ、クソ、クソ！」

他の誰でもない。己に腹<sup>が</sup>立つ。自分の不甲斐なさを友人に当たり、心配して寄ってきた弟を無

下に追い払った。権兵衛に会ったら、なんと声を掛けようか？ 頭を下げてでも許さないかもしれない。権兵衛のことだ、一言嫌味を言うに違いない。その時、俺は怒らずにいられるだろうか。逡巡する思いを抱え、どん太郎は、全力で南郷の丘を駆け上がった。

権兵衛と出会った丘の中腹に辿り着いたが、そこに権兵衛の姿はなかった。道から外れ、横の草むらや林の中に行かないかと目を凝らしたが、人の気配はない。当てが外れて気が滅入る。他に権兵衛が行きそうな所といえば、浜辺だ。どん太郎は丘を越え、浜に向かった。

久しぶりに海岸迄降りて、どん太郎は、がくりと膝をついた。白波と翡翠色の海を抱く砂浜が、左右に向かって無限に延びている。

権兵衛が毎日浜に行くのも道理だ。権兵衛は、期待と不安を抱えて浜に行き、焦燥と虚無を抱えて里に戻っていたのか。

どん太郎は、向かって左の方に歩き出した。先日迄の、ギラつく陽射しは勢いを失っていた。繰り返す波音が耳に心地良い。複数の海鳥が空を舞い、波の上ののんびりと浮かんでいる。暫く進むと、船の残骸が見えた。近寄ってみると、その横で、権兵衛が膝を抱えて座っている。どん太郎は、権兵衛に詫びた。

「羨ましかったんだ。お前は何をやっても上手いから。鳳凰飛翔だって、俺はお前のように飛び立てない。何より、何物も恐れない。俺は……怖くて仕方ないのに」

「怖い？ なにが」

「……炎さ。銅の太郎だっというのにな」

どん太郎は、力なく笑った。

「型入れをやったのは二回目なんだ。昨年、教わったけど、炎の放つ熱気に怖気づいた」

なんとか窯からるつぼを出したものの、手が震え、溶けた銅をぼたぼた零してしまった。運悪く、落ちてた藁に火がつき、危うく火事になりかけた。以来、どん太郎は父に願ひ出て、先に磨きを覚えることになったのだ。

「物心がつく前から、特別に工房に出入りして、父の仕事ぶりを見て育ったんだ。俺も大人になったら里一番の職人になって、皆を守り、尊敬される長になるもんだと思ってた。それなのに、どうにも炎が怖くてさ」

どん太郎は、涙を堪えた。

「でも、怪我人すら出なかつたんだろ？」

どん太郎が頷くと、権兵衛は言った。

「なら、いいじゃないか。俺なんか、自分のせいで、何千人もの人を殺してしまった」

物騒な話を聞いて、どん太郎の眉が上がる。

「俺の父は禎嘉王、百済の王族だ。俺の名は福智。国では福智王子と呼ばれた」

権兵衛は、前を見たまま、話し続けた。

「半年前、弟の華智と共に将として担ぎ出された。作戦に口出しせず、神輿として担がれたまま

であれば良かったのに。上手くいったのは初めだけ。将兵は激滅し、副官に言われたよ。『福智様、無理です。もう、ついて行けません』……それだけ追い詰められていたのさ。俺は泣き叫ぶ部下の悲鳴を無視した。わからなかったんだ。恐怖という感情が」

権兵衛は突っ伏した。

「実の弟の声さえ聞かなかった。何度も怖いと言ってたのに。生き延びた者は海を渡って戦火を逃れることにした。海が荒れなくても、渡り切るのは十隻に二隻と聞いた。結局、嵐に遭って、生き残ったのは俺一人だ。俺が殺したようなものだ。父も、母も、弟も」

「そんなことが。でも、お前のせいじゃ、」  
「いや、俺のせいだよっ！」

権兵衛は、激しく首を振った。

「しかも、俺は同じ過ちを繰り返した。お前に言われたよな。恐れるものがない奴に何がわかる、調子に乗るなって。その通りだよ」

海鳥が甲高い声で鳴いた。波間に水が砕けて落ちる、軽い音が響く。どん太郎は言った。

「子供に頼った時点で勝敗は決まっていたのさ。それより、お前の家族、生きてると思うよ。嵐の後、浜に子供やお前の母位の女の遺体があったとは聞いてない。きっと生きてる」

権兵衛の肩に手を回した。汗を吸った衣が、潮風に当たって冷たくなっている。

「……そうか。柄にもなく弱気になった」

権兵衛は顔を上げ、照れくさそうに笑った。

「どん太郎、お前の鳳凰飛翔は悪くないぞ。知ってるよ。時々、工房の裏でやってるの。俺は上に高く飛ぶが、お前の飛翔は距離がある。上に行くか、前に出るかの違いさ」

権兵衛の顔に笑顔が戻った。

二人が丘を降りて行くと、里の方からどん次郎が駆け上ってくるのが見えた。

「兄ちゃん、大猪子が捕まったって！」

「えっ、捕まった！ 父様は？」

「裏山！ 罨の様子を見に行った後だった。母様かかさまが呼びにやってる」

里に戻ると、広場に人が集まっていた。間を縫うようにして前に進む。人の輪の中心を見てみると、小屋のような檻が置いてあり、その前には工房の若い衆が五人、得意そうな顔で立っている。里長様だ、道を開けよ、と呼ばわる声が出て、父親が入ってきた。

父は檻を一瞥すると、開けよ、と命じた。お気は確かか、と、ざわつく周囲を無視して、里長は再度、命じた。檻が開く。どん太郎は肝を潰した。権兵衛も、あつと声を上げた。

出てきたのは大猪子ではない。後ろ手に縛られた、大男だった。里で一番背の高い里長より、頭一つ背が高い。顔は汚れ、無精髭に覆われているが、整った顔立ちだ。

——おい、お前の父か？

どん太郎が目で問うと、権兵衛は深く頷いた。里長が、大男の縄を持つ職人に尋ねた。

「大猪子を捕えたと聞いたが、間違いか？」

「こいつが大猪子の正体です。こいつなら、人間離れた力で殺せます」

「誰かを襲っていたのか？」

「襲っている所は見ませんが、大猪が現れたという話があった、畑の傍におりました」  
「見知らぬ大男というだけで捕えたか」

里長はため息をついた。不満そうな顔の職人から縄を取り上げ、自ら縄を解く。

「ほう、この国にも礼節を知る者がいるか」

大男がこちらを向いた。権兵衛に気付いたらしい。驚きの表情に続いて、笑みが零れた。

と、広場が続く道の向うで、悲鳴が上がった。里人の慌てる声と、更なる悲鳴が響く。

集った人々は、騒ぐ方へ顔を向けた。足自慢の青年達が数名、全力で駆け寄って来る。

「長様、大猪子！ 大猪子が出ました！」

父親が目を見開いた。青年達の背後に、山のような大猪子が迫っている。その猪を追って、槍や弓矢を持った里人が駆けてきた。猪は、青年の一人に追いつくと、背中を右の前足で蹴った。反動で急旋回、追い掛けてきた里人に向かって突進した。里人が矢の雨を浴びせた。鼻づら目掛けた矢は、牙で払われた。体を狙っても、固い毛に阻まれ、役に立たない。一人が猪の肩を槍で突こうとした。猪が唸りを上げて襲い掛かる。血飛沫が飛んだ。

「戦える者は武器を持って！ 他は退避だ！」

父が矢継ぎ早に指示を出す。どん太郎と目が合うと、早口で告げた。

「どん次郎は行ったぞ。お前もこの人を連れて、権兵衛と一緒に逃げろ」

どん太郎は首を横に振った。

「俺は銅の太郎だ、一緒に戦う」

「馬鹿！ 子供の出る幕ではない」

「逃げたら、俺の銅の太郎が死んじまう！」

暫し、父と睨み合う。禎嘉王が言った。

「気概のある少年だな。私達も手を貸そう」

「はい、父上。あの猪は遊びで人に危害を加えています。倒さねばなりません」

権兵衛が答えた。猪の背に、禎嘉王が拳大の石を拾って投じた。当たった。猪は足を止め、ゆっくりとこちらを向いた。父が叫ぶ。

「工房だ！ 工房に追い込め」

総掛かりで猪を工房に追い込む。槍に銅剣、里人が交代で攻め立てるも、猪には通じない。

向かい合ってみて、改めて、猪の大きさに圧倒された。四つ足だと言うのに、立っているどん太郎のはるか頭上に顔がある。獣臭い、熱い息が顔にかかった。猪の動きは俊敏で、攻撃をかわすのがやっただ。権兵衛でさえ、間合いに入ることすらできない。疲弊するのは人間ばかりだ。職人頭

がへたり込んだ。

「山神様だ。山神様がお怒りになっている」

どん太郎は舌打ちした。

「馬鹿を言え！ 育ち過ぎた、只の猪子だ」

さあ、立て、と、どん太郎は職人頭を引き上げる。権兵衛が言った。

「だが、人の手に負える奴じゃない」

「じゃあ、どうする！」

どん太郎は、権兵衛を睨んだ。

「人の手に余るのなら、神様の出番だろ？」

床に転がる麻袋を指した。はっとして、権兵衛を見る。悪童は、涼しい顔で言った。

「悪い獣は火の神様に叱って頂こう」

二人で猪の前に躍り出た。どん太郎は、向かって来る猪目掛け、麻袋を投げた。牙が袋を引き裂く。猪の鼻づらに粉塵が舞い散った。

権兵衛が、窯から引き抜いた、火の点いた薪を投げた。爆音が轟き、屋根が抜けた！ 瞬間、爆音と共に生じた大炎が、伸びるように猪を包んで消えた！ 上半身を焙られた猪は、弾かれたように仰け反った。尾を引く唸り声を上げ、勢いよく横倒しに転ぶ。辺りに毛の焦げる匂いが漂った。猪は白目を剥き、数回、四肢を痙攣させて、動かなくなつた。

歓声と共に、安堵の声が広がる。どん太郎は、権兵衛に心からの感謝を伝えた。

「権兵衛、お前のおかげだ。ありがとう」

「別に、俺だけの力じゃない」

権兵衛が笑った。どん太郎の目には、権兵衛が輝いて見えた。凄い奴だ、権兵衛は。

どん太郎と権兵衛の周りに人が集まってきた。競って謝意が述べられる。その時だった。

「あつ！ どん太郎さん！」

突然、悲鳴のような声が飛んだ。振り向くと、猪が立ち上がりかけているではないか！

舌打ちが出る。一早く、権兵衛が飛び出した。向かって来る刃をかわし、猪は、権兵衛に頭突きを喰らわした。もんどり打って転がる権兵衛の右腕に、猪が噛みつく！

禎嘉王が息子に体当たりをして逃した。猪の牙が禎嘉王の腿に触れ、大きく肉を裂いた。

どん太郎が飛び出した。猪は、狂ったように、息つく暇なく攻撃してきた。牙だけでなく、噛みついてくる鋭い歯が恐ろしい。

（くそ！ 手当たり次第に噛んでくる。意地を張ってはみたものの、敵う相手じゃない）

猪の開いた口が、炎の水を湛えたるつぼに見えた。身が竦み、足が滑った。牙が襲う。左耳に激痛が走る。耳に沿って一筋の液体が垂れた。周囲から悲鳴が上がる。何かか飛んだ辺りに目をやると、耳の先が落ちていた。ぎよっとした途端、猪が突進してきた。

父が飛び出した。攻撃がどん太郎から父に移る。牙が触れ、背中が割れた。どん太郎の背筋が凍

る。里人達が猪を追いやる間に、職人頭と力を合わせ、父を工房の壁際に運んだ。

里長の負傷は、里人の心を動揺させた。権兵衛に禎嘉王が言った。

「一刻も早く倒さねば。毛の焼けた部分は斬撃が効く。上から狙えれば……どうした？」

「やられたのか！」

どん太郎が問うと、権兵衛は首を振った。

「右腕を無くす処だった。そればかりか、父上の命まで……なるほど、これが恐怖か」

頼みの権兵衛が、齒の根も合わぬ程の恐怖に囚われていた。どん太郎の背にも津波のような悪寒が走る。切れた左耳が熱い。波打つように、ずきずき痛んだ。猪は暴れ、窯に頭突きをした。窯が壊れ、るつぼが飛ぶ。流れ出た銅が柱や壁に火を点けた。里人が叫んだ。

「まずい！ 火事になるぞ」

はっとして周りを見た。幼い頃から出入りしてきた工房が燃える。又一人、猪に噛まれ、壁にぶち当てられた。壊れて行く。父が守り、どん太郎が守るべき場所が！ 人が！

恐怖が消えた。代わりに、腹の底から滾るような怒りが湧いた。改めて猪を見る。闇雲に暴れたせいか、動きにキレが無く、息が荒くなっている。権兵衛が己の足を叩いた。

「動け！ 立て！ 俺が、」

「いや、俺だ。鳳凰飛翔で仕留める」

どん太郎は、きっぱりと言った。

「駄目だ！ お前の飛翔は高さが足りない」

「それなら、力を貸してくれ！」

どん太郎は、権兵衛の両肩に手を置いた。

「お前とならでできる。頼む、二人で倒そう」

権兵衛の震えが止まった。友が力強く頷く。禎嘉王が、どん太郎に協力を申し出た。

「言ってくれ。私にできることはないか？」

頃合いを見て、どん太郎は大猪子に相對して立った。その前に権兵衛が立ち、権兵衛の前に禎嘉王が両手を広げて立つ。

禎嘉王が囁すと、猪が突進してきた。どん太郎も、猪に向かって全力で駆けた。右足で地を蹴る。権兵衛の左肩に左足を掛け、再び蹴った。鳳凰に化身し、宙に飛び立つ。

猪が上を向いた。喰らい付いてくる口が、煮え滾る炎の水と重なる。迷いなく、その真つ赤な喉奥目掛け、全力で銅剣を投げ込んだ。

着地した瞬間、地響きと共に地面が揺れ、大歓声が耳をつんざいた。

「ええい！ クソ、クソ、クソ！」

どん太郎が丘を駆けて行くと、傍らの草むらから、聞き覚えのある笑い声が響いた。

「又か。よくも小言の種が尽きぬものよ」

草を割って、かん太郎が出てきた。

猪子騒動の後、唐に依頼された朝廷から、百済の落人を探す使者が派遣されたが、里長は、鉄造かねつりを始める為に招いた者だと言い張った。実際、禎嘉王は優れた鉄かねの精製技術を持っていた。里長は、新たな工房を開き、禎嘉王を鉄造りの長とした。権兵衛は、その長男ということで鉄の太郎、通称、かん太郎と名を変えた。

「かんちゃん、左の頬が腫れてないか？」

どん太郎がにやりと笑う。

「ふむ、なるほど。人のことは言えんな」

かん太郎は眉を寄せ、したり顔で何度も頷く。自分の父親の声音と仕草を大袈裟に真似て見せているのだ。どん太郎は噴き出した。

「やめろ。鉄造りの長様にお会いしたら、笑ってしまわないか」

「なに、遠慮はいらぬ。うちに来た時、飯だけでなく、親父の拳固も喰らうてごろうじ」  
かん太郎の笑い声が重なる。弾けるような若者達の笑い声が、南郷の丘に広がった。





佳作

「ふたつの約束」

白石未知



様々な言語が入り混じる仁川国際空港で、ヒョクの懸念は確かになった。ひとつ下のロビーを眺めながら昼食を食べている時も、土産物を選んでいる時も妙だった。後ろから誰かが自分を見ている。ふと、嫌な記憶がよみがえり、ヒョクは眉をひそめた。

チェックインを済ませるまでは、視線は遠くに感じられた。しかし徐々に距離が近づき、不安が高まった。雑踏の中だ。誰かが見送る相手を探しているのだろうか。はじめはそれくらいに思っていた。

半年前のクリスマス、ヒョクは宅配業者の青年から小包を受け取った。朝の部屋は凍えるようで、オンドルの温度が上がるまで待つてから、小包に触れた。表に貼られた紙にはアルファベットが並び、末尾にJapanと書かれている。送り主の住所は、日本の宮崎県東臼杵郡美郷町。差出人は、叔母の美波だ。

温まった床に腰をおろし、ヒョクが小包を開けると、すぐに派手な紫色が目飛びこんできた。日本のお菓子やインスタント食品が詰めこまれた荷の中で、毛糸のかたまりと化したそれを、手に取って広げる。

「勝子おばあちゃんのポツテだ」

乾いた部屋に、ひとり言が響いた。ポツテは腹帯のことだが、主に妊娠中の女性を使う。日本では若い男も腹巻を使うのだろうか。そんなトレンドは聞いたことがない。ましてや、元アイドルの俺に腹巻なんて。

しかしヒョクは、腹巻をつけた。ふと、母を思い出したからだ。今どき手編みなんてと文句を言  
いながら、母は腹巻を重宝していた。

母親の美保は冷え性で、冬の寒さを毎年嘆いていたが、韓国式床暖房のオンドルはすばらしいと  
父によく言っていた。

父は無口だが、母国の文化を褒められると嬉しいらしく、微笑を浮かべていた。

小包の中をさらに探ると、栗の菓子を見つけ、ヒョクの目は輝いた。母の故郷の菓子だ。軽い食  
感のせんべいのように、栗のほのかな甘みがクセになる。封を切って食べると、なつかしい味がし  
た。幼い頃、この菓子が食べたいと母にせがむと、祖母が送ってくれた。

好きだった菓子を食べなくなったのは、アイドルを目指していた練習生の頃だ。あの頃は、星の  
数ほどのダイエツトを繰り返しながら、毎日何時間ものダンスレッスンに耐えた。

十六歳で芸能事務所オーディションに合格し、青春時代をそっくり差し出した。デビューが決  
まったのは二十歳の時だが、自分には運も実力もあったのだと思っていた。何年も練習生のまま、  
デビューできない仲間もいたからだ。流行に合わない顔というだけで、チャンスの神様はさつさと  
通り過ぎてしまう。しかしあの頃は少し有頂天になっていたと、ヒョクは恥じていた。状況は数カ  
月後に急転し、冷や水を浴びるような経験をしたのだ。

芸能事務所は、先行投資するかたちでアイドルを育てる。そして売り時を見極め、売り出したら  
馬車馬のように働かせて投資額を回収していく。そうしなければ、たいいていの事務所は首が回らな

くなる。

ヒヨクが在籍していたのは中規模の事務所だが、内部は砂の城のように脆かった。

ある時、売れていたグループとプロデューサーが他社に引き抜かれ、大波にさらわれるように、砂の城は一気に崩れてしまった。

買収に応じなかったことへの報復ではないかという噂も流れたが、真相は分からない。

会社が倒産したとマネージャーから突然告げられ、ヒヨク達のグループも解散した。全てをかけて掴んだ夢だった。しかしそれも束の間、ヒヨクはただの青年に戻った。

その後は破れかぶれの思いで兵役の二年間を過ごしたが、ヒヨクは孤独だった。母はすでに亡くなっていたし、若い頃から放浪癖があった父は音信不通だったからだ。

芸能界に戻れば、父が自分を目にして、それをきっかけに姿を現すかもしれないと考えたこともある。しかし再びデビューするなんて、簡単にはできない。

元マネージャーはヒヨクの身の上を不憫に思ってたか、部屋を契約する時も力になってくれた。かまわれていた部屋からここへ引っ越し、近場で働き始めてなんとか暮らしているが、先は見えない。考えると胸の内側に、タコの墨のようなどす黒い何かが充満してくる。いたたまれなくなったヒヨクは、栗の菓子を食べた。優しい甘みが口に広がり、鼻の奥がつんと痛んだ。

青白く輝くイルミネーションを横目に、部屋へ戻ると二十三時だった。ヒヨクはオンドルの温度

を少し上げた。完全に切らずに部屋を出たので、床はかすかに温かい。

アルバイト先のイタリアンレストランでは、厨房で働いている。面接で裏方を希望すると、君がホールに立てば目立つのにと、四十がらみの店長は残念そうに首を傾げた。

店のラストオーダーは二十一時半だ。鍋や皿を全て洗い、明日の仕込みの手伝いをして、街灯に照らされたゴミ捨て場に、重たいゴミ袋を投げ込んでから店を出る。

休憩が与えられるのは客が減る午後で、そこで賄いは出るが、さつさと掻きこんでちよつと一息ついたら厨房に戻る。ダンボール一杯の野菜の皮を剥いたり、大量の葉物野菜を洗ったりする作業に追われるからだ。

帰りにはコンビニで夜食を買うのが習慣になった。たまにビールも買って飲むが、アルバイトの身では頻繁に買えない。だから叔母の美波が送ってくれる、菓子やインスタント食品はありがたかった。

コンビニの棚に残っていたキンパをつまみながら、ヒヨクは小包の中身をテーブルの上に全て出した。

一番底に、大きな封筒が入っていた。封は開いている。いぶかしく思いつながら中を見ると、紙の束が見えた。

取り出すとそれは、原稿用紙だった。手書きの文字がずらりと並んでいる。

ヒヨクは時計を見上げ、一瞬考えたが、美波にメールを送った。小包の礼も伝えたかったし、何

より謎の原稿について聞いたかった。

母の実家には、叔母の美波と祖母の勝子が暮らしている。山師だった祖父は、ヒヨクが幼い頃に亡くなった。

美波は大阪で結婚し長く暮らしていたが、離婚して実家に戻った。いわゆる出戻りだ。しかし根が明るい性格で、あっけらかんとしている。紫色の腹巻を編んだ祖母も明るい。母の美保もよくしゃべる方だったから、母の実家はとにもぎやかだっただろう。そんなことを考えているうちに、返信が届いた。

メールを読みながら、ヒヨクは目を見開いた。原稿は、母が生前に書いた小説だという。故郷に古くから伝わる、百済王子の物語をモチーフにした話らしい。そしてヒヨクに渡すように頼まれ、叔母が預かっていたのだ。

母の美保は本が好きだった。興味の幅は読むだけにとどまらず、昔は小説を書いていたと聞いたことがある。しかし、書き続けていたとは知らなかった。作品を息子に渡して欲しいと、叔母にいつ伝えたのだろう。

意外なクリスマスプレゼントを前に、ヒヨクは茫然とした。しばらく原稿をみつめていたが、母は小説を通して、自分に何か伝えようとしたのかもしれないと思った。それならば、母の想いを知りたい。ヒヨクは原稿を手にとって読み始めた。

顔を上げると、雨音が聞こえた。いつの間にか、降り始めていたようだ。外はまだ暗い。

雨音は、今読み終えた小説の世界と重なって聞こえた。

小説の主人公は百済の福智王子で、彼らが乗った船が、暗い嵐の海に翻弄されるシーンから物語は始まる。

古代、朝鮮半島では国同士の勢力争いが続いていた。そこで隣国の策略にはまり、百済は滅亡してしまう。国を追われた福智王子は、家族や家臣とともに日本へ向かった。失意のどん底に沈む王子が乗った船を、いたぶるように海は荒れたという。そして王子らは、着の身着のまま異国の浜にたどり着いた。

漂着してしばらくは、苦勞ばかりだった。しかし里人の優しさに助けられながら、少しずつ生活の基盤を整えていく。

父王の船とは別に漂着したので、父子はずっと離ればなれだった。王妃である母ともやむなく離れ、妻と新しい土地で暮らしながら、福智王子はたくましく成長していく。

後になって、父王と弟王子が近くで暮らしていたと知り、彼はほっとする。

父子が再会したのは、父王が追手に攻め入られた時だ。駆けつけた福智王子は勇敢に戦うが、父王と弟王子は亡くなってしまふ。そして彼は火を燃やし、二人を弔うのだ。

そこまで小説の世界を反芻して、ヒョクは再び母のことを思った。

母の美保が死んだのは、ヒヨクが芸能事務所の練習生だった頃だ。体調を崩し、病院へ行くと末期のガンだと告げられた。それからわずか半年でこの世を去った。少し前まで普通に暮らしていたから、信じられなかった。

葬式は韓国で行った。その時にヒヨクと父は、いつか二人で母の故郷へ行こうと話した。

「お前は幼い頃に行っただきりで、あまり覚えていないかもしれないが、いい所だよ」

父はそう言っていた。そして、頑張れよと笑って、ヒヨクの長めの前髪をくしゃくしゃに撫でた。父が姿を消したのは、その後だった。

ソルラルの祝日。ヒヨクの部屋には友人が訪れていた。ソルラルは韓国の旧正月で、ヒヨクのアパルト先も休みになる。

ふつくらとした頬の上に黒ぶちめがねをのせたソジュンは、柔らかな笑みを浮かべながら、ソファにどっかと腰かけた。

「こざっぱりとした部屋だな」

「あれこれと買う金もないしな」とヒヨクは苦笑した。

「金は天下の回りものって、日本では言うぜ」

ソジュンは片眉を上げ、俺のところには回ってこないけどなと付け加えて笑った。

こいつは中学の頃から変わらないなとヒヨクは思った。ソジュンは当時から大人びたところがあ

り、周りからは浮いていた。

とはいえ孤立を好むわけでもなく、柔らかな笑顔で、誰とでも気さくに話す。体格がいいせいかな喧嘩をしても強く、不良連中にも一目置かれていた。

一方のヒヨクはもともと細身で、端正な顔つきなので異性には好かれる。しかし同性にはやっかまれて絡まれることもあった。そんな時、たいていは聞き流したが、相手がしつこいと腹が立つものだ。喧嘩になると、二人程度ならどうにか勝てるが、大勢に囲まれるとさすがにまずい。そんな時に、ソジュンが仲裁に入ってくれて助かったことがあった。

ソジュンは早くから文学に目覚め、ヒヨクも母親の影響で本を読んでいたから、二人は気が合った。ヒヨクが自分で書いた詩を見せたのも、ソジュンが初めてだった。

その時のことが、ふと頭をよぎった。詩を読んだ後、ソジュンは少し黙って、俺は将来、海外で暮らしたいんだとぼつりと言った。アメリカかヨーロッパに行くのかとヒヨクは思っていたが、彼は留学先に日本を選び、大学を卒業すると、日本の企業に就職したのだ。

言葉通りに夢を叶えた友人を見つめ、ヒヨクは斜め前の床に座った。

「お前はちゃんと稼いでるじゃないか」

ソジュンはそれには答えず、少しため息をついてから、明るい声で唐突に言った。

「腹が減ったな、お前レストランで働いてるって言ってただろ、何か食わせてくれよ」

「俺はただの見習いだぜ」

苦笑しながらもヒヨクは立ち上がり、狭いキッチンへ行くと食料棚の中を探った。

がさごそやっている、美波が送ってくれた日本のインスタント食品が出てきた。母が書いた小説とともに送ってくれた品だ。

しかしソジュンは日本で生活しているのだ。帰国した時くらい、韓国のあるものを食べたいかもしれない。そう思ったヒヨクは、トツポギを手を取った。それから冷蔵庫を開けて、コチュジャンと袋入りのおでんやキャベツを取り出した。

アルバイト先の賄いで食べたトツポギが旨かったので、折をみて料理人に味つけを教わり、最近では家で作るようになった。

トツポギを煮込むのはわりと時間がかかる。そこでまず小皿にキムチを盛って、ビールと一緒に持って行ってやった。

「飲みながら気長に待っていてくれ」

ソジュンは満面の笑みでビールを開けて飲み、キムチを口に放りこんだ。

鍋の横でキャベツを切りながら、ヒヨクはクリスマスマスに届いた小説のことを思った。

読み終えた翌日、読んだことを叔母に伝えるべきかと迷ったが、どうにも気持ちが悪くまとまらなかった。

母は何を思って、あの小説を書いたのだろうと考えた。そして叔母が、このタイミングで送ってきたことにも意味があるのか。ある意味で遺言のようだが、叔母はきっと単純に、心配しているの

だろう。母が死に、父も側におらず、アイドルとして生きるという夢も絶たれた甥を。

だが叔母の美波はあっけらかんとした性格だ。心の内をヒヨクが話せば、笑いながら励ましてくれるだろう。そう分かっている、ためらい、気軽に話せない自分がおかしかった。誰かにあれこれと言われる前に、自分で立ち直りたいのか、意地と甘えが心の中でもみくちやになっている。

トッポギのいい香りがし、ヒヨクはその先を考えるのをやめた。そして鍋に水あめと醤油をたらして味を調えた。皿に盛ると、朱色の甘辛いタレと餅から湯気がいつきに立ちのぼる。急いでテーブルへ運ぶと、ソジュンが目を輝かせた。

「旨そうだな」

「餅はインスタントだけだな」

誰かに料理を食べさせるなんて初めてで、照れくさい気がした。

トッポギを匙ですくって口に入れたソジュンが、目を閉じている。味見はしたが、まずかっただろうかとヒヨクは少し心配になった。

間を置いて、ソジュンが言った。

「なんか俺、泣きそうだ」

涙を見せまいとしてか、ギョツとつむつてから開けた目が、かすかに潤んでいる。

「日本でも韓国料理の店はあるけど、なんか違うんだよな。今のところこれだという味の店は無い。だからたまに、無性に食べたくなるんだ。帰国したら、何か旨いメシが食いたくなって思ったん

だよ。まさかお前が、それを作ってくれるとは思わなかったけどな」そう言って口の端をかすかに上げて笑った。

ソジュンは昔から落ち着きがあり、海外で暮らしたいという夢もなんなく叶え、端から見れば成功者だ。しかし人知れぬ苦勞を重ねているのだろう。隣国とは言え、異国の地で身を立てるのは並大抵のことではないはずだ。

「たいしたことない料理だが、旨かったなら良かったよ」

ふいにソジュンが、中学時代によくやっていた芸人の顔マネをしたので、ヒョクは吹きだした。

二人はトツポギを平らげて、それからインスタントラーメンを食べた。そして窓の外の陽が傾く頃、ビールの空き缶とワインの瓶をテーブルに置いたまま、寝転がった。

こんな温かな正月を過ごしたのは、中学生以来だとヒョクは思った。幼い頃から、父は時々姿をくらしましたが、正月は家族三人で迎えることが多かった。

しかし練習生になると、里帰りする間も惜しんでレッスンを続けた。母が亡くなり、父も居なくなると分かっていたら、もっと実家へ帰っていたのにと今は思う。

そして栄光と挫折を経験してからは、ひとりでソルラルを過ごすのが普通になった。

ソジュンの軽いいびきを聞きながら、父は今、どこにいるのだろうかと考えた。

そしてふと、百済の福智王子のことを思った。彼は異国の浜に着いて、ほっとしたとともに、さぞや途方にくれただろうと思った。

小説の中で王子は、自分が乗った船を、大海に浮かぶ木の葉のようだと saying いた。嵐の海に翻弄され、自分達ばかりがなぜこのような目に遭うのかと、嘆きながら。

もしかすると母の美保も、福智王子たちと同じ気持ちだったのかもしれない。慣れない異国で生きていくだけでも大変なのに、唯一頼りの夫が、ときどき、自分と子どもを置いて出ていくのだ。

腹を立てたり嘆いたりして翻弄されるばかりでは、到底身がもたなかっただろう。とにかく、何とかやっていくしかない、ある時点で母は、腹をくくったのではないか。ヒヨクはそう思った。

また、地位も名誉も失った福智王子の姿は、アイドルではなくなったヒヨクの身の上とも重なった。小説の中には、悲嘆にくれる王子を母である王妃がいさめるシーンがある。

ヒヨクの母が、未来の出来事を予見して、あの作品を書いたとまでは思えない。しかし今のヒヨクにとって母の小説は、伴走者のような存在になりつつあった。

数日が経った頃、ヒヨクはインターネット上で叔母の美波に連絡をした。

パソコンに表示される動画はときどき不自然に揺れ、話していると妙な間があいたが、ふつくと丸い美波の笑顔は変わらなかった。

いろいろ送ってくれたことの礼を伝えると、そんなん気にせんとき、と大阪風に言っ て豪快に笑った。

それからヒヨクは、服をめくって派手な腹巻を画面に映した。美波は大爆笑して、祖母の勝子を

呼びに走った。

少しして現れた勝子は、ヒヨクがテレビに出演していると勘違いした。

それから美波に手をふるように促され、ぎこちない笑顔で手をふっていたが、画面の中のヒヨクも手をふり返したので、満面の笑みになった。

その様子を見たヒヨクは、二人に無性に会いたくなかった。自分は韓国で生まれ、ホームシックという表現は違うのかもしれないが、母国の料理を恋しがっていたソジュンの気持ちがかかる気がした。

二月のある日、ホールのスタッフが風邪をひいて休み、ヒヨクに声がかかった。

「今日だけでいいから頼むよ」と言ってきた店長の、異様に広い額は少し光っていた。

ヒヨクを使い、女性客を増やしたいという魂胆には薄々気づいていたから、この機会を利用しない手はないのだろうと感じた。

しかしヒヨクは、手痛い過去が思い起こされて、気が重かった。

三年前のことなのに、思い出すと気が滅入る。当時、事務所が倒産し、グループも解散したことはニュースになった。

ほとぼりが冷めるまでの間、ヒヨクはある場所にかくまわれていた。かくまってくれたのは女性の資産家で、若い芸術家に部屋を貸すなどの慈善活動を行っていたのだ。

元マナージャーから外に出るなど言われていたが、息が詰まり、ヒヨクは何度か抜け出したことがある。外を歩く時は、サンングラスと帽子で変装していたが、ある夜、繁華街の端の路地で、女性に声をかけられた。

ファンだと言う女性を前にヒヨクは焦った。人違いだと言って逃げ出そうとしたが、彼女は泣き出してしまった。そして涙声で、ずっと応援していたのに、どうして辞めたの、と聞いてきた。

どうしてこうなったのか、聞きたいのはこつちだとヒヨクは思った。しかし世間の人は、事実を知らない。次々に報道されるニュースの内容はさまざまだったからだ。中には、所属タレントの不祥事が、事務所崩壊の一因になったと書きたてる記事もあった。ヒヨクは女性に頭を下げて、足早に立ち去った。

しかし数日後、記事が出た。驚いたことに見出しには、妊娠発覚の女性と密会、と書かれており、隠し撮りされた写真が掲載されていた。

女性とは初対面だったから、ヒヨクは激しく怒った。しかし、元マナージャーは淡々とヒヨクに告げた。ゴシップ記事は、さまざまな思惑がからみ合い捏造されるものだと。

とはいえ、ほかの元メンバーの中には、内緒で交際していた女性の部屋に転がり込んでいた奴もいたから、グループという一つのかたまりで見た時、全てがシロとは言えない状況だったのかもしれない。

ようやくニュースのトピックから消えた後は、兵役の訓練に没頭し、今も身を潜めるように暮ら

している。だからこのレストランでも、裏方で働くことを希望した。しかし事情を説明できない以上、店長の指示を拒否することもできない。ヒヨクは仕方なく、ホールに立つた。

夜になると、数組のカップルや女性の二人連れ、職場の飲み会グループが席を埋めた。

そして二十時頃、サラリーマン風の男性が一人で店を訪れ、軽めのコースを注文した。

男性はサラダを食べ、スープとパンを黙々と口に運び、メインは魚料理をオーダーした。パスタも魚介のトマトソースをチョイスし、グラスワインを追加で注文した。食べ終わると、コーヒーを飲み、二口ほどのデザートもパクパクと胃に納めてから、立ちあがった。

そしてホールに立つヒヨクを見て、目顔でレジの方を示した。

指名された風だったので、クレームを言う気かとヒヨクは一瞬構えた。しかし、男性は淡々と支払いを終えた。そして帰り際に、名刺を出した。

こんな時間に営業マンなんて胡散臭いが、一応は店長に伝えようと思いつながら、ヒヨクは名刺を受け取った。すると男は、まっすぐにヒヨクを見つめてこう言った。

「お仕事中に、お声がけて申し訳ありません。実は私は、日本の芸能事務所の者です。出張で韓国へ参り、こちらの店には腹ごしらえに伺いました。失礼ながら、食事中にあなたの動きを拝見し、声をかけずに帰るのもつたいないと感じました」

男は韓国語ができるらしい。ヒヨクは渡された名刺を見た。鈴木和宏という名前の横に印字された会社名には、見覚えがあった。ヒヨクは目を見開いて、そのまま顔を上げた。しかし、とっさの

ことで言葉は出ない。

「よろしければ今度、会社にご連絡ください」そう言って鈴木は少し微笑み、出て行った。

昼までパソコンの前に座っていたヒヨクは、卓上カレンダーに目を移した。三月も半ばを過ぎ、部屋はぽかぽかと暖かい。

湯が沸いたので、ヒヨクは立ち上がり、キッチンへ行き、美波が最近送ってくれたインスタントラーメンを鍋に入れた。

新発売された商品で、日本で人気らしい。野菜炒めに使ったフライパンの下には、祖母の勝子が作った、派手な色の鍋しきがある。

麺がほぐれたところでスープを入れ、さっと煮たてると丼に移して、キムチと肉が入った野菜炒めを上から豪快に盛った。

テーブルで食事をしながらパソコン画面が見えるように角度を変え、動画を再生する。

動画投稿サイトで見られると美波がメールで教えてくれたもので、母の故郷、美郷町の祭りの様子を撮影した動画だ。

母の小説に登場した福智王子と父王、そして弟王子は、時を経てもなお里の人に慕われているらしい。三人は今、別々の神社に祀られているが、死後も離ればなれの父子を、里人は哀れに思った。それで一年に一度、福智王子が父王に会いに行けるよう、里人が長い道のりを歩き、ご神体を運ぶ

祭りが生れた。

千年以上も前に結ばれた絆が、今も息づいていると思うと、ヒヨクは感慨深かった。

師走祭りと呼ばれるその祭りの後半、里の人たちはともにご飯を食べて語らい、笑いながら過ごしていた。叔母の美波や祖母の勝子の明るさは、この地で育まれたのだろう。

そして自分にも、その血が流れているのだ。

食べ終えた丼を洗うと、ヒヨクはパソコンの前へ座り、鈴木からのメールを開いた。

先日はお電話を頂き、ありがとうございます。正直、ダメ元で声をかけたので、再びお話でき、嬉しく思いました。

ヒヨクさんは、作詞の才能をお持ちですね。活動しておられた頃の曲を拝聴しましたが、半分以上、あなたが書かれた詩でした。

韓国でのご経験をもとに、これからは日本人々に向けて、歌を作ってみませんか？

読みながら、ヒヨクは目頭が熱くなるのを感じた。歌でもダンスでも容姿でもなく、自分の言葉に注目してくれる人が、再び現れるとは思っていなかったからだ。ヒヨクは母のように小説は書かないが、言葉が好きで、歌詞を書くのも楽しかった。

鈴木会社は、日本の大手芸能事務所で、韓国でも名が知られていた。しかしはじめは、名刺は

偽物かもしれないと疑った。そこで慎重に会社のホームページを調べ、書かれていた代表番号に電話をすると、ちゃんと鈴木に繋がったのだ。

鈴木からのメールに返事を書くとき、ヒヨクは一呼吸置いて送信ボタンをクリックした。

鈴木が自分を見出してくれたとは言え、これからの道のりを思うと、正直、苦難の連続だろうと思われた。母のお陰で、ある程度の日本語の読み書きや会話はできるが、異国の人々にシンガーソングライターとして受け入れてもらうには、どれほどの努力が必要だろうか。それでも、とヒヨクは思い直した。ある地点に来たら、腹をくくって明るく乗り越えるしかない。

五月、ヒヨクは仁川国際空港に居た。ここから宮崎空港までは、約一時間半だ。

家を引き払ったり、世話になった人たちに挨拶をしたり、日本へ送る荷物を用意したりして、春は慌ただしく過ぎた。

今日も朝から忙しく、食事をとっていなかったで、チェックインを終えるとまず腹ごしらえをした。その後は美波らに渡す土産を選んでいった。

そしてヒヨクは、間違いないと思った。朝からずっと胸の中にあつたひとつの懸念が、確かなものとして感じられたのだ。やはり誰かが、自分の後ろをつけている。

グループ解散当時、ゴシップ誌の記者に隠し撮りされた記憶がよみがえった。気づかないふりを続けるべきなのかもしれない。しかしこのまま、日本までついて来られたら、美波達に迷惑をかけ

てしまう。

土産物を選ぶふりをしながら考え続けていたが、ヒヨクは段々と腹が立ってきた。そして、あえて人通りが少ない通路へと歩いて行き、思い切つてふり向いた。

するとそこには、苦笑を浮かべて立つ、中年の男の姿があった。

驚きとともにさまざまな疑問が、脳内をかけ巡った。言葉を失つたヒヨクに男は、驚かせてすまないと言ひた。

「どうしてここに居るんだよ」

ヒヨクはかすれ声で、しかし責めるように聞いた。

「お前のことは、彼に聞いた」と男は答えた。

日本へ発つことを決めた時、気がかりは父のユンホのことだった。だから元マネージャーに、連絡が来たら教えて欲しいと頼んでおいたのだ。しかし、本人が自分の後をつけてくるとは思わなかった。

「言い訳するわけじゃないが、これは母さんとの約束だ。自分がもうすぐ死ぬと知つたあいつは、芸能界に入りたいたいというお前のことを心配していた。お前も知つての通り、俺は勝手な男だから、あいつは考え抜いた末に、五年間はお前の前に姿を現さないで欲しいと俺に言つたんだ。中途半端に目の前をうろろされるより、父はもう居ないと見限つた方が、お前の覚悟も決まると、あいつは考えたんだろう。それで俺は、約束をした」

ヒヨクは眉をひそめて聞いていたが、しばらくして小さく笑い出した。

「こっちも散々心配したし、母さんが期待したほど、俺は強くなってないよ」

　　ユンホは微笑を浮かべた。

「いろいろあったことは、聞いている。それでもお前は立ち直って、新しい挑戦をするんだ。息子  
の新たな船出と聞いて駆けつけたが、久しぶりだしな、なかなか声がかけれなかった」

　　そう言ってユンホはヒヨクに近づき、相変わらず長い前髪をくしゃくしゃに撫でた。



佳作

「その郷は」

羽鳥郁



ツレっていうのはノリがよくて自分と同じくらい馬鹿できる奴がいい。そうすりゃ何しても楽しく盛り上がって放たれた風船みたいに気分も急上昇、お互いハッピーってやつ。俺には高校の時に隆志っていうツレがいて一緒に色々馬鹿をやった。(そして親や先生に相当怒られた) 高二の夏、近くの町で縁日があつて俺らは連れ立って出かけた。神社の参道で話し込んで仲良くなった綿飴屋台の爺さんにトイレに行く間の店番を頼まれて二つ返事で引き受けた。作り置き袋がたくさんあつてそれを売ればいいから簡単だと思つたし何より面白そうだった。爺さんは綿飴を作る機械のスイッチを切り「くれぐれも機械に触るなよ」と言い残して屋台を離れて行つた。丁度そこに来たのが浴衣姿の中学生らしき女子二人。お揃いの浴衣を着てやつぱりお揃いの白いレースのリボンを髪に結んでいる。ナンパする気はなかつたけれど、俺らはいい所を見せたくて爺さんの言葉なんぞ忘れ機械のスイッチを入れてしまった。準備を整えると隆志はザラメの入つた筒を掲げ得意気に機械の中心の穴へ落とした。飴色の粒は白い糸に変わつて霧みたいに湧きだす。俺は割箸を構えて臨戦態勢。でも見るのと作るのとじゃ大違い。見守つていた彼女たちがクスクス笑いだすまでに時間はかからなかつた。綿飴は割箸にきれいに巻き付かず偏つて酷い出来栄え、斜めに棒の突き刺さつたカラスの巣みたいな代物になつた。俺は恥ずかしさで顔を背けそいつをぶつきらばうに女子二人に突き出し「あげる」と言つた。彼女たちは顔を見合せて相談を始め、その間、俺も隆志も南風が青い紫陽花柄の浴衣の裾を軽く捲つていくのを横目で盗み見ていた。しばらくして話合いが終つたらしく、ありがとうと一人が手を出してきた所に運悪く爺さんが戻つて来た。

「機械に触るなって言つたらう、おい！」

酷く怒つた声に隆志も俺もわつ、と叫んで逃げ出した。騒いでいる爺さんや女の子を後に俺たちは祭提灯の灯つた参道を走り抜けた。そして祭囃子も遠い社の裏山に逃げ込んで太い杉の根元に座り込むと俺は指に綿飴の滓がついているのに気付いた。それを取って隆志と分けて口に入れる。「甘えなあ」と隆志が笑つた。

重い瞼をやつと持ち上げるとカーテンの隙間から日が差し込んでいた。布団の上でごろりと転がって見ていた夢を思い出す。夢と言うより昔の記憶だ。隆志とは随分長く連絡すら取つてない。視線を巡らせて六畳ワンルームの部屋を眺めれば酒瓶や缶があちこちに転がっている。布団から這い出し一つ一つに口をつけて逆さまにしてみたがどれも空だ。「飲みてえな……」独り言を言いながら顎を撫でるとごわごわした感触があつた。会社をクビになつてから剃つてないので髭が伸びている。

喉が渴いてキツチンへ行くがグラスがない。仕方なく蛇口から流れ出る水をそのまま口で受けついでに頭も突つ込んでかぶる。そしてあちこち酒を探したがどこにも見当たらない。買いに行くしかないかとだるい体を引きずり外へ出ると日が照つていて酷く蒸し暑かつた。梅雨の晴れ間つてやつだろう。光の眩しさに半分目を閉じて起きたままの白Tシャツにステテコパンツのままアパートを出た。住宅街の細道をだらだら歩いて行きつけのコンビニに着いたが様子がおかしい。店内を覗くと真つ暗だ。自動ドアは開かず「冷蔵庫故障のため本日臨時休店」と書かれた紙が貼つてあ

る。畜生、ついてねえ。どうしようか考えていると駅の向こうに大きな酒屋があることを思い出した。面倒だったが酒への欲求が勝ってまた歩き出す。汗を流しながらやっと目的の店に到着すると今度はシャッターが下りていて札が下がっていた。「本日定休日」。俺はむかついて落ちていた拳ぐらいの石を思い切り蹴飛ばし……呻いてそのまま蹲った。くそっ、履いているのはスニーカーじゃなくてビーサンだった、むき出しの足指で強く石を蹴ったので強烈に痛い。しばらく呻いて顔を上げると通行人がちらちらこつちを見ながら通り過ぎていく。羞恥心が頭をもたげ俺は立ち上がる。でも足は痛いし暑い。とにかくどこかで休みたい。近くにコーヒーショップがあったはずだと足を庇いながら行ってみれば待ち行列が店をはみ出し道路の向こうまで続いている。絶望的な気分で辺りを見回すと「市立図書館駅前分館←」の立て札が目に入った。今まで世話になった事のない施設だからよく知らないが多分椅子くらいはあるだろうと矢印通りに道を辿ってみるとマンションの谷間に薦の這う建物が見えてきた。小さくてぼろいのに入口のガラスドアはピカピカに磨かれていて、押して入ると独特の匂いがした。学校の図書室もこんな匂いがしたなと思いつく。館内を見渡すとぎっしり本の詰まった背の高い本棚が並んでいて俺としては居心地良くはなさそうだ。でも棚の先に机や椅子があったので本棚を素通りして奥へと進んだ。空席に腰を下ろして一息ついていると向かいの席に座る婆さんがやたら俺のことを気にする。何だよと睨み返そうとして机の上に貼ってある紙に気づいた。「当館の資料をお読みの方以外は利用をご遠慮ください」。そうか、手ぶらは駄目か。本を持ってくれば良いんだろうと立ち上がり本棚を巡って見たものの読みたい本なんてあるはずも

ない。面倒臭えな、やっぱ帰るか。そう思い始めた時、目の前の棚にある本に目が止まった。青い表紙の「西の正倉院 みさと文学賞作品集」という本だ。みさとして隆志が住んでいる町だ。俺は懐かしくなつてその本を手を取った。

席に戻つてパラパラとページを捲ると解説と短編小説がいくつかあり百済とか禎嘉王という名前が出て来る。百済ってなんだっけ？ どこかの王様の話みたいだがよく分からない。スマホで検索すると実在の人物ではないようだとある。元々はみさと町に伝わる伝説みたいだ。王様は百済という国の王族だったらしい。こんな話、隆志に聞いた記憶はないなあと本をよく見れば実家の近隣ではない別の県の「みさと町」の住所が書いてあった。そういえば隆志も「みさとして名前の町はいくつもあるらしい」と言っていたっけ。なんだ、あの町の話じゃないのか。そう思ったが俺はその本を棚に返しはしなかった。読み続けたのは王様たちが故郷の国を追われ逃げて来て宮崎県美郷町の辺りに住んだという話だったからだ。王様みたいな偉い人も遠くへ移住したりするのだから妙な親近感が湧いた。理由は全然違うけれど俺も東京に出てきて十年以上になる。その間実家に一度も帰っていない。

足の痛みも忘れて読書（ほぼスマホ検索）に没頭していると声をかけられた。

「読書中に申し訳ありません。今日は館の都合でもう閉館になります」

顔を上げると俺の他に客はいなかった。いるのは深緑一色のエプロンをした図書館員らしい小柄なおばさんだけだ。おばさんは眼鏡の奥の小さな目をぱちぱちさせて俺に訊いてきた。

「その面白い？ 良かったら借りていけますか」

俺は戸惑いながらも頷いた。カウンタ―に案内されて生まれて初めて図書館利用者カード（スマホで登録だった）を作り、「西の正倉院 みさと文学賞作品集」の本を借りた。そしてまだ痛む足を引きずって酒や食い物を買って部屋へと帰った。

部屋に戻るとシャワーを浴びた。汗をかいていたせいか心地良い。ついでに髭も剃った。久し振りにさっぱりした気分になりチー鰯の袋を破っているスマホに着信履歴が残っているのに気付いた。画面を見ると高沢和斗の名が表示されている。俺の気分は一気に落ち込んだ。奴は先月まで働いていた会社の後輩で俺のクビの原因だ。クビの理由は奴が大きなしくじりをした案件が何故か俺の担当にすり替わっていたからだ。ミスしたのも俺になっている。俺は何度も上司の依田課長に間違いだと伝えて話し合いを求めたが実現せず、高沢は自分の責任を最後まで認めなかった。働いていた会社は絵に描いたようなブラック企業で特にこの一年以上は激務で残業代も出ないような有様だった。ろくでもない上司もいたが高沢とはウマが合い、よく飲みに行ったり休日遊びしたりした。会社を辞めずにいられたのは高沢がいたからだろう。でもそんな関係もあの日で終わった。俺はスマホをマナーモードにして布団の上に放り投げビール缶を掴んだ。プルトップを引き上げて嘔き上げ零れ落ちる泡に口をつけると苦みに舌がピリツとする。冷えた液体を一気に身体に流し込むと静かな部屋で喉が派手に鳴った。床に座り壁にもたれるとチー鰯を頬張って次の缶に手を伸ばす。

翌日、目が覚めると俺の枕元にはスマホとみさと町の本とビールの缶がいくつも転がっていた。

読みながら眠ってしまったようだ。慣れない読書はなかなか捗らない。分からないことを検索しながらなのでなおさらだ。しかも酒を飲んでいるせいか内容はうろ覚えばかり。記憶に残っているのは百済国の禎嘉王という王族が家族や家来を連れて宮崎県的美郷町に逃げて来たということくらいだ。俺は朝飯兼昼飯のカップ麺をすすり考える。外国とは随分遠いな、国が変われば食い物も言葉も違うのに。カップの汁を飲み干してぼんやりしていたらスマホの画面が光って自然と眉間にしわが寄った。また高沢かと表示を見れば従兄の泰兄ちゃんだった。今でも時々連絡をとる唯一の親戚だ。慌ててスマホを拾い上げ「もしもし」と言った。

「おう、元気だったか。仕事頑張ってるか」

無職になった事を知らせていないので泰兄ちゃんの挨拶に焦ったができる限り明るい声で、

「相変わらず」

と答えた。兄ちゃんがそっか、と短く返事をしてからしばらく間があった。

「あのな、祖母ちゃん入院したんや。随分と具合が良くないらしくてな」

祖母ちゃんは俺の実家で家族と住んでいる。

生まれも育ちも大阪の兄ちゃんはいつも陽気な人だが今日は少し違った。

「智也は祖母ちゃんに可愛がられてたろう。一度会いに帰ってみたいへんか」

返事はできなかった。泰兄ちゃんは更に、

「家に連絡し難いなら俺が電話したるで。それとも飛行機代が心配か。ええよええよ、いくらか送る。気にすんな」

俺は地元に残ることになっていたのを勝手に家出して東京に出て来たので、そのことを知っている泰兄ちゃんは気を使ってくれる。

「金はあるさ、飛行機くらい余裕で乗れるよ。家にも俺が連絡する。大丈夫」

最近仕事が忙し過ぎて遊ぶ暇もなく口座には数カ月暮らせるだけの残金がある。往復の旅費くらいは出せるが祖母ちゃんには会いたくなかった。電話を終えた後、俺は落ち着きなく部屋をうろろした。あの日のことを思い出す。

高校の卒業式の翌日、俺は家を抜け出して東京へ行くつもりだった。先だつ金が必要だったが手持ちはバイト代の残りとは何年か分のお年玉の入った通帳一冊だけ。高校生にしては大きな金額だが東京でしばらく暮らすには心もとない。俺は祖母ちゃんが家に金を貯めているのを知っていたのでいくらか失敬することにした。もちろん悪い事とは分かっているしその内に返すつもりもあった。朝食の後、仏間に入り仏壇下の戸棚を開けた。心臓がバクバクいつていたのを覚えていた。周囲に人がいないのを何度も確認して奥にあるエコバッグを引っ張り出した。重いのできつと硬貨が入っていると思った。その時、なあ智也、と襖の向こうから祖母ちゃんに声をかけられた。今度は心臓が飛び出しそうになった。咄嗟に持っていたスポーツバッグにエコバッグを押し込んで戸棚の扉を閉めた。祖母ちゃんは襖を開けて仏間に入って来ると嬉しそうに、

「仏さんに挨拶とは心がけが随分よくなったなあ。さすがにもう一人前だ」

俺は正面の位牌から視線を動かさない。

「智也、卒業おめでとうな。お祝いやろうかと思うけど、何か欲しいものあるか？」

俺は居たたまれず立ち上がる。

「別に無いし。…隆志と約束あるから出かける。ちょっと遅くなる」

祖母ちゃんはいつもと変わらず笑顔で

「そうか気をつけてなあ」

と言った。家族にはその日以来会っていない。金のことを言われたこともない。祖母ちゃんの顔がどうしても頭に浮かんでしまい、酒を飲もうと思いついた。新しい酒瓶を取り出してラベルを見ると韓国の焼酎だった。少し甘味のある後味がする。そうして俺はグラスを手にもた本を開く。あの小説では国を追われた後もいつか帰れると思っている百済人もいるようだった。でもスマホ検索では王様は美郷町で没したと書いてある。追手が来て戦になったようだ。俺はもしかして誰か生き残って故郷に帰ることができたのではないかとスマホの検索窓に思い付く限りの言葉を並べていたが、ふと我に返って笑ってしまった。王様たちは居たか居ないか分からない人たちじゃないか。調べたって出てくるはずがない、何をムキになっているんだ。いい感じに酔いが回ってきたので本を閉じて床に転がりまた眠りに落ちる。そして夢を見た。俺は小奇麗な座敷に座っていて前には王様がいる。韓流時代劇ドラマに出て来るような服を着たイケメンだ。酒瓶を差し出すので見るとさっ

き飲んだ焼酎だった。そうか王様の国の酒だ、きつと王様も好きなのだろう。酒の肴はチー鱈とキムチで俺は嬉しくなって瓶を受け取り王様のグラスに酒を注いだ。澄んだ酒が溢れんばかりにグラスに満たされると王様はいい感じの笑顔になった。

電話の着信音で目が覚めた。祖母ちゃんの事が気になってマナーモードを解除していたので画面を確認せず出てしまった。もしもし、と言うと相手は無言のままだ。泰兄ちゃんにしては変だと寝起きの頭で考え、次の瞬間相手が誰か予想ができて声をかけた。

「何か言ったらどうだ」

「……池内先輩」

やはり高沢だった。早い息遣いが聞こえる。

「あ、あの俺、どうしたらいいか分からなくて」

俺は黙って話の続きを待つ。

「もう一杯一杯で……篠山先輩も先週で辞めてチームの人数が半分になったのに、でも課長はどんな仕事入れて来て」

そうか、篠山も辞めたか。妻子がいる男だから退職を決めるのに勇気が必要だったろう。

「もうずっとチームの人、誰も家に帰って寝れてないです」

俺は冷たく言った。

「お前さあ、望んでそこに残ったんだよな」

高沢が焦っているのが電話越しにもわかる。

「嘘をついて、俺を嵌めてまで会社にしがみ付いただろう。なんで俺に電話してくるんだよ、言いたいことがあれば課長に言えよ」

「無理なんです、あの件を池内先輩のミスにしようと言ったのは課長なんです、何かあったら今度は僕のせいにするって……もう課長に意見なんて、言えないです」

頭に血が上った。黒幕は課長か！ 確かに反りの合わない上司ではあったがここまでされるとは思ってもみなかった。

「あの件はそもそも課長の発案だったんです。でも失敗した途端に先輩が許可もなく勝手にしたことにしようって……」

怒りは課長と共に高沢にも向かった。

「今更そんなこと言ってどうする？」

俺は声を荒くして、

「もう取り返し付かねえだろ、俺はクビになってんだよ失業してんの。お前と課長のおかげでな」  
止まらなかつた。

「このご時世次の仕事が簡単に決まるなんて思うなよ。この部屋追い出されてネカフェ暮らしになるかもしれない。人を崖っぷちに追い込んだくせにわざわざ電話してきて泣き言を言うってどういう見だよ」

高沢の息遣いが激しく乱れている。

「すいません、すいません。本当は電話する気なくて、でも先輩に言いたいことがあって」

「お前、何を訳分らないこと言ってるんだ。もう切るぞ」

「俺、ただ先輩に謝りたくて……だから、」

俺は高沢の言葉を最後まで聞かなかった。

「謝って済めば警察いらねえんだよ、二度と連絡してくるな！」

子供じみた捨て台詞と共に通話を切り今度こそ高沢の番号を着信拒否してスマホをぶん投げた。残っていた焼酎をラップ飲みして床に転がりまた起き上がり飲む。そして飲み干した瞬間、素晴らしいアイデアが浮かんだ。そうだ、課長を殴りに行こう。履きなれたビーサンを引っかけて外に飛び出すと日は暮れていて人気もない。駅へ向かう途中いつものコンビニが見えてきた。景気づけに酒を飲みながら会社に殴り込もうと店に入ると若い外国人の男性店員が一人、レジ前で作業していた。他に店員は見当たらない。店員は欠伸をしてからイラッシャイマセと言って顔を上げ……目を見開いて後ずさった。なんだその態度は。俺が苛立って近づくと小さな声で、

「僕、国にお母さんが一人います。お母さん一人。僕いなくなると困ります。お母さん一人だけになります」

何だ？と、立ち止まって店員の顔を見ると目には涙が浮かんでいる。

「お願いで、乱暴しないで。お金あります」

とレジを指さした。俺は強盗だと思われていることに気付いて狼狽えてしまった。深呼吸して「買い物に來ただけだ」と声をかけ、酒を何本か持つてきてレジ台に置いた。店員はとんでもない速さでレジを通して「ビニール袋おまけます！」と言いだした。ちゃんと金を払って商品を受け取り店を出たが、駅へ行くといふ子一人いない。改札口の上にある時計を見ると、つくに終電も終わった時刻でしかも駅前には一台のタクシーもない。おまけに雨まで降りだして会社にも乗らなうとした俺の気持ちはずつかり萎んでいた。祭りの翌日、道端に落ちていた風船をみたくに。

アパートに戻りまた一人酒盛りをしながらスマホ片手に本を開いた。美郷町にはお祭りがいくつかあってその中でも禎嘉王に関係するのは師走祭りという祭りのようだ。息子の福智王が禎嘉王に会いに来るお祭りらしい。その昔船で九州に來た時に親子は別々の海岸に漂着してしまい、禎嘉王は息子がいないまま占いをして住む土地を決めたようだ。チューハイ片手に美郷町ってどんな所だろうと画像検索してみると山間の町だった。日本は山がちだから同じような景色は多いかもしれないが俺の実家の辺りと似ている気がする。次いで祭りの画像を検索するとどの写真にも盛大な篝火が写っていた。炎が周囲を照らして鳥居が黒く浮かび上がっている。福智王は九十キロくらい離れた比木神社に祭られていてそこから来るらしい。俺は祭りの画像を眺めて思う。親子にとつては年に一度の家族団らん、一年振りなら話は尽きないだろう。篝火の炎はとても暖かい光で激しく燃え上がっているのに荒々しさは感じなかった。俺は高校の時に校舎の裏手で焚火をして校長に怒られたことを思い出した。あの時は隆志と裏山の枯れ木を折つてきて燃やした。寒かったから焚火をし

たのだがそのうち他の生徒も集まってキャンプファイヤーみたいなのりになり思い切りはしゃいで校長に大目玉を食らった。その時の炎の色と熱と匂いを今もはっきりと思ひ出せる。皆の声も校長の説教さえも。

気付けばまた眠っていたらしい。相変わらず枕元には本とスマホと酒がある。本を読み検索を繰り返してはまた酒を飲む。酔って寝転がり酒が切れれば買いに行く。

ある日に目が覚めた。日付の感覚はないがオレンジ色の光が窓から入って来るので時刻は夕方だろう。腹が減って冷蔵庫を漁ると消費期限ギリギリの弁当を発見した。ラッキー、と呟いた時スマホの着信音が響いた。横目でスマホを確認すると元職場の同僚・篠山だった。あまり個人的な交流もなかったので突然の連絡を不思議に思いながら画面をスワイプする。

「久しぶり、元気？ 今電話してもいいかな？」

以前と変わらない穏やかな篠山の声に、構わないと俺が答えると、

「もし知っていたら余計なことでごめん。池内君は仲が良かったから知らせようと思って……高沢君、今朝亡くなったそう。会社に残っている同期が連絡をくれてね」

その後どう受け答えしたのか覚えていない。その日から今までに増して酒を飲みまくった。高沢は津波で家族をなくしていた。頼る人もおらず仕事を失う訳にはいかなかっただろう。その事情を知っていたのに俺は怒りに任せて怒鳴り突き放した。あの時電話を切らずに話を聞いていたら、高沢はあの世なんかには逃げずに別の道を選べたのではないか？ そんな考えが頭の中をぐるぐる巡っ

て止まらなかつた。そうしてどのくらい日が経つただろうか。酒が切れて食い物もなく俺はただ横たわっていた。

メールの着信音が耳に入ったのでろろろと起き上がった。図書館からだった。「すでに御返却済みの場合には申し訳ありません」本日、貸出図書の返却日です」自動メールで返却期限を教えてくださいようだ。しばらく読んでいなかったみさと町の本は枕元に見当たらず何故かクローゼットの中にあつた。記憶にはないが汚したくなかつたのかもしれない。俺は図書館へ行かないと、と思つた。それ以外は何も頭に浮かばなかつた。

図書館に着いてカウンターに近づくとこの間のおばさんが座っていて俺に笑顔を向けて来た。俺がぶつきらぼうに、

「これ返す」

と本を差し出すとおばさんは、

「面白かつたかしら」

と訊いてきた。俺が首を縦に振り、

「読みきれなかつたけど」

と付け加えるとおばさんはパソコンを操作して、

「予約している人がいないので貸し出し延長できるけど、どうしますか？」

天井を見上げた。俺、この本を読んで何になるんだろう。そう思ったのに借りる、と答えていた。

手続きを終えてまた本を受け取りカウンターに背を向けると、

「面白い本だったみたいで嬉しいわ。私も読んでみるわね」

とおばさんの声でした。

家に戻ると高沢の通夜葬儀のお知らせメールが篠山から来たがすぐ消去した。行く資格なんて俺にはない。床に座り込むと自然と買ってきたビール缶に手が伸びた。同時に本とスマホを引き寄せる。小説の中に禎嘉王が出てこないことも多い。でも出て来る人たちは王様のことを、故国を、みさとを近くで遠くで想っている。禎嘉王にも想う人がいただろうか。例えば、遠い故郷に残してきた友達とか。

スマホがまた鳴るので思考が途切れた。画面に泰兄ちゃんの名前が表示され俺は膝の上に本を乗せたままスワイプする。

「あ、智也か」

最初のひと言で祖母ちゃんだと分かった。

「……」

「もしもし、繋がってるかいこれ」

隣で繋がってるよ、と泰兄ちゃんの声がある。俺は声を絞り出した。

「……もしもし」

「聞こえたぞ。智也か」

「うん」

「元気か、ご飯ちゃんと食べてるか」

「うん」

うん、しか言えなかった。

「声が聞いて良かった。泰に電話かけてもらったんだ。電話番号知らんし、スマホとやらの使い方もようわからんだが」

泰兄ちゃんが出た。

「智也？ 俺たち祖母ちゃんの見舞いに来たんだよ。そしたらお前の声が聞きたいってさ。祖母ちゃん嬉しそうだ。今日は調子良いみたいでベッドに起き上がってる」

電話の後ろで「いつも寝てるわけじゃねえよ元気だわ」と祖母ちゃんの声が言う。

「あ、廊下でおかんが呼んでる、行って来る」

泰兄ちゃんの声が遠くなった。

「また出たよ、智也。お前、彼女おるか？」

祖母ちゃんの唐突な質問に苦笑する。

「何？ いきなり。今はいない。今は、な」

「ふふふ、今は、か。お前と仲の良かった隆志君、もう子供おるよ。元気な子たちじゃ。昨日、連れて見舞いに来てくれた」

隆志と俺の家族は俺がいなくなっても交流が途絶えなかったらしい。

「なあ、東京は楽しいか」

今の状況を考えてと返答に困るが見栄を張った。

「面白れえよ。祖母ちゃんも遊びにくれればいい。どこでも行きたい所に連れて行ってやる」

他愛もない会話を続けたが俺の限界が来た。言わなければならぬことがある。唾を飲み込んだ。

「なあ、祖母ちゃん。俺、俺は、仏壇の……」

口ごもる俺に祖母ちゃんは何でも無いように、

「おうよ。あの金、お前の役に立ったか」

思いがけない言葉だった。

「お前の役に立ったのならそれでいい。車でも買ってやろうかと思っただけどそもそもお前のための金だ。お前が好きに使えばいいのさ」

あの日、東京へ着いて泊まったホテルでエコバッグの中身を広げた。近所のスーパーひなげしのビニール袋に硬貨ごとに分けられた小銭と郵便局の封筒が入っていた。硬貨だけだと思って持ってきたのに封筒の中にはたくさんの諭吉や他の札が十枚ずつ束ねられていて、数えると全部で百七十三万と五千四十五円あった。その夜、震える手で何度も数えたから間違いない。結局俺は翌年その金を使って専門学校に通い就職先を確保したのだ。あの時の光景が頭の中で再生され、祖母ちゃんの声をよく聞いてなかった。

「智也、聞いてるか。泰が戻って来たから電話返す。お前の事、ずっと応援してるからな」

それが祖母ちゃんの声を聞いた最後になった。

俺は相変わらずスマホ片手に本を読んで酒を飲む。雨の音を聞きながら部屋で座り込んだままだ。なんとなくそうすると祖母ちゃんがいなくなったことも上手く頭に入ってこなくてまだ今日も畑で草とりをしているような気がしてくる。そう、同じように高沢も俺の頭の中にまだいる。隆志も泰兄ちゃんも両親も禎嘉王も百済の人たちも村人も同じように交じり合って俺のいないみさと町でも変わらない日々が送られているような気がしてくる。

数日後、本を読み終わった。図書館へ行って本を返し館内をぶらついて本を眺める。前よりも本は苦手じゃなくなった。イチヤついでるカップルに行く手を塞がれ立ち止まるとそこは旅行のガイドブックが置いてある棚の前だった。気付けば俺は宮崎のガイドブックを手を取っていた。美郷町の記事を探したと思うほどはなかった。でもこの時みさと町が美郷町に、現実に繋がったんだと思う。この町に行ってみよう。思い立ってそのガイドブックを借りて帰った。そしてスマホで宮崎行きの飛行機チケットを手配して経路を確認する。同時にさっき返却した「西の正倉院 みさと文学賞」の本をネットで買った。

旅に出る朝は早朝からカンカン照りだった。多分梅雨は明けているのだろう。途中、習慣でいつものコンビニに立ち寄ると焼酎が目に残まる。夢の中で王様と飲んだ酒だ。王様は居ないだろうけれど俺はどうしても土産に持って行きたくなった。レジにはあの夜の店員がいて俺を覚えていない

のか笑顔で対応してくる。レジ袋を断ってダイバッグにそのまま酒瓶を押し込んだが駅のホームでレシートを見ると「レジ袋大 5円」と言う文字が入っている。あの夜のレジ袋代を取り返されたなど可笑しくてゲラゲラ笑った。近くにいた親子連れが少しづつ離れて行ったが俺は構わず笑い続けて電車に乗り込んだ。

宮崎に着いて美郷町の最寄り駅に移動した。丁度来ていたバスに乗り席に座るとすぐにバスは発車した。俺は窓に頭を預けて景色を眺めていたがいつのまにかうつらうつらしていたらしい。また夢の世界にいた。夜の神社の鳥居の前に老若男女たくさんの人が集まっている。見渡す限り篝火が焚かれていて皆を赤く照らしていた。酒を入れた樽がいくつも置かれていてその周りで人々が酌み交わしている。大柄な男がやって来て「飲むか？」となみなみ酒の入った椀をくれた。知らない顔なのに何故か知っている男だ。どうも、と受け取ると鳥居の向こうから隆志が長身を揺らしながらやって来た。昔と変わらない学ラン姿だ。何でいるのかと尋ねると隆志は「だってここはみさとだろ」と、変な事を聞くなという顔をする。そうだよなと俺も何故か納得する。そして自然に「何も言わずに東京行ってごめん」と口から出た。隆志には体の不自由な家族がいた。家族思いのあいつは町を出ていくことなんて考えもしなかっただろう。俺は東京へ行くことをどうしても話せなかった。故郷を出てからメールを出すこともできなかった。いや、しなかった。悪いのは俺だ。何もかも俺が悪い。

石段の辺りにいる人たちが呼んでいる。俺は皆と一緒に石段の上に立った。子供が二人と大人が

一人、登ってくるのが分かる。小さい方の子供は最後の段をびよんと跳ねて着地すると俺に酒をくれた大男に駆け寄って、

「たぐいま！」

と抱き着いた。もう一人も追いついて、

「たぐいま」

と周りに笑顔を向ける。皆もお帰り、と口々に言う。そこへ大人も登り切って来た。

「お帰りなさい」

大男が子供を肩に乗せて出迎えると王様も微笑んで、

「たぐいま」

と応えた。長く旅に出ていた人が故郷に帰って来たようだった。俺が慌てて駆け寄り持ってきた酒を差し出すと微笑みながら受け取ってくれる。そして酒瓶のラベルを撫でながら、

「行きたい所に行くの良い。俺もここに来た」

誰に聞かせる風でもなくそう言う王様はゆっくり村人の輪の中に入っていく。「土産をもらった！」と瓶を掲げると皆もおお、と声を上げた。篝火の炎はどんどん大きくなっていく。爆ぜてたくさんの火の粉が舞い上がり天に届くと一つ一つが星になって輝きはじめた。そしてみるみるうちに満天の星になる。冬の学校帰りに隆志と見上げた空と同じ夜空だった。

頭が前にガクンと落ちて目が覚めた。気になってデイバッグを確認すると酒瓶はみさと文学賞

の青い本、いつも履いているビーサンと一緒に入っている。ビーサンは以前に高沢と海に行ったときに一緒に買ったものだ。視線を外に向けると霧が出ているのか真っ白だった。その白さに俺は昔、隆志と分けた綿飴を思い出した。開いた窓から流れ込んでくるしっとりとした空気を吸い込むと何故かその瞬間舌に甘さが広がって驚いて手で口を押える。しかし逃げるように味は消えていき本当に甘かったのかも分からなくなった。惜しくてたまらなかった。

霧が薄れて景色が見えるようになる。山の中にいるのが分かる。揺れに身を任せながら、ここから帰ったら隆志に会いに行こうと思った。もう遅すぎるけれど祖母ちゃんと高沢にも。それからまた東京で仕事を探すのだろう。

右も左も山に囲まれている。バスはその郷に向かって山の緑に寄り添うように走って行く。俺は膝の上で本を開いた。





佳作

「ロードフレイム」

潮路奈和



見渡す限り、すべてが朱に染まっていた。

悲鳴と絶叫、刃がぶつかり合う音が耳を突き刺す。

枝葉が焼けた朱の森は、赤い血の色で上塗りされながら、パチパチと音を立てて崩れていく。纏った鉄の鎧が熱く、布越しでも肌が焼けるようで、いつそ脱ぎ捨ててしまいたい。

すべてが燃えていく中で、馬を駆った男に矢が刺さり、男は崩れ落ちるように落馬する。

「なぜ、間に合わなかった……」

何度も見た光景なのに、また同じ言葉を口にしていった。

一

嫌いな映画の音楽がスマホから流れ始める。それ以上流したくないという理由で、智樹はベッドから手を伸ばして、アラーム代わりに音楽をすぐに止めた。

安っぽいパイプベッド。長年使ってくたびれた布団。

古いアパートは和室だった名残で収納だけは大きい。

現実を確認するように智樹は周りを見回した。

初めてあの夢を見たのは、まだ保育園の頃だった。

妙に生々しいその夢は、それから何度となく、ふとした日常の中で現れた。

初めは怖くて泣いてもいたが、小学校に上がる頃には、それが夢だと理解するようになっていった。三十も過ぎてまだ見るようになるとは思っていなかったが。

突然、スマホから派手なポップスが流れる。二度目のアラームは好きな歌にしていた。一日の始まりは奮い立たせて始める方がいい。面倒な性格だと自分でも思う。

智樹はベッドから降りると、音楽を鳴らしたまま、朝の支度を始める。充電しておいたバッテリーや望遠レンズをケースにしまうと、キッチンでコーヒーを淹れ、一口飲んだ。

\*

高円寺のスタジオで淡々とシャッターを切った。

白い小さなブースには、次々と新しい商品が置かれた。

「すみません、この腕時計は文字盤の拡大イメージも撮ってもらえますか」  
「わかりました」

通販サイトのスタッフの頼みに、智樹は最低限の返事で対応した。

このスタジオで働くようになって五年。

智樹は焦ることもなくなつたが、同時に熱意も小さくなっていった。

上京してまでしたかった仕事がかこれかと言われると、智樹も否定する他ないが、だからといって、誰もが作品と言える撮影の仕事ができるカメラマンになれるわけでもない。そこまでは割り切れるが、カメラを捨てるほど、失望するタイミングも失っている。

挑戦することもなく、逃げることもできずに毎日を淡々と商品をできるだけ売れるように撮影していくだけだった。

一通り撮影が終わり、一息ついていると担当者が手土産を差し出した。

「高村さん、よかったらどうぞ」

箱には宮崎マンゴークッキーと書いてある。

「地元の友人の結婚式で」

「ご出身、宮崎なんですか」

受け取りながら智樹が尋ねると、担当者は頷いた。

「……俺も宮崎ですよ」

「宮崎のどのへんなんです？ 僕は市内なんですが」

「美郷です」

担当者は一瞬、首を傾げてから、ああと思いついたような顔をした。

「いいところですよね」

何も触れるものがなかったのだろう。曖昧に褒めた。

智樹の方も慣れてはいる。街から離れた里山など、街で暮らす人間にはぼんやりとしか浮かばない。

実際、自分も上京してから忙しく働いていると、視界に飛び込む人の数に酔うこともなくなった。

それと同時に、生まれ育ったはずの場所も、記憶のひとつとだけのように徐々に輪郭が崩れていった。

「地元、帰ってます？」

「いや……。何かしら理由があれば帰るんでしょうけど」

嫌いというわけではない。ただ、積極的に戻ろうとも思えない。その心の距離感を実際の距離より智樹には遠かった。

盆暮れに帰っていたものが、そのうち小さな疎外感が積み重なって、暮れだけになり、それも歳を重ねるうちに数年置きになっていく。親は元気で弟もいる。それなりにあつちは上手くやっているはずだった。

折り合いが悪いわけでもない。ただ、波長が合わなかっただけだ。

東京に出ると決めたときに、父親からは反対されたが、最後には折れた。反対したのは心配なのかもしれないし、地元と今のような距離感ができると予想してのことだったかもしれないし、単純に戻らなくなることを寂しいと思ったのかもしれない。

何かしらの思いがあると、口にしないまでもわかるだけに、今の中途半端な自分では尚更足が遠のく。別に責められるわけでもなかったが。

「したいことするって、気楽に出てきちゃいましたからねえ」

智樹はそう誤魔化すように笑った。

何かしらの理由。

それは日常の隙間に当たり前のようにやってくる。

たとえば宮崎マンゴークッキーを晩酌のつまみに口に放り込んだときのように。

「親父が倒れた」

弟の華生<sup>か</sup>が送ってきたメッセージは、たった六文字のS O Sだった。

二

帰るには理由がある。

そう言っただけが遠のいたが、理由ができて智樹の足取りは重かった。

延岡の駅を出ると、つなぎ姿の華生が待っていた。最後に会ったのは五年前だろうか。少し大人びた気もするが、無精髭のせいかもしれない。

「久しぶり」

華生はそう言って、すぐそばに停めたワンボックスのトランクを開けた。

「仕事抜けてきたのか。悪いな」

「そんなに忙しくもないし」

淡々としたところは変わってないと、少し智樹はホツとした。

写真の専門学校に進学するために上京した智樹とは違い、華生は地元に残って整備士の免許を取り、そのまま実家の修理工場で働いていた。なんとなく家族や周りは華生が継ぐと思っっている節があるようだったが、当の本人は車いじりが好きなだけで、経営の方は全くらしい。

「親父の状況は？」

「意識が戻るかは半々ってところだそうだよ」

運転をしながら華生が答えた。

「戻っても、前みたいにはいかないだろうって」

それはすぐには父親の禎雄が会社に戻れないことを意味していた。

そろそろ誰かに引き継ぐこともうつすら考えてはいただろうが、具体的に動こうというにはまだ若いと思っただけかもしれない。

従業員は華生だけの小さな工場だ。ただ高村家の生活のすべてでもある。経理をしていた母親も

延岡の病院に往復するようになれば、今までのように働けないだろう。そうなれば、華生がすべての仕事を背負うことになる。得意な人間にもかなりキツイ状態だ。

「何、難しい顔してんだよ」

華生が少し呆れたように言った。

「難しい状況だろ」

「……まあ、楽じゃないけど、まずは親父に会つとけよ」

華生の声色には少し棘があった。

智樹はそれを甘んじて受け止める。帰ろうと思えば帰れたのだ。無名のフリーランスのカメラマンなんて、仕事を繋ぐためには休みがないが、一方で意思さえあれば休みは取れる。

帰る気がなかったと思われても仕方がない。

「兄ちゃん、……美郷は嫌いか」

智樹は答えなかった。

華生もそれ以上は聞かなかった。

病院につくと華生がナースステーションに挨拶をした。そのすぐ隣の個室の名札は高村禎雄とある。

「親父。兄ちゃん、帰って来たで」

華生はさっさと部屋に入ったが、智樹は足がすくんだ。

大柄で豪快な父の面影はどこにもなかった。

横たわった体には管が繋がれ、頭には包帯が巻かれている。

顔色は土気色で、太い眉毛は白髪交じりだった。

帰らないというのは、こういうことだ。

突然、目の前に自分が目を背けた時間を突き付けられる。

たいした何かにもなれず、見栄ばかりが先に立ち、会うべき人間に会うときには間に合わない。

あの夢を思い出す。

間に合わず、火に焼かれていく中で、大事な人間が死んでいくあの夢。

なぜあんな夢を見続けているのだろうか。後悔をするなという警告なら、なんの意味もない。こう

して今、間に合わなかったことを後悔しているのだ。

促されてようやく入った病室で、点滴が刺さった禎雄の手に触れた。

記憶に近い張りは、一瞬安心させてくれたが、それが点滴によるむくみだと気づいて、智樹は自分の浅はかさに陰鬱とした気持ちになった。

### 三

五年ぶりに見た実家は何も変わっていないようで、少しずつ、ガタが来ているのも見て取れた。「高村自動車」と書かれた看板の青いペンキも、もう今ではグレーのような色合いに変わっている。

「帰ったんなら帰ったって言いなさいよ」

台所で料理をしていた美穂が急いで手を拭いて出て来る。

「華生！ スーツケースは廊下に置いて。足、汚れてるんだから」

「兄ちゃんの部屋まで運んどくよ」

「悪い」

「帰った早々、弟をこき使うんじゃないよ」

「勝手に世話焼いてくれるんだよ」

美穂はため息をついた。

「やっと帰ってきたと思ったら」

料理に戻った美穂は揚げ物を始めた。

小さく丸まった背中は、記憶よりずっと小さく見えた。

「母ちゃん、手伝おうか」

「役に立つん？ じゃあ皿出して」

そう言われても、なんの皿かわからない。まごついているうちに降りてきた華生が、さっさと大皿を出して、レタスを千切って敷いた。

「いいから歓迎されてやれよ。今日、唐揚げだし。兄ちゃん、好きだろ」

「たまたまだよ。揚げ物って急に食べなくなるじゃない」

美穂はそう言うが、大量に食べる歳でもない。智樹の為に作ったのは明らかだった。

その日並んだ夕食は、唐揚げにポテトサラダ、猪の角煮だ。肉率の高さは、美穂の中で息子たち

の食事情が二十歳くらいで止まっているとしか思えない。

それでも懐かしい味は、智樹を少しホッとさせた。

「作りすぎだろ」

「若いんだからこれくらい食べられるでしょ」

「いや、俺はもう三十五だし、兄ちゃんは三十八だから」

「いい加減、結婚でもしないかねえ」

「今は絶対結婚って時代でもないから」

美穂と華生が他愛無い軽口のような会話を繰り返していると、禎雄がいないのはただ、ちょっと留守をしているだけのようない気がしてくる。

それでも目を逸らして話が進むわけでもない。

腹を括って、智樹は箸を置いた。

「会社、これからどうする気だ？」

一瞬、しんと静まり返った。

華生と美穂は顔を見合わせるものの、すぐに何事もなかったかのように雑談を始めた。

「明日は私も病院行くから、アンタたちでなんとかしなさいよ」

「冷凍ラーメンあったろ。あとチャーハン」

「あ、東郷のラーメン屋は？」

「いや、話聞けよ！」

智樹は思わず大声を上げた。

「こっちのことは心配しなくていいから」

美穂は真面目な顔で言った。

疎外感のある言葉に、智樹はよけい苛立ちを募らせた。

「これからどうするんだよ。親父が戻るまで、会社閉めるのか？ 誰が営業して、会社回すんだよ。働かなきゃ、親父の入院費だって」

「保険があるしね、なんとかなるでしょう。それより、アンタいつまでいるの。自分の仕事、放出して来たんじゃないわよね」

「俺の仕事はいいんだよ」

「自分の仕事も満足いかないってのに、なんでこっちの仕事にゴチャゴチャと言うの」

美穂は痛いところを突く。

「怯んだ智樹に美穂は追い打ちをかけた。」

「こっちは気にする必要ないから。お父さんともその約束だったでしょ」

美穂は二十年も前の約束を引っ張り出した。

智樹が上京すると決めたとき、禎雄は賛成はしなかった。写真の勉強なんかしても、ここではなんの役にも立たない。

いや、ここに仕事がないとしても、他で働きやすい資格職を目指すというなら、まだ応援くらいはしたかもしれない。

だがカメラマンなんて、一体学んだうちの何パーセントが食っていけるようになるのか、雲をつかむような話だった。

そして食えない仕事のために学費を出すような余裕は家にはなかったはずだった。

それでも半ば追い出すように一人前になるまで帰って来るなという言葉を禎雄は投げかけた。

ここで映画やドラマなら「その反対をバネに這い上がって有名になる」または「全く才能がないことに気がついて故郷に戻ってやり直す」がセオリーだろう。

だが、現実の人生はそんなに簡単な二択のルートは用意されていない。智樹はそのどちらにもならなかった。

専門学校の卒業と同時に、有名カメラマンのアシスタントには落ち続けたが、あるスタジオのアシスタントで採用された。プロへの道は残されたが、かろうじて蜘蛛の糸にぶら下がったような不安感の中でのスタートだった。

それでも真面目な性格もあって、五年も続けるうちに仕事は貰えるようになった。ただ、多くはチラシやカタログ、ネット販売の物撮りだ。

それも十分にカメラマンの仕事だ。それはわかっている。それでも「いつか名前が出るような作品を撮りたい」という感情が、じわじわと「名もなきカメラマンにしかなれない」という感覚にすり替わっていった。

全く知らない人から見れば「夢が叶った人間」で同業者から見れば「写真家にはなれなかったカ

メラマン」だ。

そしてそんな狭間に落ちたグラデーションのような夢の終わりに差し掛かると、幕の引き方を知らないことに気付かされる。そして諦めていく脱力感に比例して、消化試合のように、自分の積み上げたスキルが続くまではと、淡々と仕事を続ける日々の繰り返しだった。

「こっちにいる間だけ、経理見てもらえば？」

味噌汁をすすりながら、華生が言った。

「兄ちゃん、フリーって経理やるんだろ？ 手つかずの俺よりは出来んじゃねえ？」

「そうは言っても業種も違うじゃない」

美穂の抵抗はささやかなものでしかなかった。

美穂も今のままでは手が回らないことをわかつてはいるのだ。

「いる間だけなら」

智樹は洪々という風を装い、了承した。

\*

五年ぶりの自分の部屋は相変わらずそのまま、小学生から使っていた学習机が置かれたままだった。

ベッドには今日干したのだろう。真っ白なシートがシワを伸ばしてかけてある。口ではあの調子だが、美穂はいたるところで智樹が戻ったことを喜んでいるのを隠さなかった。

智樹はデスクの灯りをつけて帳簿を見た。

従業員がいないのが救いだが、機械の支払いが結構残っていた。整備士がひとりでは取れる仕事も限られるのだろう。禎雄もそれはわかっただけはいたはずだが、いざとなればスタッフを入れればいって考えて営業をしていたのかもしれない。だが実際は依頼は右肩下がりになっている。

最近の車は機能性が高い。単なる車検を通す整備ならともかく、電気系統のブラックボックスに及べばディーラー対応が安心と考える人間も増えたのだろう。

元々、軽トラックや農機の整備が中心だが、家用車の対応が減っていく分、高村自動車のようにな小さな個人の工場が生き残るハードルは年々上がっているようだった。

頼みの綱となるのは中古車の販売だろうが、車はそう毎日売れるものではない。

いっそ売ってしまった方がいいのかもしれない。

そんな考えが頭をよぎるが、今の状態では借金が残り、家族の収入源が無くなるだけだろう。手詰まりな感じが、自分の人生を見ているようで、智樹はいっそ笑えてきた。

「こんな状況で、親父は何を考えてたんだろうな」

父親に背を向けたはずなのに、結局父親に問いかけ、自分の幼さを痛感していた。母親にも息子にも言わず、ただ困難にひとり向かって立っている。

あの炎の夢で討たれた武将のようだと、智樹はふと思った。

「馬鹿馬鹿しい。夢はただの夢だ」

笑い飛ばし、風を入れようと窓を開けると、暗い夜空の下で、工場の窓の隙間から灯りが漏れているのが見えた。

もうとっくに工場は閉めている時間のはずだった。

華生がまだ、仕事をしているんだらうか。

帳簿を見る限り、そんなに仕事があるとも思えなかった。

\*

夜になれば外は少し肌寒かった。

工場の重い鉄のドアを押すと、軋むような音がして、華生が振り向いた。

「兄ちゃん」

華生は慌てて手元を隠した。

「何してるんだ？」

どうやら仕事ではないらしい。

華生の手は黒く汚れていたが、車のオイルではなさそうだった。妙な匂いがする。

智樹は華生の後ろを覗き込むと、息を呑んだ。

そこにあったのは作りかけの木彫りだった。

丸い木の板に銅鏡のような文様が彫り込まれている。

細部にまで彫り込まれた模様の精密さに、智樹は驚いた。

「木彫り……?」

「漆器だよ」

手に取ってじっくり眺めている智樹から、華生は作りかけの銅鏡の漆器を取り上げた。

「あんまり見るなよ。素人の片手間だよ」

「いや……十分だろう……」

智樹は圧倒されていた。

ここから出て、何者にもなれないとぶつくさと言いながら、写真を撮ってきた自分が、ただやり

たいというだけで作られた漆器の銅鏡に打ちのめされた気分になった。

自分は本当に写真をやりたくて、写真を続けてきたのか？

そんな風に問いかけられている気がした。

「もう一回、見せてくれ」

洪々と華生は銅鏡の漆器を差し出した。

繊細な細工はどこか懐かしい。不思議な気持ちになった。

裏には鏡面の代わりに、螺鈿が施されている。

智樹は素人でここまでできることに、感嘆した。

「モチーフはあるのか？」

「ああ、兄ちゃんは東京行ったとき、まだなかったもんな、西の正倉院」

確か昔、帰省したときに聞いた気がする。

奈良の正倉院のレプリカを作ると言っていたが、それが何になるのかと思ってもいた。それつきり、そのことはきれいに忘れていた。

「そこに百済の王族の遺品として、銅鏡が展示されてるんだよ。その再現」

智樹は見たことがないはずだった。

それでも触れる指先が、何か伝えてくるようだった。

「他にはないのか？」

「なんだよ、一体」

ぶつぶついいながら、脇に置かれた煎餅の空き缶に放り込まれたものをいくつか取り出した。

漆器として仕上げられた銅鏡はきれいな黒塗りで、作りかけとはまた違う、仕上がった美しい螺旋の縁が自分の姿が映るわけでもないのに、鏡を見ているかのようなだった。

「……お前、本当は美大にでも行きたかったんじゃないのか」

智樹は急に申し訳なくなってきた。

自分が先に選べる立場で、さっさとここを出て行ってしまった。その分、華生が気を使って残ったのだとしたら、自分はこの才能を潰したことになるのだろうか。

そんな智樹の考えに気づいたかどうかはわからないが、華生は首を傾げて考え込んだ。

「いや……。俺はここにずっといるって、昔から決めてたんだよな。そりゃあ、彫り物は好きだけど、独学でやる趣味で十分で」

「東京まで出なくても、福岡にも熊本にも、美術を学べる大学はあるだろう」

「うーん、そういうのとはちよつと違うんだよ。俺は華の次男で、それがちよつと共感できるんだ」

不思議なことを言い出した華生に、今度は智樹が首を傾げた。

「華の次男って、なんのことだ」

「百済の華智王。ほら、師走祭りであるだろう？ 禎嘉王と福智王と華智王。華智王は、父親と一緒にだったよな？ 先に討たれちゃったけど」

電撃が走るような感覚が智樹を襲った。  
繋がる。

あの夢が現実に繋がっている。

あの炎の森で、自分が間に合わなかったと、どうして何度も後悔していたのか。

——ようやく思い出したか。

耳元で、誰かの声がした。

「兄ちゃん、どうしたよ」

「間に合ったのか？ 俺は」

華生は不思議そうな顔をした。

「何言ってるかわからんが、このまま会わないでなんかあったら、兄ちゃん絶対、後悔するだろう？  
だから呼んだんだよ」

外が騒がしくなり、興奮した美穂が飛び込んできた。

「お父さん、目を覚ましたって！ 今！ 電話で！」

ああ、間に合ったのか、今度は。

智樹はやっと、許された気がした。

もともと、誰かが許さないと生きていたわけではなかったが、責められているような感覚にいつも追われていた。

やっと、長い迷路が終わる。

「早く！」

美穂がふたりを手招きし、華生は慌てて黒い手を近くの手ぬぐいで拭った。

四

「シケた面してんな」

数年ぶりに顔を合わせた第一声は、なんともそっけない言葉だった。

「誰のせいだと思ってるんだよ」

智樹も乱暴に返した。

言いたいことはたくさんある。

二度と話せなくなるかもしれないなかった。

間に合わなかったら、きっと後悔していただろう。

自分の結論も、禎雄に伝えることもなかった。

きっと結論が見つかりもせず、ずっとくすぶっていたかもしれないなかった。

華生と美穂が医者のお話を聞く間、部屋に残った智樹は禎雄に伝えることがあった。

「俺、戻るよ」

「帰れ」

被せるように禎雄は言った。

「写真やめてまで戻る必要はない」

「辞めないよ」

撮りたいものは、ここにあった。

遠くにいかななくても、本当はずっと、ここにあったのだ。

「ライフロード。人生を切り取ったロードフレームが、俺が撮りたい写真だよ」

禎雄はそっぽを向いた。

「会社も手伝うし、いずれ経営もやる。でも写真もやる。……俺は、間に合ったから」

もし、あのとき間に合っていれば、百済の王は滅びなかったのだろうか？

そんなことは誰にもわからない。

目の前にあることしか、人は正解を知ることはない。

この答えが正解かは、いずれ未来が決めるだろう。

まずはあの漆器銅鏡を物撮りしよう。  
智樹はそう呟いて微笑んだ。

- 「ふたつの約束」白石未知  
「火伏せ地藏」いっき  
「一かけ二かけ三かけて」夢酔藤山  
「今、ようやく、歩き始めたところ」谷門美昌経  
「いにしえの呼び声」カゲタハルヨ  
「帰る場所」原田なぎさ  
「百済王家の鏡」柚月弘恵  
「師走燃ゆ、百済の風と共に」緋田さと子  
「百済の落人」水撫川哲耶  
「オン・ファイア」T・S・デミ  
「大猪子」洞北亮  
「ロードフレーム」潮路奈和  
「その郷は」羽鳥郁  
「遠い記憶」小平竜平  
「倭の月」松本英太郎  
「夢のまた夢の」雪柳あうこ

## お知らせ

### 第5回「西の正倉院 みさと文学賞」受賞作品が ラジオドラマ化

令和6年1月14日（日）、MRT ラジオにて、第5回「西の正倉院 みさと文学賞」大賞& MRT 宮崎放送賞 W 受賞作品「かざのもりびと」のラジオドラマが放送されました。

「西の正倉院 みさと文学賞特別番組 ～かざのもりびと～」

原作：潮路奈和 脚色：入山さとこ

YouTube でも視聴可能です。ぜひご視聴ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=QKu7qmSmwWw>



# 第6回「西の正倉院 みさと文学賞」作品集

2024年 8月9日 初版発行

編 者 「西の正倉院 みさと文学賞」実行委員会  
(宮崎県美郷町)

装 幀 孝学直

協 力 一般社団法人日本放送作家協会

企 業 版  
ふるさと納税  
協 力 企 業 株式会社イワハラ、株式会社アップス、株式会社長  
田建築企画設計事務所、株式会社アブニール、株式  
会社創建、江坂設備工業株式会社、株式会社ケーブ  
ルメディアワイワイ、三桜電設株式会社、株式会社  
昭栄、株式会社丸誠電器、有限会社前田産業、ICT  
コンストラクション株式会社

校 閲 永松里奈

販 売 部 五十嵐健司

編 集 人 鈴木収春

発 行 人 石山健三

発 行 所 クラーケンラボ  
〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-14 A&Xビル4F  
TEL 03-5259-5376  
URL <https://krakenbooks.net>  
E-MAIL [info@krakenbooks.net](mailto:info@krakenbooks.net)

印 刷・製 本 中央精版印刷株式会社

©Misato Bungakushou, 2024, Printed in Japan.

ISBN 978-4-910315-42-3

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。